
とあるチート転生者

夢見るおろかな人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるチート転生者

【Nコード】

N2204W

【作者名】

夢見るおろかな人

【あらすじ】

神様が寝ぼけて間違えて命の蠟燭を消してしまった。

お詫びとしてチートな能力（知識）を持って自己中な主人公が転生する話

プロローグ

ああ

何故？

どうして？

明日も楽しく遊ぼうと考えていたのに

どうしてくれるんだ俺の楽しい大学ライフ

就職先もほとんど決まっていたのに

こうなったのは数時間前

楽しく友達とゲーセンで遊びまくっていたとき、急に意識が遠のいた。

そしたらひげが伸びた爺さんが土下座していて

「寝ばけてあなたの命の蝋燭を消してしまいました。申し訳ない。

そしてあなたの生きている世界には生き返らすことができない。本当に申し訳ない」といつてきた

どうするんだよこの状況・・・・・・・・・・どーしてくれんだよ順風満帆だったこれまでの人生！！

すると神が「あなたがこれから転生する世界はゼロの使い魔というラノベ

の世界です。まあ3の願いをかなえてあげよう。」
といつてきた

まあ当然だろう自分のミスだから・・・ていうかゼロの使い魔で何だ？

すると神が「その世界は魔法があり魔法の使える貴族が平民を奴隷

のごとく虐げている世界で文明レベルは一部を除き中世だ」といつてきた

そんな物騒な世界に連れて行く気かよ・ふざけるな~~~~!!
・・・・待てよ3つ願いをかなえてくれるといったな・・・・
フフフハハハハハハハハ!!!!!!
これはチャンスだ

「あ、そうそう俺を最強しろとか言う願いは却下するから」と神が言った。

ちくしょうまあいい・ほかの願いを頼もう・

そして俺はこう言った。

「俺が死んだ時までの人類の知識のすべて」
「爵位が高くたくさんの資源が取れる広大な領地を持つ貴族に転生させろ」

「ゼロの使い魔の世界のあらゆる魔法技術」
といった

神は「欲張りなやつめまあいいだろう」といった

よっしゃあああああ~~~~~

神が「まあ行つて来い」といった

意識がだんだん遠のいてきた。まあがんばって生きてやるぜ!

1話

「おぎゃー！おぎゃー！」

これが俺の鳴き声

父の名前はグスタフ・オーレン・フォン・クルップ 火のスクウェア

母の名前はマルガレーテ・ハルバッハ・フォン・クルップ 土のスクウェアで

ゲルマニアの貴族らしい

母「あなたの名前はアルフレートよ」

父「いやいや名前はフリードリヒだ」

母「じゃあ、あなたの名前はフリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップよ」

父「うむ、いい名前だな」

「ばぶばぶ（今から俺の人生が始まるぜ！）」

そしてそれから1年2ヶ月がたち……

「ちちうえわたしはもじをならいたいです（父上私は文字を習いたいです）」

父「もう文字を習いたいか・・よいいだろう絵本を持ってきてやるう」

よっしゃー！

父「この絵本を読みなさい」

といつてく子供の簡単文字絵本>というものをくれてそれを読み始めそれをがんばってマスターしその後どんどん本を読んでいきわからない単語は父や母に聞いてそれをマスターしていった。

父や母はそれを見て「うちの息子は天才だー」とご満悦の様子だった絵本をたくさん読み終え「ちちうえもつとほかの本はありませんか？」と聞いた

すると父は「じゃあ書庫の本を読むといい」といったので書庫の本を読んだ

そして2歳半のときには書庫の本をほとんど読み終え魔法はイメージが大事だということがわかった。
技術しか要求していなかったからどのように魔法を使えばいいかわからなかったからだ。

そして3歳になったとき

「ちちうえ魔法をならいたいです」といったが

父は「お前にはまだ早い5歳になるまで待てといわれた」

うーむ残念だ習いたかったのに

なので5歳まで自分の知識を披露するとき怪しまれないように知識を本に書いておこうと思った

そして4歳のとき

「父上わたしはこの領地の嫡子なので領内を見回りたいです。」といったら

父「うむいいぞ、ただし護衛をつけるからなといった」

そして護衛を数人引き連れて領内を見回った

このクルップ領は「鉄と石炭の町」と知られておりその名の通りたくさん鉄と石炭が取れることで有名だった。そしてこのクルップ領は北東の辺境に位置しているが治安がよく人口は14万人で爵位は侯爵と、とても大きな貴族だった。

クルップ領で一番大きい町はケーニヒスベルグであり人口は2万5000人である

クルップ領の1年の税収は1200万エキユーであり維持費や警備隊の維持費（クルップ家の警備隊は亜人などが出やすいためほかよりも維持費がかかる）を差し引くとクルップ家に入ってくるのは150万エキユーくらいである。

糞なんかはそのまま捨てているので下水道を整備して集めさせて肥料にしようと考えている

そして父に「領内の警備隊はどんなものを使っているんですか？」と聞くと

父「このような装備を使っている」（何でこんなこと聞くんだろう？）と疑問に思いながらも警備兵が使っている装備を持ってきた。

装備は剣や槍や弓そして火縄銃だった。

私は「銃は火縄を使っているんですか？」と聞いた

父は「む・・・何故だ銃はこれが基本だぞ」（変なこと聞くなーわが息子は）

自分が作っておいた知識を本にしていたのを書庫から発見したと偽って見せて

「ここにフリントロック式という発射方法があり
＜引き金を引くと、火打石を取り付けた撃鉄が作動して、火打ち石が当たり金とこすれ火花を発生して、同時に当たり金はその衝撃で火蓋を開き、バネにより瞬時に火蓋は閉じられ、火皿内に火花が閉じ込められ点火するという機構＞という文章と図があります。」という

父は「ふーむ・・・確かに・・・よく見つけたなこんなの・・・よし作らせて見よう」といつて写しを書いてクルップ家の武器工場（といってもとても大きい工房程度）に持っていった。

従来火縄銃よりも装填スピードが3分の2程度となり不発率がとて

も低くなり皇帝アルブレヒト3世献上すると反応がよく」（意識）
これを採用するからたくさん作ってくれ」といった

そして月産1200丁程度生産するようになり皇帝にライセンス権
を売り200万エキューの臨時収入を得た

父は「よくこんなもの見つけてきたな、これでゲルマニアの軍隊も
強くなるだろう。よくやった」と

ほめてもらいました。まあこれで家内での自分の発言権強化につな
がるし運転資金も手に入った。これでライフル銃や後装ライフル砲、
ダイナマイトの開発いそしめるククク・・・フフフ・・・まあまず
蒸気機関を開発しよう。

こうしているうちに私は5歳になった。

父「よし杖の契約を始めるぞ」といった。

ククク・・・これでやっと魔法が使えるようになる。フフフハハハハ！

2話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

五歳になりました。今日から魔法を教わります。

父上が魔法を教える教師を連れてきました。

「今日からあなたに魔法を教えるディートハルトです。よろしくお願いしますね。フリードリヒ様」

よし・・たくさん聞いて上達しよう

「よろしく願います先生」

「えゝではまず基本のレビテーションからはじめましょう・・では『レビテーション！』」

というと目の前にあった石が浮かび始めた。

おゝすげゝ魔法だゝ浮いてるよすげゝと感心していた

「ではフリードリヒ様もやってみてくださいイメージが大事ですぞ」

「はい先生では『レビテーション』！」

重力をなくすように思い浮かべ呪文をとねえた、すると1メートルくらい小石が浮いた

「うむうまいですねさすがグスタフ様の息子ですね」

「では次はフライの呪文です。では『フライ』！」
するとディートハルト先生が浮かび始めたそして降り立った

「先ほども言ったようにイメージが大事です。ではどうぞ」

「はい先生では『フライ』！」

某マンガの0ラゴンボールの舞空術を思い浮かべ呪文を唱えた
すると体が1メートルくらい浮いた。

すると先生はすごく感心していて「初めての呪文で1メートルも浮く
なんてすごいですね」といった

「では、次は属性の確認ですね。自分の属性を把握するのは、メイ
ジにとって大切な事です。これをしっかり把握する事で、コモンマ
ジックや系統魔法に必要な力加減を知る事ができるようになります。

「まず土系統から確認しましょう。手本を見せます……『鍊金』」

すると純度100%の2 سانتくらいの青銅が鍊金された。

な……さすが魔法だ！物理法則無視してるよ！

「ではフリードリヒ様やってみてください」

「はい先生……『鍊金』」

高校のころ習っていた元素式や、結合モデル、電子配置図や、結晶
構造などを思い浮かべながら鍊金をした。すると純度が高い青銅が
鍊金された。

「イメージが……いいですね……一発でしかも高い純度の

青銅を錬金できるなんて」

やば・・・少しやりすぎたのかな・・・
先生自分が作った青銅をまじまじ見てるし「うゝむ」とうなっているし

「では次は火属性を確認しましょう・・・『発火』」
するとボツと炎が出てきた。

「フリードリヒ様どうぞ」

と先生が言ったので何をイメージしようか考えていた
（うゝむあれって杖の先に酸素を集めているんだよねゝいや水素が
なゝなんだろぅ・・・まあいいや
空気中の水素が集まる感じでいこう

「はい・・・『発火』」

すると熱せられた水素に酸素が混ざり・・・

<ドガン！>

そうだった熱せられた水素と酸素が混じると爆発するんだった・・・

「のわ」

「あいたたたた」

「どうしたんだ」

すると父が驚いたのか出てきた

「何故爆発が起きたんだ」

「はい・グスタフ様、フリードリヒ様が発火の呪文を唱えたら爆発したんです」

「いえ、でも『発火』は成功しました。少し勢いが強かっただけです。」

「しかし『発火』が爆発するなんて聞いたことがないような」

「まあいいではもう一回やってみよ」

杖の先に酸素が集まるようにイメージして

「はい父上………『発火』」

するとぼつと炎が出てきた

「今度はうまく行ったようですね……なんで爆発したんでしょうか？」

「うゝむ疑問に残るがまあ成功したんだいいだろう」

「では気を取り直して、水の系統をしましょう………《凝縮》」
すると50 سانتくらいの水玉が出てきた

「では、フリードリヒ様どうぞ」

空気中の水を集めるような感じをイメージして………

「《凝縮》」

すると10 سانت位の水玉が出てきた。

「うまいですねよくイメージできてますよ」と先生が言った。

「次は風魔法です……ウインド」
すると先生のほうから風が吹いてきた

「フリードリヒ様どうぞ」
風を塊としてまあ吹かせるいや流してまわすイメージをして

「ウインド」を唱えた
するとそよ風が吹いた

「うゝむフリードリヒ様は風は苦手なようですね」
どうやら風は苦手らしい自分の得意な属性の順番は火＜土＜水＜風
のようだ

「火と土に関してはスクウェアも夢ではありません。毎日毎日の早
口で呪文を詠唱できるように練習し続けてください。」

1番たくさん使いたい魔法はやっぱり錬金だな
だってイメージだったら結合モデルや結晶構造なんかを知ってるか
らがんばれば金やダイヤモンド、その他の宝石が錬金できるように
なる。

それで金を稼ぎ自分の持っている知識の実現のための資金にする。
実現すれば、俺の立場の強化にもつながる。

ククク……フフフハハハハハハハハ

3話

それから毎日毎日魔法の練習をし続け、半年後には土のライン、火のライン

水のドットとなった。そして錬金はものすごくうまくなった。

父は「魔法の才能があるな、これからの成長が楽しみだ」とほめてくれた

その間に俺は、フリントロック式の銃のときに開発し損ねた銃剣とライフル銃を開発した

「父上、銃の欠点は何ですか？」

「そうだな近距離の威力では弓に勝るが射程距離、装填スピードまあこれはお前の開発したフリントロック式で若干改善されたが・・・まあ後命中率と・・・接近戦だなまあこれは弓と一緒にだなくに槍兵がいないとすぐにやられてしまう。」

「そうですか、じゃあ錬金の得意な人と射撃が得意な人とフリントロック式の銃を1つください」

「む、何故だ、何で銃とひとが必要なんだ？」

「銃を少し改造したいからです。」

「そうか・・・まあいいだろう、やってみなさい。」

「ありがとうございます父上。」

その後2人の人が来た

「錬金の得意なアルフォンスです。よろしく願いしますフリードリヒ様。」

「射撃の得意なフランツです。よろしくお願いします。」

「ではアルフォンスさんこの図にあるものを銃の先端部に合うように錬金してください。」

「はいわかりました。」
すると槍型の銃剣ができた

「フランツさんこれを銃の先端部につけてみてください」

「はいわかりました。」

「む・・・これは・・・銃が少し短い槍に変わりましたね。これで接近戦ができるようになりますね」

「そうです満足しましたか？」

「はいこれで槍兵が要らなくなって銃兵の地位が向上しますね」

「そうですか、私はこれを『銃剣』と名づけますがどうですか？」

「いい名前ですね」

「ありがとうございます。」

「えゝではフランツさん銃を装填して50メートル先 100メートル先 150メートル先の的を10発ずつ撃ってみてください。」

「はいわかりました。では」

フランツさんは50メートル先 100メートル先 150メートル先の的を10発ずつ撃ったが的に当たったのは、50メートル先は10発 100メートルは4発 150メートルはわずかに的の端に1発当たっただけだった。

「ではアルフォンスさん、銃身内に6本の螺旋状の溝を錬金で作ってください。」

「少し難しいですが、がんばってみます。」

「しかし銃身内に溝を作ると玉が引っかかって装填しにくくなり命中しなくなるのでは？」

「まあ作ってみてください。実験ですから」

「はあ・・・わかりました。」

「あ・・・玉も錬金するようお願いします。形はどんぐりのような形に後ろのほうにでこぼこの溝をそこに部分は半円のように丸く溝を彫ってください。あと銃身の直径より少し小さく作ってください。それをまず30発くらい作ってください。」

「はいわかりました」

「できましたフリードリヒ様」

「ありがとうございますではフランツさん銃身内に溝を彫った銃にアルフォンスさんが作った銃弾を装填して50メートル先 100メートル先 150メートル先の的を1発ずつ撃つてみてください。」

「はい……では撃つてみます。」

<ズガン・ズガン・ズガン……>

「アルフォンスさん『遠見』でどのくらい命中したか見てください。」

「はいわかりました。」

「すごい命中率ですね……フリードリヒ様……」

50メートル先の的には真ん中に、100メートル先にもほぼ真ん中に、150メートル先にも中心よりわずか5 سانتずれて当たっていた。

「なんと……銃が溝を彫って玉を少し変えるだけでこんなに命中率が上がるなんて知らなかった……すごい……すごいです！フリードリヒ様！！」

「まあ実験だったんですけどね……じゃあどんどん撃つて性能を確かめましょう！！」

すごい喜びようだな……フランツさん

「はい どんどん撃ちましょう！」

そのあと200メートル、300メートル、400メートル、500メ

ル・・・と的を撃って確かめていったが命中率は200マイルが95パーセント、300マイルは85パーセント、400マイルは70パーセント、500マイルは55パーセント、そして1リーグ先まで玉が届いた

「しかも確かめたんですけど・・・威力も向上してますね・・・銃弾も若干装填しやすくなっているし」

「そうですか・・・じゃあこの結果を父上に報告します。」

「はいわかりました。」

「ではこの銃を『ミニエー銃』と名づけます」

「『いい名前だと思います』」

「フリードリヒ様この『ミニエー銃』をよろしくグスタフ様に言ってください！」

「わかりましたよフランスさん」

この銃をよほど気に入ったらしいなフランスさん・・・ドライゼ銃なんかを作ったらどんな反応するんだろう？まあお楽しみだな・・・まあこれでまたライセンス権を皇帝閣下につけて荒稼ぎできるな・・・
・・・ククク・・・ハハハハハーーーー！！！！

「フリードリヒ」

「はい父上」

「何故銃身内に螺旋状の溝を彫ろうと思ったのだ？」

「はい先日土のラインに到達したのは父上も知っていますね？」

「うむ、それは知っているぞ」

「そのとき『ブリット』の呪文でどのようにしたら威力と射程があるか実験してまして・・・」

「ああだから『ブリット』の呪文を放っていたんだな」

「そのとき風を渦巻状に回転させて放つと威力と射程があがりました、そのとき銃でどのような再現できるかな」と考えて螺旋状に溝を彫ることにしました。」

「うむ・・・そうだったのか・・・よく気づいたな。」

「はい父上、ところでこれは皇帝閣下も注目すると思うのでまた年間ライセンス権が高値で売れますね。」

「うむそうだな、フリントロック式も最初に200万エキュ、その後毎年100万エキュ払うといってきたからな」

「銃剣も含めてどれくらいで売れそうか？」

「最初に400万エキュは下らないと思いますよ」

「そうだな、銃の性能が射程距離と威力が向上し装填スピードもほんの少しあがって銃剣によって

接近戦もできるようになるのだから・・・銃兵が一番強い兵科になったかもな」

「そうですね」

結構自由にさせてくれるな、僕の父上却下されると最初は思っていたけど

「最後にフリードリヒ」

「はい」

「お前が我が家に生まれてくれてよかった・・何か願いはないか？」

「そうですね錬金が得意な人10人と『科学実験室』をくださいそれと剣術を教えてください」

「わかった・・手配させよう・・しかし毎日魔法の鍛錬も欠かすんじゃないぞ」

「はいわかりました」

その後『ミニエー銃』10丁がアルブレヒト3世に献上され「（意訳）なんだこのすばらしい銃とこの銃剣というものはこれが普及すれば、ゲルマニア軍はさらに強くなる。さらにあの伝統にしかするることのできないカビの生えた物どもをさらに圧倒することができるだろう。もっとどんどん作ってくれ」といつてきた。

そしてライセンス料が最初に450万エキュ―その後年間200万エキュ―払うといった

この金を基にして兵器工場をさらに大拡張して『ミニエー銃』を月産4000丁生産できるようになった。

さあ、次は蒸気機関を開発しよう。これによってまずこのクルップ領から産業革命を開始しようそしてほかの誰の領にも負けないように豊かにしよう。

その後はドライゼ銃に紙薬莢を開発して・・・フッフ・・・ハハハハハ・・・

4話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

6歳になりました。

ついに土がトライアングルになりました。毎日『科学研究室』で錬金しまくったかいたがありました。後剣術は父上にとくくくてもスパルタ教育でなんとか半年で

なんとかベテランの傭兵くらいに腕が上がりました。

訓練の思い出は……＜脆い……脆いぞ！フリードリヒ！

「ちよつ（ガキン・ガキン）！」

[illegible]

さて今日は父上と一緒に領内最大の町ケーニヒスブルクを視察しています。

「父上道が少し狭いし、くさいですね」

「む・・これはもつとましな方だぞ、ウインドボナやあの頭にカビが生え、伝統にすぎることしかできないものどものトリスタニアよりも」

「そうですか……」

「そうだぞ」

とはいっても前世の記憶がありあのスクランブル交差点やあの広い道を車が走っていたのを見慣れていたのでせまく感じるのだ

「あ・・・ドロボー!!」
すると

「待てこらーおいこらーまたんかー!」

と警察官が犯人を追っていった。この制度ハルケギニア中どこを探してもここしかないものである

その理由は、ほとんどの貴族が平民を道具としか考えていないためである。そのためあっても市民の自警団あったらいいほうである。そこでフリードリヒは、父に「さらに人口がほしければ治安をさらに高くすることです。それに金なら代々クルツプ家が貯めてきたものとライセンス料があるでしょう」といつてもともとあった自警団を束ねそこにクルツプ領警備軍の一部を加えサーベルやリボルバー（フリードリヒが開発した）と規律と給料を与えたものである。おかげでさらに人口が増え16万人ほどに増えたのである。

「じゃあ屋敷に戻るぞ」

「はい父上」

「ところで『ジョーキキカン』だっけそれを見せてくれるのだろうか?」

「はい絶対驚きますよ」

「ふふそうかあの『ミニエー銃』くらいに驚かせてくれるかな?」

「はい」

そして屋敷にもどった

すると『科学研究室』に入っているアルフォンスさんがまっついて

「どうぞどうぞグスタフ様、こちらへ」

そして目の前に蒸気機関（前世でいうワットの蒸気機関を蒸気圧のかけすぎで爆発しにくいように改良し出力をかなり強化したものがあつた

「これが『ジョーキカン』です」

そして蒸気機関が作動し車輪が高速で回り始めた

「ふむこれがどのような効果を生み出すのかね？」

「はいこれによってまず炭鉱の動力が馬からこれに変わります。すると効率が上がりよりよく石炭が取れるようになります。」

「ふむふむ」

「そして蒸気機関を使った馬車をつくります。」

「何故そんなものを作るのだ馬が動力で十分であらう」

「いえこの蒸気機関馬の数百倍、数千倍働くことができます。」

「なんとそうなのか」

「ではそれを作ってみよ」

「はい父上」

一週間後 試製蒸気機関車（ロコモーション号）が完成した。

「ほうこれが『ジューキキカンシャ』か？」

「はい父上これが蒸気機関車でございます」

そして6リーグにわたって蒸気機関車をはしった時速80リーグで走った

「ほうすばらしいこれが『ジューキキカンシャ』かよし炭鉱から製鉄工場の近くまで走らせててみよ」

「はい父上了解しました」

「しかし少し予算が・・・少々・・・」

「なに人口が増え生産力が上がりライセンス料もありクルップ家の貯金もある」

「はいわかりました」

そしてフリードリヒは線路を敷設するために内燃機関をあとで開発するため

エルフの魔法技術と現代科学を融合させ風石を動力とした人が乗り操作するゴーレム<シヨベルカー>

<ローラーカー><線路敷設君1号>をつくり鉄道を敷設させた。

領内でも風石はまあ取れるがコストが若干高いためこの3つは内燃機関を開発したら（3年以内に開発するつもり）倉庫にお払い使用と思っている。（ヨルムンガントのようなものを作りたいし空中船の動力として作りたいから）

そして鉄道を敷設している間に今使っている溶鉱炉の改良と転炉の開発に入った

（今ある製鉄工房やコークス炉を別の場所に移し今ある兵器工房を新しく大きくし『大規模兵器工場』にするため）

2ヵ月後

1900年代前半レベルの溶鉱炉とコークス炉、トーマス転炉と塩基性耐火煉瓦の開発に成功しそれをたくさん利用した近代的大規模製鉄一貫製鉄所の建造に入った（もちろんそこに鉄道を敷設する予定、完成は2年後を予定しており鉄道の敷設込みこみで総工費2000万エキユーの予定（これでも十分少なかったほう）（資金はライセンス料に一時銃の開発をやめ水晶やダイヤモンドなどの宝石を3ヶ月間ひたすら錬金しまくる。増税なんてもつてのほかだから）鉄鉄は日産250万リールの予定

それに隣接する新型の大規模な巨大兵器工場も作るうと計画している（土地は辺境のため余るほどある）

この計画を見た父は少し引きつったが日産250万リールと1日のコークスの生産量と石炭の産出量を見てすぐに了承した。

そして「この計画が成就したらこのクルップ領はますます『鉄の石炭の町』になるだろうないやお前の働き次第で『兵器』もはいりそうだな。」と父は言った

製鉄所ができるまでの間に石炭を保管するために近代的な大規模製鉄一貫製鉄所の近くに倉庫郡（といっても簡易的な扉と屋根をつけただけ）を1ヶ月間で作った。（もちろんゴーレムも使ったそして4ヵ月後3つのゴーレムのおかげで鉄道が敷設された。

フッフこれがすべてできれば更なる私とクルップ家は繁栄するだろう。

5 話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

あれから7ヶ月たちました錬金しまくった宝石類は（ほぼ天然物と変わりないためクルップ家の買いためていた宝石と偽って）全部で1600万エキュールになりました。

すべて製鉄所の建設費で飛ぶけど、でもおかげで土だけスクウェアになりました。

あれだけ毎日ぶっ倒れながら宝石を錬金していたからな。

さて今日ドライゼ銃（性能はシャスポー銃並）を開発しようと思っています。

ドライゼ銃とはヨハン・ニコラウス・フォン・ドライゼによって1841年にできた世界最初のボルトアクション式のライフルです。

「えゝ今日からボルトアクション式という革新的な機構を備えた銃を開発したいと思います。」

「何ですかそのボルトアクション式というのを採用した銃はどうなるんですか？」

「簡単に言うと後ろから弾を込めることができますようになります」

「あと雷管というものも作ります」

「雷管というのは何ですか」

「雷管というのは衝撃を与えると発火するものです」

「紙製の『薬莢』というものも作りたいと思います。」

「その薬莢というのは雷管と黒色火薬と玉を一体化したものです」

「それをばねに使われた針を打ち出す形で衝撃を与え打ち出します」

「なんですかそのデタラメな銃と玉は・・・すぐに弾を込められるようになるじゃないですか！これでいずれの要素も弓に勝るようになりますね」

「そうですこれでこの銃を装備した兵士は戦場の華ですね。」

「では『銃器開発室』で作ってくるんで邪魔しないでくださいね」
銃器開発室とは父に駄々こねてつくったたくさんの自作の工作機械のあり1から部品を作り部品を組み立てる蒸気機関付自分専用の研究所です。

それを基にした大規模で総合的な規格化された部品を生産できる部品工場と機械工場も作っている（もう少しでできる）

そしてそれを作るのに必要な工作機械の設計図と銃の設計図と雷管と薬莢の設計図を書き『固定化』をかけ保存して
部品を錬金してかけて組み立てた。（工場は蒸気機関を利用した工作機械とベルトコンベアーを使いこの銃を製造する予定）

そして1週間後

「ではこのボルトアクション式の銃、名づけて『ドライゼ銃』のお

披露目式をします」

「はい」

「父上もよく見ていてくださいな」

このお披露目式には父も同席してもらっています。

「うむ、わかった」

「では、ハインツさんどうぞ」

「はいこの『ドライゼ銃』の性能を見てみたいです」

「じゃあ的用意しているので撃つて見てください」

それから200メートル、300メートル、400メートル……

の距離の的を用意して

ハインツさんに射撃してもらった

「命中率は……『ミニエー銃』より若干向上していますね、しか

もこの速射性能が素晴らしい……

……この銃はハルケギニアにある銃の中で1番の銃ですよ！」

「うむこの銃の性能は素晴らしいな」

「このボルトアクション機構と雷管に薬莢の技術でまたライセンス料が稼げるな」

だがこの銃は部品の精度が高いからゲルマニアでもかなり熟練した工房でないと生産できないな」

まああと1ヶ月でこの世界の基準でありえない精度の部品を大量に

生産できる工場と巨大な兵器工場が完成するからな。
そしてこれらの工場の技術はクルップ家で独占する。

「この銃は皇帝閣下が喜びそうだな」

「ええそうでしょうこの銃の性能を見て高笑いしている姿が目には浮かびますね」

「それではこれはまず優先的に領内警備軍に配給しましょう」

「もちろんだ・・・あと1ヵ月後に完成するあのでかい兵器工場と部品工場があれば今建設中のあの大量に金がかかったと同じくらい自信作なのだよ、6ヶ月前急に作り出すと言い出したから」

そうです半年前駄々こねて作った『銃器開発室』をかなり大規模にしたものを作ってもらったことにしました。宝石で鍊金している合間に作業用ゴーレムを作っていたんですから。

「だけどおかげで我が家にあつたまあ、あんまり使わなかったが貯金が大きく減ったな」

クルップ家には、これだけの貴族にもかかわらず歴代の当主は浪費癖がなかったのかたくさんエキュー金貨が眠っていましたからね

「だがこれらのものが全部完成する1年後くらいにはクルップ領は今までのクルップ領とまったく違うものになるだろう、あの巨大な製鉄所に大規模なコークス工場、部品工場に兵器工場に今度鉄鉱石と風石の鉱山と炭鉱（鉄道は敷設してある）に新しい採掘機器を使うのだろ」

そうですトロッコと蒸気機関を利用したベルトコンベアーと改良さ

れたスコップやつるはしや風石を動力としたドリルを作ったのです。

「そして領内警備軍は完全にミニエー銃に置き換えられたからな」

今の生産状況はフリントロック式が月産5000丁ミニエー銃は月産4000丁ですからね

まあ1カ月後にはフリントロック式が月産1万丁ミニエー銃は月産1万6000丁そして

ドライゼ銃月産6000丁を予定しているからな 完成する兵器工場は兵器工場は

「ドライゼ銃」と紙薬莖を皇帝閣下に献上しましょう。」

「うむ」

アルブレヒト3世 side

「む・・・またクルップからの献上品か」

この前の『ミニエー銃』の性能はすごく高かったからな。

「なになに名前は『ドライゼ銃』かよし早速試してみよう」

そして私は家臣のデトレフを呼んで性能の確認をさせた

そして私はこの『ドライゼ銃』の性能を目の当たりにした

何なのだこの銃は・・・速射性といい威力といい命中精度といい・・・ということなしではないか
今までの銃がおもちゃに見える

「す……すごいな……この銃は……ハ……ハハ……
これほどのものを作り上げるとは」

「はい……皇帝閣下……今までの銃とはまったく違って違います」

「それに玉と火薬と発火機構を一体化するとはな」

「薬莢でしたっけこれも速射性を高めていますね」

「しかしこれほどのものを作るとかなり熟練の工房が必要となりますな」

「この『ドライゼ銃』と薬莢と銃剣を有効に使えばさらに皇帝権を強化できるな」

「はい」

「『ドライゼ銃』と薬莢のライセンス権を最初に800万エキユーそのあと年500万エキユー払ってくれるのならばお売りします」
か、まあいいこれだけの銃だ今までもあわせて年800万エキユー程度でこれほどの銃の技術が来るのだ少し高いがまあこれによってゲルマニアはさらに強くなるだろう。

「よし了承しろ」

「あとクルップ家の周りに山たくさんあり亜人がたくさん出てくる
荒れ果てた貴族領があっただろう」

「はい」

「閣下も悪いですね」

「ライセンス権で儲けていたりや最近税収がすごく上がってきているんだ・まあいいだろう」

「そうですね？」

「そんなもんだ」

side out

そのあとクルップ家の元に

「ライセンス権を購入するあとシュテュック子爵領・ヒンデンプルク伯爵領を下賜する」

ときた・・・・ていうかこの2つの貴族量ほとんど荒れ果てて売りに出されようとしている貴族領じゃないか・・・・くそあの腐れ閣下めクルップ家の負担を増やそうとしているな・・・・

6話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。あれから3ヶ月たち7歳になりました。ライセンズ料これはいい・しかしあの荒れ果てた2つの貴族領をよこすとは・・・
・皇帝閣下めクルップの力をそぐ気だな負担の多い貴族領をよこすとは

父上は大規模な山狩りをするらしいそれもあの山々拠点とする盗賊や亜人が多いからだ

そして私にも父はこういいました

「お前も土のスクウェアであり（必死に錬金しまくったから）火のラインの上位（結構練習をした）でもあるのだ、それに剣術もまあベテランの傭兵並でもある（あのスパルタを受けていたからある意味当然）なので領内警備軍3000人（総勢1万5000人）を動員して山狩りをするからお前も参加し実戦を経験しろ。」

「はい父上」

まあ部隊充足率50パーセントくらいにドライゼ銃があるからな弾薬の生産も順調だし

「うむ、ではお前に300の兵をつけるそして指揮の補佐にグデーリアン大尉を当てる。かれは歴戦の指揮官であり土の上位のラインメイジでもあるからな。そしてお前の部隊の兵士はすべてお前の開発した『ドライゼ銃』を装備しているからな」

「ありがとうございます父上」

「いや3000人全員に装備してあるからな」

まあ月産6000丁だもんな3000人だったら余っているだろうな

「じゃあグデーリアン大尉の忠告もよく聞いて兵を指揮するのだぞ、いくらスクウェアでも油断したらすぐにやられてしまうからな」

「はい父上」

「では、いざゆかん」

こうして馬車に揺られながら目的地に着いた

そして父上は指示を出していた。

「第1中隊から第3中隊までは東の山々へ第4中隊から第7中隊までは西の山々へ第8中隊から第10中隊までは南の山々へ行け諸君の奮闘を期待する」

「「イエス・マイ・ロード」」

「よろしい」

ちなみに俺が指揮するのは第3大隊だ

「じゃあ第1中隊は右の山 第2中隊は中央の山 第3中隊は左の山へ」

「大丈夫ですか、フリードリヒ様」

東の山々の山狩りの司令官のモデル大佐がそうだったので

「はい、大丈夫です。亜人や山賊を血祭りに上げます」といったので

「ふふ、頼りにしてますよ フリードリヒ様」

そのあと指示された東の山へ入っていった。

するとグデーリアン大尉は

「この山は広いので、相互に連携しつつ隊を3つに分けましょう」といった

確かに結構広いので

「はいそうしましょう」と了承した

3つの中の1隊を率いて深い山の森のなかを歩いていると土メイジなので土の振動を感知できるのでそれを利用して索敵していると味方の方向と違う方向からの

足音を感じてその近くまで行き見てみると目の前に山賊の砦らしきものが見えました。

なので部下の兵士たちに待機を命じ急いでほかの隊に連絡するように命令しました。

グデーリアン大尉たちがやってきたあと偵察を開始しました

グデーリアン大尉は『遠見』の魔法でそして私も『遠見』の魔法で出入り口や人数を確認しつつ

足の振動などを感知して数はだいたい300人と結構多い数の山賊がいることがわかりました。

砦の出入り口は2つあった

「新しい魔法を使って燻りだすからそれぞれの出入り口に半数ずつの兵士配置して、そして僕が許可するまで砦の中には突入しないで

ください」というと

グデーリアン大尉が「危ないと思ったらすぐに助けを呼んでくださいね」といったので

「わかりました」と返事をした

あたらしい魔法というのは塩素ガスを大量に錬金して窒息死させるという毒ガスの知識を使ったえげつないものであり、ある程度の空間に対して絶大な効果を発揮するものである。ガスマスクを作っていないため下手に近づくと味方にも甚大な被害が生じるため待機してもらった。

「では『錬金』」

高濃度の塩素ガスを大量に錬金して、『ウインド』の魔法で塩素ガスを砦の中に送り込んだ。

すると

「い・・息ができない!」「目がく目がく!」「おえくくくく」

「のどが痛いくくく」「たすけてくれくくく」と多種多様なうれしそ・・・・・じゃなくて苦しそうな悲鳴が聞こえてきた

フ・・・わが領土に略奪をしにくるからだ・・・せいぜい警備軍の実戦経験をつませることと『ドライゼ銃』などの新型兵器の実験台や自分の知識から引つ張った新しい魔法の実験台にしてやる。

そのうち悲鳴が聞こえなくなったので、塩素ガスを錬金で分解した。そして『クリエイト・ゴーレム』で20メートルくらいの鋼鉄製のゴーレムを使い砦の門を破壊して

「突入くくくくく!」と言った。

その後2つの門に150人ずつ突入した。が・・・ほとんどはさっ

きの塩素ガスによって死んでいたり戦闘不能になっており楽に300人を殺すことができた。

するとグデーリアンが

「フリードリヒ様・・・いったいどんな魔法を使ったのですか？」

「いやあ、ただ毒のある気体を錬金して『ウインド』の魔法で送り込んだだけだよ」

「え・・・えげつないですな」

「なに・・・クルップ領に略奪しに来るからだ、当然の報いだ」と会話を続け砦を焼き払ったあと、再び進軍を開始しました。

「さっきのフリードリヒ様の魔法は・・・賊にすこしだけ同情してしまいました。」

「そんなにひどいか？」

「はい」

と適当に進軍しているとオーク鬼の巣が発見された。

つぎは『ドライゼ銃』の性能を確かめたいため

「援軍を呼ぶまでもないな、巣の中に『ファイアーボール』を撃ち込むので巣の入り口から100メートルくらいはなれて3段構えで準備しててください。」

『ドライゼ銃』で3段うちをして絶え間なく銃弾を浴びせようと思います。オーク鬼の皮膚は固いですが、『ドライゼ銃』の貫通力は従来の銃より（マスケットに比べ）高いので難なく貫通できると思う。

「『ファイアーボール』」

と巣の中にファイアーボールを撃つと巣の中から、「ぶぎいー」と聞こえてきて

30匹近くのオーク鬼が出てきた

「1段目撃てー！ー！」

<ズダズダズダーン！>

「2段目撃てー！ー！」

<ズダズダズダーン！>

「3段目撃てー！ー！」

<ズダズダズダーン！>

と銃を射撃し続けた。すると血や内臓が飛び散りながらバタバタバタとオーク鬼が倒れた。

そして出てきたオーク鬼を全部殺したあと、巣の中にナフテン酸とナフサ（ナパーム）を錬金して

『ファイアーボール』を撃ち込んだ。

するとまだオーク鬼がいたのか「ぶぎいー！ー！」という悲鳴が聞こえた。

そしてそんな感じでオークの巣をつぶし続け合計5つの巣をつぶした。

そのあとになにか鉱物資源はないかとやけくそになって『探知』のマジックを使うと

・・・おおチタンの大鉱脈があるじゃないですか。たしかにこの世界だとチタンの有用性はわからないだろうが・・・

そのあと集合しましたが50名が死亡して120名の重軽傷の損害を負いました

ほとんどの巢や山賊の拠点をつぶすことに成功したようです。

『ドライゼ銃』のおかげでこれまでよりも十分に損害を抑えることができたそうです

そのあとそれらの山々に調査をしにいったんですが……ハハハハ……

チタンにタングステン、ニッケルにボーキサイトそして白金や土石やリンやマグネシウムがありました。

鉱物資源やレアメタルの宝庫じゃありませんか……これでわざわざ錬金しなくともよくなりますね。

そのうち開発をしましょう。まあ土石と白金は亜人が大量にいたから開発できなかったんだろうけど

皇帝閣下ごめんなさい……悪口を言いまくって……

ククク………こんなすばらしいプレゼントをくれてありがとう

皇帝閣下！

これでいろんな装甲やものがつくれる

7話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

8歳になりました。あの後父に報告してチタン鉱山とタングステン鉱山と白金鉱山と土石鉱山の開発に入りました。父は「土石や白金の大規模な鉱脈があるとはな、足かせを作られたと思ったら、思わぬところから利益が転がり込んできたな。それとチタンとタングステンとボーキサイトだっけあれで作ったものもすごかったな・・・笑いが止まらんな・・・ハハハハハ」

そうです笑いが止まりません・・・レアメタルやボーキサイトなどが大量に見つかるなんて・・・フフフ・・・ハハハハハチタン合金で作った剣や鎧はそのしなやかさと鋼鉄よりかなり勝る強度そしてその軽さで父をよろこばせ、タングステンを使った銃弾は従来の銃弾よりかなり貫通力が増し（砲弾に使おうと思っっている

ボーキサイトによって精錬したアルミニウムは『軽銀』として売られることになりました。

これらのことで笑いが止まらないのです。タングステンファイラメントとしても使えますし

そしてついに完成したんですよ大規模な近代的な製鉄所が！！

これでたくさんこの世界で超々高品質な鉄が大量生産できるようになります！

年間91250万リールと今までのゲルマニアの年生産量の二倍以上をこの製鉄所で作ることができますようになります。『鉄は国家なり』ですからね、周りから石炭を採ったり輸入したりしてじゃんじゃん鉄を作りましょう。

これによつて鉄の生産にめどができましたからね金属薬莢やガトリ
ング砲そして機関砲に内燃機関を開発しなければいけませんね。（
まあ内燃機関に機関砲は皇帝閣下にはやらないけど）

そしてこの前父から「領内の西の辺境に「燃える水」が湧き出てい
るらしいお前も見てきたらどうだ。」といわれたので行つてみたら、
それは石油でした。内燃機関を開発するので大切な燃料となります
ね、結構大規模な油田ですし、隣の貴族の領主もこの石油の重要性
は理解できないでしょうから。

これから内燃機関を開発しようと思つていますしね・・・あゝ戦車や
航空機を作ろう。

必要なものの知識は頭の中にあるしね。工業力も底上げさせたし・
・そうだ発電所を作つてみよう。

ところで今日は農業生産力をアップさせるために堆肥を作ることに
します。糞を集めるために領内に『指定された場所に糞尿や生ごみ
を捨てる』という布告を出します。それで堆肥に必要なものを集め
ます。それをやとつた100人程度の人に堆肥を作らせることにし
ます。

そのあと農法は休耕地をつかう三圃制だったので休耕地を使わない
ノーフォーク農法を採用して

小麦、てんさい、大麦、クローバーの順で生産するようにと布告し
ました（もちろん栽培する作物は、大量に買つて農民に与えた）そ
して使っている農具も改良した（内燃機関を開発したらトラクター
やコンバインをつかわせようと考えている）

そして今堆肥を作っている

「えゝではまずこの穴の中に生ゴミを入れてください」

「はい」

「では次に落ち葉を入れてください」

「はい」

「土を入れてください」

「はい」

「これらのを何層にも重ねてください」

「はい」

「これを臭くなくなるまで続けてください」

「はいわかりました」

ノーフォーク農法と堆肥によって農業生産が飛躍的に上がり家畜も今までの2倍の体重となり税収もアップした。

これまでの領地改造によって飛躍的にクルップ領は発展し人口は32万人となりケーニヒスベルクの人口も8万人になった。

しかし人口が増え町の収容能力が限界に達したのでオスマンのパリ改造を基にした大きい道路に碁盤目状の道路と上下水道を整備する計画を立てた。

（もちろん製鉄所の建設も含め文句を言われないようにブリミル教の坊主には10万エキュール以上の袖の下を渡している）

そしてつぎに魚の漁獲量を上げるためにどんな漁船を使っているのか見に行ったが

ぶっちゃけ網がものすごく粗末だったので

網を改良して（もちろん自分で）漁師を組織化して1つの会社みたいにしていって大規模な敷き網の漁をするように指示した。

おかげで今までの2、3倍の漁獲量を誇るようになった。

これらの食糧増産策は、税收をアップさせかつ、食料の禁輸に対抗するため

さてこのハルケギニアには保存食料の種類が少なく（塩漬けの肉とあったが味がまずかった）とくに空中大陸のアルビオンには驚いた（ラピユタみたい）あそこには魚がおらず海の幸が珍しいらしい。そこで向上した肉と魚の生産量を利用して、魚の缶詰や豚や牛の缶詰やパンの瓶詰めを売ろうと考えた。（もちろん民間用と軍隊用）

そして作った缶詰を父に試食してもらった。

「ふむ、保存食料でここまでの味を出すとはすばらしい」

「じゃあ、これを大量に作る工場を作ってもいいですね？」

「うむ、いいだろうで値段はどうするんだ？」

「平民が大体少し無理すれば買えるくらいの値段にします。」

「採算は取れるのか？」

「はい大量に生産されるようになったので十分取れます」

「そうか」

こうして作られた缶詰は大ヒットしハルケギニア中でたくさん売られるようになった。

もちろんこれによってさらに収入がアップした。

食糧も増産して町も改造したさあこれで内燃機関の開発ができるようになるぞ

ハハハハハハハハハ

8話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

9歳になりました。あの後油田の開発をして蒸留塔と燃料倉庫と石油と石炭を燃料とする火力発電所を5ヶ月かけて作りました
ディーゼルエンジンにガソリンエンジン
今日ついに内燃機関が完成しました。

今日はそのお披露目式です

「フリードリヒこれは何なのだ？」

「はい蒸気機関よりも何倍もパワフルで効率のよいものです。」

「蒸気機関でも十分すごいのに、こんなものまで作ったのか・・・しかしあの『マキシム機関銃』だったか、あれはすごかったな」
そうでした、この前マキシム機関銃（3脚を使って運用する）を見せたんでしたね・・・あれは部品が多いから月産50丁くらいですからね。

<回想>

「フリードリヒ様これは何ですか」

「すごくてかいですねこの銃？は」

「1週間くらいこもって作っていましたが？」

「はいこれは『マキシム機関銃』といって一分間にだいたい600発撃つことができる銃です」

「確かにでかいですけど……本当にできるんですか？」

「はい」

「しかし本当だったら『ドライゼ銃』以上の化け物銃ですね」

「じゃあハインツさんあそこに用意してあるんで的を撃ってみてください」

「はいわかりました」

「ん……銃に管がついていてこの先に鉄の箱がありますけどこれは何ですか」

「はい撃ち続けると銃身が加熱するので銃身を冷やすために水を入れたものとそれを配給するための管です。」

「そうですか」

「じゃあ撃ってください」

「はい」

「では撃ちます！」

<ズダダダダダダダダーン！>

「……………すごい銃ですね……………重いけど……………でもすごい連射性能です！」

無策に突撃すると即死しますね……………ていうかこれを使っていれば

防御側はすごく有利ですね・」

「すごいなフリードリヒこの『マキシム機関銃』は・・・これが大量配備させられたら騎兵、槍兵なんかは意味がなくなるな」

「はいこの機関銃の餌食になるだけです」

「しかしこの銃は重いぞ普通の銃に比べて」

「はいこの銃は5人で運用しますね3人で銃を運び、1人は水を運び、1人は玉を運ぶのですから」

「そうか」

「これは皇帝閣下には献上しません。」

「む・・・なぜだ？」

「われらクルツプ軍の専用兵器にするからです。」

「代わりにガトリング砲を献上します。」

「ガトリング砲とは何だ？」

「これです」

クランク式ガトリング砲（幕末に使われていたものを若干改良したもの）をもってきた

「このガトリング砲はマキシム機関砲の2倍の重さがありかつ射撃スピードは2分の1です。」

それにこれを作るためには今のクルップ家以外の生産スピードだと1ヶ月に2丁できればいいくらいです。そしてライセンス料もふんだくります。」

「けっこうあくどくないか？」

「いえ、この前の仕返しです。」

「そうか」

「そうです」

「じゃあガトリング砲を皇帝閣下に献上しますね」

「うむ」

その後ガトリング砲が献上されライセンス料400万エキユーが払われた。

回想終了

そしてディーゼルエンジンが稼動し車輪が高速回転し始めた

「フリードリヒこれは蒸気機関よりも付属品があまりなく本体もちいさいな」

「はい、そしてこれは先日採掘を始めた石油から蒸留して取り出した『軽油』を使っています」

「そして蒸気機関よりも効率がいいしパワーがあるか」

「はい」

「そうか」

「そういえばたくさんの土メイジを雇っていたな。」

「はい、石炭を石油に錬金するからです」

「ふむ そうか、そしてこれは？」

「ガソリンエンジンを使った『自動車』です。簡単に言うと馬なしで走る馬車です。そして馬車より早く走ることができ線路は不要です」

「何！・・・そんなものが」

そして父の目の前で走らせて見せた。時速60リーグで

「おお馬車よりもぜんぜん早い！これはすごい！」

「これを作る大量につくる工場を作りたいのですが？」

「うむいいぞ」

「そしてこの鉄の箱はなんだ？」

「これは『戦車』でございます」

前の世界で言う97式中戦車がそこにあった

「みたところ大砲らしきものがついているな」

「そうです。そしてこれは装甲で包まれており後装式ライフル砲の徹甲弾でしか貫くことができません」

「じゃあガリアやトリステインの大砲じゃ貫けないのだな」

「はい、完全にはじかれます」

「すばらしいな」

「はい自動車は献上しますが戦車は献上しません」

「戦車はクルップの専売特許にします」

「そうか」

「はい」

そして自動車が献上されライセンス権は500万キユーで売られ1台3万エキユーで200台発注された

9 話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

10歳になりました。あの後父と魔法の鍛錬と剣術の練習（スパルタ以上の過酷さ）を続け

火がトライアングルに水はラインの上位、風はラインの下になりました。

そして10ヶ月前から今ある兵器工場の動力を蒸気機関から電力に変えてさらに自動車と戦車部門を増設して銃器と大砲と銃弾の部門を大拡張する工事をして1ヶ月前から稼動を始めた。

そして紡績工場に製薬工場に新しくもう一つ缶詰工場も作った

そしてこのハルケギニアでは「場違いな工芸品」とよばれるものがあり、それは自分もといった世界のものであるということがわかったため、買い求めることにした。

するとこの前「場違いな工芸品」を売る行商人がやってきた、そして商品を見てみると雑誌や服や水筒や本があつたが驚いたのは「カラシニコフAK-47」があつたことだそこでこれを買うことにして値段を聞くと500エキュードといってきたのですぐに購入した。

そして商人に「『場違いな工芸品』の

武器を買うからどんどん持ってきてなさい」といった。

あとクルップ家にもとある諜報機関を人員を多く増やし訓練を施してさらに強化した。

こうして総勢2000人以上のクルップ家諜報機関『KGB』が誕生した。

装備は小型カメラに連絡用の小型無線機、サイレンサー付自動拳銃そして不可視のマントなど

そして人口を増やすためにガリアとトリステインと交渉して流民（実際には人口にカウントされていない領地を逃げ出した人々）を選別してクルップ領に送り出す『移民局』を設置した。

おかげでクルップ領の人口は42万人にまで増加しましたし（トリステインからの移民がかなり多かった

まあ流民たちは伝染病を運んだりするから、領主たちにとっては悩みの種でもありますね、われわれも労働者を増やすことができるから双方に利益がある話ですね。

それに上下水道を整備して衛生環境を劇的に改善させましたし製薬工場で大量に薬を生産しているしほかの領地に比べると所得はすごく高い（平均年収は400エキューでトリステインの3倍以上）から薬を買うことができるのでほかに比べると病気で死ぬ確立がすごく低い（病気で人口を減らさないようにするため）

さて今日は父とともにウィンドボナのパーティーに出席することになった。

「フリードリヒ今日のパーティーには皇帝閣下も出席される。まあお前のことも紹介するからな」

「はい父上」

貴族だからやはりパーティーはあるらしいな、あんまり堅苦しいことは好きじゃないが・・・これも義務だな貴族としての、まあうまく立ち回るようにしよう

父はあまりパーティーには出席しないからな。

それにこの世界には美男美女の比率が高い気がする（特に貴族）父も金髪碧眼であって顔も整っている
なので私も顔が整っており某英雄伝の主人公のような顔立ちをしている。

こんなことを思いながら馬車に揺られパーティー会場に到着した。

そしてパーティーの準備を始めるのだった。

そして三日後ウィンドボナの宮殿でパーティーが始まった。

「おお、クルップ侯爵じゃないか」

「やあ、ツエルプストー辺境伯じゃないか、相変わらずだな、そういえばこの前また小競り合いが起きたそうじゃないか」

そうですこのツエルプストー辺境伯とトリステインのヴァリエール公爵の仲は険悪で

何度も小競り合いが起きているのです。

「ああ、そうだったな『ミニエー銃』を使って追っ払ったさ、『ミニエー銃』の性能はすごかったなこの銃は君のところが開発したものなんだろう？」

『ドライゼ銃』はまだわたしていないようですね。それに領内軍は金属薬莢に5連発できる『Gew98』

を今は採用してますからね。それに下士官にはチタン合金製サーベルに自動拳銃を配給していますからね

「そうだ、お気に召したかい？」

「ああもちろん」

「そしてその子がフリードリヒか」

「フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。よろしく願いします。」

「うむこちらこそな」

「キュルケ、こっちに來なさい」

「これが娘のキュルケだ」

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー よ、よろしくね」

「はいこちらこそ」

そんな感じで時間をつぶしていると

「皇帝閣下のおなゝり〜!」

という声とともにアルブレヒト3世がやってきた

そして皇帝閣下はほかの貴族と話して、父が呼ばれた。

「クルップ候」

「はは」

「今までのかなりの新技術、大儀であった。これから期待してるぞ」

新技術のライセンス料は国家予算から出てますからね。皇帝閣下も、

もちろんそれなりの直轄領を持っているから懷はそこまで痛くならないですし、クルップ家もかなり発展して今の税収は1億8000万エキュールですからね。これからも発展させる予定ですからね。もつと税収は増える予定ですしその分国家からたくさん税金も取られるから皇帝閣下にはものすごくプラスなんですよ。

その金を使つて財政的に厳しい下級貴族たちの土地を買いあさりその領地を直轄領に編入してその貴族を官僚化したり平民メイジや平民でも優秀なら登用して（優秀な平民メイジや平民の重用はクルップ領でも行っている）人材の層を厚くして権力を高めていますしね。そして2年前から「ゲルマニア空軍8カ年近代化計画」が始まつて蒸気機関風石併用機関を搭載した空中船を大量に整備する計画がありその7割がクルップ領の巨大造船所で作られることになっており、それとウィンドボナとケーニヒスベルクを中心とした鉄道網を整備する計画も始まっていますし、その建設の7割はクルップがするわけですし（もちろん建設費は国庫から出ている）鉄道の利権の半分以上をクルップがもらっているということになっていますしね。

ほかにも個人的に高級車（ベンツ770k）なんかを送っているし、おかげで皇帝閣下とクルップ家の結びつきはものすごく強固のものとなっていますし。

という感じで時間は過ぎパーティーは終わった。

それから1カ月後

「フリードリヒこれは何だ？」

「これは『サブマシガン』でございます」

そこには第2次大戦でドイツが採用していたmp40があった。

「これはマキシム機関銃並みの連射性能を誇りかつ1人で扱えるように小型化し軽量にしたものです」

「これは・・・またすごいものをつくったな」

「そしてこの32発入りのマガジンを使って装填します。」

「では、撃つてみてください、フランスさん」

「はい」

<タタタタタターン>

「確かによい銃ですね」

「この32発入りのマガジンを8個携帯させて運用します」

「そしてこれは下士官に使わせるようにします」

「うむ」

「そしてこれは？」

「これは『MG34』でございます」

「これは銃身を空気で冷やせるようにしてかつ軽量化し、マキシム機関砲よりも連射スピードをはやくして1分間に900発くらい発射できるようにして、2〜3人で運用できるようにしたものです。」

「これもすごいな、重量を減らし2〜3人で運用できるようにした
ものか」

「そしてこれらを領内軍に配備して、軍の火力をさらに強化します。
」

「そして戦車も改良します」

「そうかこれが配備されたら領内軍はもっと強くなるだろうな」

「はい」

フフフ・・・自分の持つ軍隊は強くすることに越したことはないか
らな。

さて次はいよいよ『航空機』を開発しよう

10話

あれから3ヶ月がたちました。

いやあこの前のあれには驚いたまさか．．．．あんなものが．．．
．ながれてくるなんて．．．．

『デイビー・クロケット』しかも5発も．．．．1本1万エキュ
ーらしい．．．．もちろん買ったさ5発すべて．．．フフフ．．
さあこれは自分に有利になるように有効に活用させてもらっさ．．

．
フフフククククハーハハハハハハー！！

そして2ヶ月前から銃の射撃練習をしている。攻撃の手数は多いほ
うがいいと思ったからだ。

いまは動かない的に関してはほとんど中心に命中するようになった。
なので家臣にゴーレムを作らせて動的的に関して命中できるように
しようとおもっ

今日は単葉機が完成したので父にお披露目式をします。

「これは何だ」

「航空機でございます」

「航空機とは何だ？」

「空を飛ぶ機械でございます．．．しかも風竜よりも早く飛ぶことが
できます。」

「なんと……風竜よりもか……すごいな」

「では実際にお見せいたしましょう」

知識を使いじぶんで実際に飛んでみせた

「ほう……たしかに速いな風竜より」

「ではこれを大量に作る工場とこれを運用する部隊を作りたいのですが……」

「うむいいだろう」

「ではこれを皇帝閣下に献上しますね」

後日『複葉機』が皇帝閣下に献上されライセンス料1000万エキユーが払われた

工期9ヶ月で大規模航空機工場と新たに戦車工場に造船所に、今ある製鉄所にさらに近代化された転炉と溶鉱炉を追加して今ある転炉と溶鉱炉も改良して鉄の生産量を2倍にするのを同時にする計画ができた。

1ヵ月後

「このハルケギニアには何故北欧諸国に相当する部分がないのだろう」

ヨーロッパに似ていますからね地形的に

「ていうか北の部分には海しかないのっておかしいだろ」
島のひとつや二つないというのが引っかけりますね

「まだ探検していないからなのだろうか」

「まあ父に聞いてみよう」

「父上何故この地図の北は島が一つもないんですか」

「それはまだ探検されていないからだ」

「人口に余裕がないからな」

まあ領土は増やせばいいってもんじゃないもんな、だけどこのクルップ領にはガリアやトリステインから大量に移民がくるからな・・・ものすごいペースで、前の人口調査は少しあいまいだったから今回の人口調査は緻密にした結果人口が56万人もいたからな、このペースで進めば人口が100万になるのもそう遠くないな、けどそうなたらいくら領地がとても広くてもいつぱいいっぱいになるな、なのでまだ探検されていないなら北欧諸国に相当するものを探し当ててそこを領土にしてそこに住まわそう。それに確か北欧は鉄鉱石がたくさん取れたはずだし・・・

「父上北方探検をしたいのですが・・・」

「うむ・・・いいぞ」

「ありがとうございます」

「では準備を開始します」

1ヵ月後準備が完了し両用艦20隻2500人、半年分の物資を積んでの『北方探検隊』が結成された

そして改良した航海器具をつかいハルケギニアとヨーロッパの地図を比較して

進路を決めながら航海した

すると3日後……

あっさり見つかりましたね……。島だけど北欧諸国に相当する島が！

早速上陸して調査を始めました。

それから2ヶ月間ジープに乗って島を調査しましたよ……。そしてたたくさんの大規模な石炭や鉄鉱石の大鉱脈が見つかる見つかる、そしてほかにもボーキサイトや銅、スズ、そして金や銀チタンやタングステン、硝石、硫黄、風石に土石などの大鉱脈もたくさん発見されましたね。この島は資源の大宝庫ですね、しかも土地もとても肥沃ですし……。しかも亜人など開拓の邪魔する要素がほとんど存在しなかったのもまたすばらしい……。この島は『クルップ島』と名づけましょう

早速父上に報告しなければ……。・・・・

2000人と大半の物資を島に残してクルップ領に帰りましたよ

このことを父上に報告すると「おおそれは本当か、早速皇帝閣下はこの島の領有を認めてもらおう」

そして数日後「領有を認める」という書状が届き

2ヵ月後

30000人と大量の物資と建築重機と農業機械からなる『第1派北方開拓団』が出発しましたよ

そして港に非常に適する地形に陣取って簡易的な港と町を作っていた2000人と合流して

周りの木々を伐採してその後平地にして、平地をトラクターで耕して穀物が植えられていった

そして伐採した木材を利用して次々と計画的に住居を建設していった。

3カ月後

植えられた穀物が最初の収穫を迎えようとするときに前回以上の大量の物資と建築重機と採掘重機と50000人からなるクルップ島の資源を採掘するために『第2派北方開拓団』が発出した

そしてすぐに鉱山から港までの鉄道が敷設され始めかつ、鉄鉱石と石炭の鉱山の採掘が始まりましたよ

1カ月後

ついに完成しましたよ航空機工場に造船所に戦車工場そして拡張された製鉄所が！

これで鉄の生産量も今までの2.5倍になりましたからね。

すべての自動車工場と戦車工場を合わせてパンター戦車は月産70両、ハノマーク装甲車は月産150両

トラックは月産300両 Sd.Kfz. 222は月産20両

ヴィルヴェルヴェント月産10両

航空機はbf109fが月産80機 he111は月産25機 j

u87は月産40機

今のクルップ領の人口は62万人にまで増えていますからね・・・
領内軍も5万人いますしね

そして『領内軍装甲師団化計画』が発動されましたよフッフ・・・
これが完遂されればわがクルップ軍はハルケギニアのあらゆる軍隊の中で1番の機動性と火力に連携能力そして突破力を誇る軍隊になるだろう。フッフハーハハハハハハ！！

11話

あれから半年がたちました。そして3ヶ月前に十二歳になりました。練習し続けていた射撃練習は、家臣たちにゴーレムを作らせてそれを的にして高速で動かさせても

狙った場所には百発百中するようになりました。

4ヶ月まえから国内の動きがきな臭いですね

「ザクセン選帝侯とブランデンブルク選帝侯が頻繁に会ってますね・

・・・ほかにも

ブラウンシュバイク公爵にリッテンハイム侯爵と大物貴族にも・・・

・
主に皇帝閣下の改革によって割を食っている連中がたくさんあっていますね。

変装して秘密にあっているようですが・・・まあ『KGB』によってすぐにばれますけどね。

たぶん反乱の相談ですね、大方私たちの利権を奪うのが目的ですね・
・さて皇帝閣下にご報告しなければ・・・

アルブレヒト3世 side

「クルップから『最近ザクセン選帝侯にブランデンブルク選帝侯の派閥の動きが怪しい』と報告があった。」

「まあ余もつかんでいたがな」

目の前には、改革によって恩恵を受け領地を発展させている貴族たちがいち

「これをどう思う？ハルデンベルク侯爵」

そこにはクルップからの報告書があった

「はい・・・そうですね・・・おそらく反乱を起こすつもりなのでしょう。」

「反乱を起こす連中は最近の改革で割を食った連中ですね」とオイゲン伯爵が言った

「うむ余もそう思う・・・さてこの反乱未然に防がせるか・・・それともわざと起こさせて反逆者としてそれに賛同した貴族たちを処刑してその領地を余の直轄領とお前たちに加増するか」

「陛下・・・ここは起こさせたほうがいいと思います」

「そうしたら反対者は芋づる式に出てきてまとめて始末できます。」

「ふふ・・・やつらにはゲルマニア安定の人柱になってもらおう」

「では、ハルデンベルグ侯爵、準備を開始してくれ」

「はは」

side out

数日後

「好きにやらせておけ」ときましたね・・・
どうやら皇帝閣下は自分の反対する貴族をこの反乱でまとめて消すつもりですね。

さて私たちも準備しますか

それから4ヶ月がたち

ついに『領内軍装甲師団化計画』が成就しましたよ領内の航空隊も
発足しましたし

現在のクルップ領内陸軍の戦力

パンター戦車600両

4号戦車f型200両

ハノマーク装甲車1500両

トラック4000両

装甲偵察車両150両

対空戦車60両

馬車3000両

15センチ自走砲100門

10,5センチ自走砲150門

牽引式10,5センチ榴弾砲350門

牽引式15センチ榴弾砲200門

8,8センチ高射砲300門

人員60000人

ルフトバッフェ

人員8500人

b f 1 0 9 f 5 5 0 機

j u 8 7 2 5 0 機

h e 1 1 1 8 0 機

現在のクルップ領の人口さらに増加し72万人以上

そして1ヶ月後

「ザクセン侯にブランデンブルク侯が、領民に限界ぎりぎりに兵役を課し始めましたか」

「そして、派閥に属している貴族たちも同様のことをしています。」

「そうですね」

「マンシュタイン將軍、ガーランド將軍、モルトケ將軍、グデーリアン將軍準備はできていますか？」

「もちろんです。フリードリヒ様」

「訓練も大量に行つて、兵の士気も錬度も高まっております」

「整備も惜しみなく行い稼働率は90パーセント以上です」

「そうですね・・・頼りにしてますよ」

「フリードリヒ様の開発した兵器の威力を最大限に發揮して見せます」

さらに1カ月後・・・

「『古きよきゲルマニアを取り戻すために悪逆な皇帝を討つために国を憂う有志とともに「貴族連合」を結成する』か・・・」

「総勢は14万人以上ですか・・・」

「しかしよくこんなに集めたな」

「フリードリヒ様、こちらに7万の軍が向かってきているようです」

「このクルップ領の莫大な生産力を手に入れるためだな」

「1日約10リーグの進軍スピードです」

「しかしここまでは250リーグ以上ありますからね」

「よし予想される接敵ポイントに野戦築城をしましょう」

そしてケーニヒスベルクから40リーグ付近に野戦築城を10日間で済ませた

そして1週間後

「きましたね反乱軍が予想より速かったですね」

今私はマンシュタイン将軍と一緒に30000の兵を持って布陣している

「敵の数は7万に空中戦10隻ですか・・・われわれの2倍以上です
すね」

「しかし限界まで動員しているようですからね、占領地には最低限の警備隊しか残っていませんよ」

「それに、われわれには潤沢にルフトバッフェのエアカバーを受けられますしね」

「それに武器弾薬も腐るほど持ってきているし」

「ははそうですね」

「さあ敵はわれわれの半分以下だこの数をもって突撃して一気に方をつける」

「行くぞ、突撃ー！」

「おおおおおー！ー！ー！！！」

そして戦いは、反乱軍の全軍突撃の号令で始まった

そして突撃してきた反乱軍に、10、5センチ榴弾砲や<MG34>や<Gew98>、<MP40>やパンター戦車の戦車砲などが火を吹いた

そしてハルケギニア史上いまだかつてない絶え間ない銃弾の雨が襲い掛かった

<ズダダダダダダ・ダダダダ・ダダダダダダダダダーン>
<タタタタタタタ・タタタタタタ・タタタタタターン>
<ダダダダダダダーン・ダダダダダダダーン>
<ズドドドドーン>

「ぎゃあー！」「うぎゃあー！」「ぐおー！」

「敵は銃だ、次弾装填に時間g・・・」

こう発言した敵の部隊長は冥界の門をくぐった

「いけー！突撃しろー！」

<タタタタタタ・タタタタタタタ>

「ぎよえ!」「グフ!」「ばんズ・・・」

クルップ軍前線のとある指揮官side

「フハハハハもつと撃て撃て!撃てば当たるぞ!生き残りたければ取り合えず

敵にどんどん撃てー!」

すばらしい・・・すばらしいぞ機関銃は!

「なに、撃つのを緩めておる、生き残りたければ取り合えず敵の方向に撃て!」

「弾に換えの銃ならば、腐るほど在る遠慮せずに、もつと苛烈に敵の方向へ撃てー!」

sideout

sideとある反乱軍兵士

一体なんだ!敵の装備する銃は!

銃弾を雨あられのように吐き出し続ける銃は銃は!

「とつげーき!とつげーき!」

と部隊長は言っているが犬死するようなものだ

「うおおおおー!」

こうなりや自棄だ、この作戦を考えた指揮官を呪い殺してやる!

<タタタタタタタ・タタタタタタタターン>
ああ前のやつが次々とバタバタと倒れていく

あ、横のやつが倒r<ドス>

ああ、足と腹に弾が・・・恨んでy・・・

s i d e o u t

s i d e ブランデンブルク選帝侯

ええい、何なんだ敵の銃は！大量に弾を吐き出し続けるあの銃は！
これでは、突破できない！突破できる前にこちらが全滅してしまう！

「このままでは、埒が明かない！竜騎士を発進させて援護をする！」

「それと空中船も前進させて、地上を援護する！」

「急げ！」

「は！」

s i d e o u t

s i d e フリードリヒ

人の山が突撃していき、次々とくずれていってなくなり、
再び人の山が突撃していき、また崩れてなくなっていく

「フフフ・・・ハハハハハこれがわがクルップの力だ！」

「一方的ですな」

「ふん、われらを敵に回すからこうなるのだ」

「敵が竜騎士を展開！」

「高射砲に対空戦車を使って打ち落とせ！」

20mm機関砲を4門搭載しており弾はすべて炸裂弾で時限信管を採用している。

「は！」

こうして展開してきた竜騎士を対空戦車を使って打ち落とした
<ダダダダダダダン・ダダダダダダダン>

こうして炸裂弾が命中した竜騎士は次々とミンチになって落ちていった

そして

「第1次攻撃隊到着！」

b f 1 0 9 f 6 0 機、j u 8 7、4 0 機が到着した。

そして竜騎士を戦闘機が次々とミンチにして落としていき

急降下爆撃機（1t爆弾を搭載）が空中船に襲い掛かった

s i d e o u t

s i d e ブランデンブルク選帝侯

ええい！竜騎士対策もやはりとられていたか！
これでは竜騎士隊もやばい！

空中船で一刻も早く援護しなければ

「ええい！まだ援護砲撃はできないのか！」

「だめです。まだ距離がぜんぜん遠いです！」

「なんだ！あれは！」

私は兵士が指差した方向を見た
すると竜騎士が次々と鉄の鳥？に落とされていつてるではないか
これでは全滅も時間の問題だ・・

「うわああ、鉄の鳥がどんどん上空から突っ込んでくる！」

そして鉄の鳥は何かを落とした。

それが隣の船に当たり大爆発した

<ドガン！！>

そして空中船は木の残骸となって墜落していった

「うわああ！こっちに来るなー！」

そして私の乗る船にも突っ込んできた。

何かうなり声みたいなのを鳴らしながらこっちに来た

ああ・・これで私の人生も終わるか

side out

sideフリードリヒ

「敵空中船隊は全滅しましたね。墜落した木の残骸で敵に被害を与

えたようですね」

「竜騎士隊もいなくなりましたね」

戦闘機がドッグファイトや一撃離脱戦法を使って次々と落としていきましたしね

そして戦闘機隊と急降下爆撃隊は地上の敵に機銃掃射した後、帰還しましたしね

「しかしあれだけ死者を出しているのにいつこうに突撃をやめませんね」

「すでに4割以上の損害が出ているのに」

「どうやら督戦隊がいるようですね」

「なるほど」

「第2派攻撃隊はあと5分後に到着するようです。」

「そうですか」

side out

「ええい！とつげーき！とつげーき！」

<タタタタタタタ・タタタタタタタタタタ>

「うわあ！」「ぎゃあああ！」「ぐわあああ！」

バタバタと倒れていく。周りには死体が大量に転がっている

「とつげーき！とつg・・・」

叫んでいた部隊長は腹と頭に風穴をあけて地面にたおれこんだ

「死ぬぞー！こんなところにいたら」「にげろー！」「うわあああ
あ！」

そして兵士たちが逃げようとするが

「逃げるなー！戦え！逃げたものは裏切り者として殺す！」

「そんなことがまってるか！」「にげろー！」

「裏切り者が来たぞ！構えー！撃てー！」

<パパパパパパパーン>

「うわあ！」「ぎゃ！」

「畜生、前に進むしかないのかよ！」

こうしてまだ戦いは続く

「フリードリヒ様、第2次攻撃隊が到着しました。」

b f 1 0 9、5 0 機 j u 8 7、5 0 機（ナパーム弾満載）

そして第2次攻撃隊は火薬の集積地や砲兵陣地、食料の集積地、そして敵兵がぎゅうぎゅうに集まっているところにナパームを投下した。

ナパームが投下された、火薬の集積地は大爆発し回りの敵兵を巻き込み

砲兵陣地も火薬が爆発した、その爆発で大砲の弾が飛び回ったり爆発したりして

砲兵はバラバラになったり、火達磨になった。

ナパームが投下された敵歩兵も同様に火達磨になった。

「うあああ!」「ぎゃあ熱い!」「うぎゃあああ!」
と火達磨になった敵兵は叫びながら転がりまわっていた。

そしてナパームを投下し終わったあと敵兵が密集しているところに
3〜4回機銃掃射をした後帰っていった。

そして第3次攻撃隊が10分後到着した。

j u 8 7、50機 b f 109 30機

j u 8 7は不発率をすごく下げたクラスター爆弾を搭載している

クラスター爆弾を敵兵が密集しているところに投下した。

そしたら、どうやら督戦隊が全滅したらしい。

そろそろと敵兵が崩壊し始めた。

そして戦車隊と装甲車隊を突撃させた。

「なんなんだ、あの鉄の箱は!ぜんぜん攻撃が聞かない!」

「来るな!来るな!うわあああああああ・・・!」
突撃して戦車のキャタピラにつぶされた

「あれからはものすごく威力のある大砲が放たれてくる」
<ズドン・タタタタタタ>

射線上にいた敵兵はバラバラになった。

その結果敵軍は完全に崩壊した。

そして「武器に杖をすてて西の山のあの柵の中に行ったら降伏したとみなして攻撃しない」

といったら

ほとんどの敵兵が西の山に我先にと向かった。

1部の兵は抵抗したが戦車隊と装甲車隊によって全滅した。

こうして7万対3万の戦いは終わった。

反乱軍 死者約30000人 負傷者約3500人 捕虜約3500人 行方不明者約1500人

クルップ軍死者55人 負傷者125人

この戦いは後世の歴史書にあまりにも一方的だったことから「アウステルリッツの虐殺」

とされた。

そして3日かけ捕虜は強制収容所に死体は重機を使ってあつめガソリンで火をかけて焼き埋葬した。

1500人ほどの行方不明者はリッテンハイム侯爵が率いて都市に撤退していったが

撤退した都市は別働隊のグデーリアン將軍の部隊（15000人）によって占領されたおり

リッテンハイム侯爵たちは包囲され、リッテンハイム侯は徹底抗戦を呼びかけたらしいが

給料も何も払われていない領民兵（税率も高かった）や忠誠心ゼロ

の傭兵だったため

数人の部下とともに領民兵と傭兵たちに殺され
1500人は投降した。

12話

それから3日後、私はマンシュタイン將軍とともに30000の兵を率いて

敵の領地へ侵攻を開始した。

1日60リーグ以上のスピードで

最初に装甲車や戦車部隊がその後、騎兵隊がさらに後ろに車で牽引される砲兵隊と歩兵部隊が2〜3列になって進撃を開始した。

補給部隊は前線と補給拠点と領地をひっきりなしに往復する。（大量のトラックと馬車で編成された）

そして全部隊に無線が完備されている。そしてルフトバツフェが常に上空を警戒しているおり、そしていずれの部隊も常に近くにいるため

無線で連絡を取り合って連携をとることができた。

2日後グデーリアン將軍の占領した都市に到着し、都市に10000人ほどの警備隊を残して

グデーリアン將軍の部隊とともに再び進撃を開始した

ハルケギニアでは考えられないほど速い進撃スピードで（1日10リーグ以上進撃すると、とても優秀な軍隊とみなされるため）侵攻した。

敵は先の戦いで大量動員してほとんど兵は残っておらず、領主も殺されており

町や都市には治安維持部隊程度しかの起こっておらず、

40000人以上の軍隊が侵攻してきたのをみて負けたのを悟り次々と敵の都市や町は降伏して行った。

そしてそこにいた領主の家族は皆強制収容所に連行した。（普通は

殺されても文句言えないためけっこう甘い処置)

そして6日後にはブランデンブルク選帝侯領最大の都市ベルリンに到達し

ベルリンを包囲した。

翌日ベルリンは降伏した。

そしてブランデンブルク選帝侯が作った凱旋門『ブランデンブルク門』

を通ってベルリンに入場して、勝利パレードを敢行した。

そこで兵士たちは一糸乱れぬグースステップによる行進と騎兵隊と戦車部隊の隊列による行進を

行進曲(前の世界のナチスの党歌『旗を高く掲げよ』や旧ソ連の『モスクワ防衛隊の歌』や『われら人民の軍』、『スラブの娘の別れ』などなど)を流しながら、ベルリンの市民に見せつけ

これでベルリン市民たちは「ああ、負けたのか」と思った。

そして3日後グデーリアン將軍に5000ほど兵を預けベルリンにいてもらうことにして

ベルリンから南のザクセン選帝侯の領都ドレスデンへ向けて

35000人の兵を率いてマンシュタイン將軍とともに侵攻を開始した。

やはり南も限界ギリギリで動員しているので北と同様に治安維持部隊程度しかいませんね

そしてその領主の家族も北と同様の処置をとって

驚くべき侵攻スピードで次々と都市や町が降伏し占領していった

1週間後ドレスデンに到達しドレスデンを包囲

2日後ドレスデンも3万以上の軍勢がやってきて包囲されたためドレスデンには2500ほど兵がいたがかなわないと思いドレスデン守備隊は降伏した。

降伏した守備隊兵は武装解除させそのまま収容所へ連行した。

そしてドレスデンに入場し、ベルリンと同様の勝利パレードを行ったこれでドレスデン市民も「ああ負けたのか」とおもった。ドレスデンを安定化させ

1週間後強行軍で5000の援軍が到着した。

ちょうどそのころザクセン選帝侯の陣地に

『ドレスデンおよびベルリンの陥落』という情報が入り情報が遅れたのは『KGB』が妨害をしたため

補給路も断たれるため

急いでドレスデン奪還のために軍を返そうとしてかなり混乱しているときに

前もって皇帝閣下に情報をリークしておいたため準備していた皇帝閣下の軍が突撃！かなり混乱していた反乱軍は崩壊した。

反乱軍8万で皇帝軍は6万で対峙していたが

最初の突撃で皇帝軍の激しい抵抗にあい失敗したため

ブランデンブルク軍にクルップを占領させてその生産された物資を使い

持久戦をしようとしてにらみ合いになっていたが、

まさかブランデンブルク軍が全滅しベルリンとドレスデンが陥落するなんておもってもみなかったため

この情報が司令部に入ってきたときは驚愕した。

これでは補給路を断たれたままになるし

しかもこのようなうわさが兵士たちに流れ士気が下がったため

急いでドレスデン奪還のために軍を返そうとして混乱しているときに士気が大きく上がった皇帝軍が突撃した

士気が下がり貴族の集まりでもあったためまとまりもかけていたため皇帝軍の突撃によりあっという間に崩壊した。

これによって反乱軍は混乱していたこともあり

ブラウンシュバイク公爵は戦死し、死者10000 負傷者2000
00 捕虜30000の損害を出した

そしてザクセン選帝侯は何とか混乱の渦中から脱して7000の兵をまとめて撤退していたが……

ザクセン選帝侯が逃げてくるであろうポイントにクルップ軍25000が伏せてあり

やってきたザクセン選帝侯軍を包囲した。そして降伏勧告をした

包囲されたザクセン選帝侯は、リッテンハイム侯と同じく徹底抗戦を主張したが

7割はほかの貴族領の招集兵だったため賛同されず

翌日、ザクセン選帝侯は暗殺され、7000の兵は投降した。

そして1ヵ月後には残敵の掃討も完了し

反乱は2ヶ月にも満たないで終結した。

トリステインなんかは介入して領土を拡大しようと準備をしていたが予想よりもはるかに早く反乱が鎮圧されたため増やせなかった

さらに1ヵ月後にはゲルマニアは安定化した

そしてクルップ領（クルップ島を除く）は今までの4倍以上に拡大した。

理由は戦功が一番あったから（ドレスデンやベルリンなんかも占領したり、ブランデンブルク軍を粉砕したため）、それと没収した貴族領が多すぎて管理に首が回らなくなりそうだったから。

しかも北部はクルップ領と一部の貴族（しかもその貴族は先の反乱で跡継ぎとともに戦死した）以外はけっこう皇帝に反抗的だったため（先の反乱でも北部貴族の数が多かった）

それにいち早く占領した土地の安定化もしているため

ブランデンブルク選帝侯領やほかの北部貴族領なんかが編入され前の世界の1740年くらいの東西が繋がったプロイセン王国領並とシュレージエン地方の3割にまで拡大し、

人口も難民や流民なんかが流入したため250万人以上となった。

皇帝直轄領も大部分のザクセン選帝侯領とシュレージエン地方の7割が編入され

そのほかにもいろいろと編入され1740年のオーストリア帝国よりも小さいくらいまで

直轄領が拡大し皇帝権は強大化した

ほかにもブラウンシュバイク公爵領やリッテンハイム侯爵領などがほかの皇帝に従った貴族たちに分配された。

これでクルップ家はバイエルン選帝侯についてゲルマニア第2の貴族になった。

現在のゲルマニアの総人口は約1400万人（戸籍上は）で

皇帝直轄領600万人　クルップ領250万人　バイエルン選帝侯

領150万人

その他の貴族領400万人

まあ早速ベルリンの再開発と戸籍調査に地図の作成、新領土の亜人掃討に、堆肥に輪作の導入を行うことにした。

2ヵ月後、亜人の掃討に戸籍調査、地図が完成した

「あーいそがしい、忙しい」
書類の数が多いんですよ

「けど1ヶ月前に急いで書類処理用にコンピュータを作っておいてよかった」

「あのコンピュータというやつはすばらしいなこれで書類仕事がだいぶ楽になった」

「だけど、忙しいですけどね」

「事務処理のために、優秀な平民を多数雇いましたしこれで何とかひと段落つけそうです」

「うむそうだな」

「未開発地域に鉱山もけっこうあったし、その開発もしなければ」

1週間後

「皇帝閣下がトリステインのラグドリアン湖である園遊会に招待されたらしい」

「それでやはりわれわれも行かなければいけませんか」

「うむフリードリヒお前も来い」

「わかりました」

さらに3週間後

ラグドリアン湖につきました。

はあ・パーティーはそこまで好きじゃあちませんがね
まあこれも義務と思ってがんばりますか

13話

あれから1週間後ラグドリアン湖で園遊会が始まりました。

各国から貴族が集まり1000人以上の貴族がいますね

さてこのトリステイン人口が徐々に減少しているんですよ

理由は貴族が好き勝手に税率が高いからなんですよ。

しかも平民を道具としか考えておらず平民を商人に売ったりしているんですよ

ひどいところは8割、平均は6割、低くて5割 最低でも4割

しかも平民は偉くなれないですよ〜メイジ至上主義ってやつです

なので優秀な平民や野心のある平民や決断できる平民は、ほとんどゲルマニアに来るんですよ

まあその多くはクルップ領に来るんですけどね

この前なんて事務処理能力がものすごく高い人材がたくさん来ましたからね

いまでは行政に財務の達人ですよ

それに汚職がはびこっていますし

その最たる例が高等法院のリッシュモン伯爵ですね。

『KGB』がその尻尾をつかみましたけど

ていうかあれだけ賄賂をもらっていて証拠を消す力はすごいんですね
ある意味才能の無駄遣いですね。

それにトリステインもトリステインですよ。

ぜんぜん気づいていないなんて・・・ある意味この国は終わってますね

あそこにマリアンヌ太后とアンリエッタ王女がいますね

ああ横にるのがマザリー二枢機卿ですね。

2年前に王が死んで以来、今のトリステインは王が空位状態ですからね……

普通はマリアン又太后が女王になるべきですが、何でも喪に服すとかで……

アンリエッタ王女もまだ幼いですし

そのおかげでさらに貴族たちが好き勝手しているんですよね……

このめっちゃやばいカオスな状態の国を何とか保って維持しているのが

マザリー二枢機卿何ですよ……めっちゃ優秀ですよ彼は

長年のトリステインでの激務のせいか髪の毛は白髪になり、

骨が見えるくらいにやせこけているんですよ……

トリステインのためにがんばっているけど、自分の利益しか考えない貴族たちによって

報われず『鳥の骨』と揶揄され忌み嫌われている……

なんて報われないんでしょうこれでもトリステインに尽くし続けるって

かれはトリステインに数少ない真の愛国者ですね

あそこにいるのはラ・ヴァリエール公爵ですね

トリステイン最大の貴族で王家の傍流何ですよ

金髪で見事なひげを生やし左目にモノクルをはめていて

いかにも貴族！って感じの威厳ですね。

本人も優秀な軍人で政治家らしいですね……しかし3人の娘にはものすごく

甘いんですよ

しかし奥さんのほうがものすごいんですよ。なんでも現役時代は『

烈風カリン』

と呼ばれていてトリステインの魔法衛士隊のマンティコアの隊長で曰くブレイドで船を切り裂いたとか曰く1人で1個艦隊の戦力だとかとにかくものすごいわさをもつ人物らしいですね

ああ、あれはグラモン元帥ですね。

トリステイン軍の元帥で軍の最高司令官の一人ですね

4人の息子がいるようですが・・・どれも女癖が悪いんですね

しかもクルデンホルフ大公から借金をしているんですね・・・

グラモン領自体は悪い領地じゃないんですが・・・

極度の戦争バカでして税収のほとんどが軍備に向かっているんですよ

「陣地構築の才能はトリステイン1」といつていますが

平時にはまるで役に立たないんですね・・・

しかも4人の息子もその道一直線ですし

ああ、あれはガリアのジョゼフ王ですね・・・

彼は『無能王』なんて呼ばれています・・・

無能なんてとんでもない！彼は化け物ですよ！

政争激しいガリアを安定化させており、魔法も『KGB』からの報告で

すぐ爆発するらしいですけど・・・クルップ家にいる研究者からは『虚無』の可能性が高いらしい

もし魔法の才能を抜いても、ほかの才能は鬼才と言っても過言じゃないです。

それに王としての才能に魔法はいりませんし・・・

魔法至上主義の弊害ですね・・・もしも彼が平民だったなら私は彼を

大枚はたいて

喜んで雇いますよ・・・

皇帝閣下には悪いですが閣下よりもすごく才能がありますよ

それに彼はブリミル教を憎んでいるようですネ・・・まあ私もブリミル教は

完全に悪いとは言いませんが、1度壊したほうがいいかもしれません

そしてあれはロマリアの神官たちですね

ぶっちゃけまともな神官なんてほとんどいませんよ

ほんと平民から寄付という名の略奪をしたり

ロマリア本国の神官なんて腐りきった貴族よりもかなりたちが悪い
ですしね

ガリアやゲルマニアは関税をかけすぎないほうが儲けられるとして
ぜんぜん関税は掛けられていませんがロマリアはものすごく高いです
からね

おかげで『俗物坊主』と呼ばれていますけどね

まあワインを一口飲んで食事を楽しんでラグドリアン湖を見にい
きますか

数時間後

さすが水の精霊がすんでいるといわれるラグドリアン湖ですね
ものすごくきれいですよ

このトリステインは水の国と呼ばれるだけあって土地は肥沃なんで
すけど

これも貴族のせいで開発が進んでいないんですよ

って、アンリエッタ王女何こんなところで油売ってんだよ

アンタは王族だからもう少ししっかりしてくれよ

はぁ・・・他国の人間なのになんで心配しないといけないんだか

しかもどうやら盗み見ているやからがいるようですネ

早速その輩の顔を見てみますか・・・

つてウェールズ王子あんたもか！

金髪金目の美形で、都市の割には聡明で優秀と聞いていたが大丈夫かアルビオンもこの前モード大公が粛清されてそれと同時にサウスゴード伯爵を筆頭に多数の南西部の貴族が粛清されたからなそれに最近レコンキスタなる『聖地奪還』を目指す組織が台頭してきているからな

内乱が起こりそうなので小麦や硫黄や硝石を大量に買い込んでいるからね

まあなんらかのきっかけができればそこに盛大な火をつけようかな

「おい、そこで何している」

「うわぁ」

勢いあまって倒れた

「ウ・ウェールズ様？」

「ア・・・アンリエッタ」

「き・・・君は誰だい？」

「フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。」

「ああ、あの『兵器王』のクルップね」
銃器や大砲を大量に納入していることからこんな名前がついたんですよね

事実この前の内乱の大半の剣や槍や銃、大砲はクルップ製でしたし

「あなたは？」

「ウェールズ・テューダーだ」

「これは、失礼しました。王太子殿下」

「いいよ、僕が悪い部分が多かったんだし」

「ありがとうございます」

「しかし君の家は物騒な呼び名を持っているな」

「まあ、本当のことですので」

「あと『缶詰』も有名だね、あれで海の幸が身近に食べられるようになったよ」

「それに水の秘薬じゃないけど、風邪によく聞く薬とか止血剤とか薬品も有名だね」

「香辛料も前からは若干安くなったし」

この世界香辛料が以上に高くて金と同じ重さで取引されていますからね

だから香辛料製造のために巨大農業プラントをいくつも作っているんですよね（知識を使って）

「ところでお二方あなたたちは王族です。パーティーはどんなされたのですか？」

「う……………」

「ん……………」

おおかた身代わりを立てたかすっぱかしたんでしょう

「まあ、見た感じ私は邪魔そうなのでこれで失礼します」

2日後

5力国が見世物という名の軍事力を見せ合う会がおこなわれた

トリステインは国内最精鋭の魔法衛士隊による
魔法や剣術をみせつけ

ロマリアは、同様に聖堂騎士団をつかった複数人数による詠唱による大規模魔法を見せた

アルビオンは、自慢の竜騎士隊と空中艦隊を使って演習を見せた

ガリアは、魔法先進国であることから精鋭の花壇騎士団や進んだ魔法技術をつかった

巨大なガーゴイルを見せ付けた

そして最後にわれらがゲルマニアは、空軍近代化計画によって完成した

全鋼鉄製の石炭風石併用機関による空中艦隊を見せつけ
ひととき目立ったのは中央の総旗艦『アルブレヒト3世』であり
皇帝の名を冠した全長230メートルとアルビオンのロイヤルソブリン号よりも大きく

性能は桁違いにちがった

ここまで大型でありながらコルベット並みの機動性を実現しているからだ

機関も石炭重油風石併用機関である

武装は両側に旋回砲塔式超砲身連装22 سانت砲を4門ずつ搭載されており

副砲として両側に100門ずつ後装式ライフル砲が、甲板には対空砲として

射程と連射スピードを向上させた改良型ガトリング砲が搭載されていた。

もちろん新型艦隊の甲板には改良型ガトリング砲が搭載されているちなみにこれらはもちろんすべてクルツプ製である

そしてこれらの新型艦隊による大火力を見せ付けた。

そして数日後ラグドリアン湖の園遊会は終わった。

そして領地に帰り

工期を2年として領内各地の都市をケーニヒスベルクとベルリンを中心として鉄道と道路網を整備し

たくさんある鉱山を開発し近くに鉄道を引き鉱石を精錬所や製鉄所に大量に早く持つていけるようにした。

ベルリンの近くに新たに大規模な缶詰工場や部品工場、製薬工場、兵器工場、精錬所を作ることにした

そしてダンツィヒには大規模な造船所と兵器工場にコークス工場そしてケーニヒスベルクと同等の規模の製鉄所に精錬所を建造する計画を立てた。

そして「領内空軍4カ年近代化計画」をたてた

今の領内空軍は人員8000で大小合わせて100隻運用しているが（ゲルマニアでは）少し旧式化してきたので（ゲルマニア空軍近代化計画のあり）

第2次大戦型でガーゴイルとロボット技術によって人員を削減し対空兵器をかなり強化した戦艦5巡洋戦艦5重巡洋艦8軽巡洋艦15駆逐艦50コルベット100航空母艦4、人員60000人に整備する計画を立てた

この計画のために領内にある12の造船所の中の半分を使い計画を完遂する

14話

フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。

15歳になりました。

あれから2年がたちました。

日々の魔法の鍛錬のおかげで火がスクウェアに、水はトライアングルの下になりました。

そして領内で続いていた製鉄所や鉄道敷設計画、造船所の建造に各種工場の建設計画が完成しました。

そして1ヶ月前

アルビオンで前からつかんでいた『レコンキスタ』と名乗り北部諸侯が蜂起した

「腐った王家と国の部分を除き貴族による理想政治を行い『聖戦』を発動し聖地を奪還する」

という数年前に起きたゲルマニア反乱の貴族連合のスローガンに毛が生えた程度のスローガンで蜂起した。

しかも蜂起した貴族の内訌を見ると、領地がやばい状態になっていたり不正がばれそうになっている

貴族の割合がすごく高くこれじゃあ逆だなよい部分がなくなり腐った部分が残る

しかしどこからか資金が潤沢に配給されているようだな

まあガリアからだという情報が『KGB』から入ってきたけどね
証拠はこの写真にこの反乱の首謀者とさせる『オリヴァー・クロムウェル』と一緒に写っているこの黒髪の女だな

この女は1年前にガリア王ジョゼフが召還した使い魔、神の頭脳『

ミヨズニトニルン』だな

名前は『シェフィールド』というらしい。川の名前だな

それにオリヴァー・クロムウェルってイギリスで同じくテューダー家の王を処刑した

清教徒革命の首謀者と同じ名前だな。

やはりこの世界はヨーロッパと似ているな

それは今から１１ヶ月前

今来た報告書に目を通して「アンドバリの指輪が水の精霊の祭壇から盗まれた」と書いてある

ラグドリアン湖から『アンドバリの指輪』が水の精霊の祭壇から盗まれたらしい・・・水の精霊って意外とバカなんだな。

精霊ならば盗まれる前に気づくだろうし

えゝなになに

『アンドバリの指輪』は水の精霊の秘宝で死者に偽りの命をあたえたり、生きているものは洗脳したりできるらしい・・・

なんだよこのとんでもアイテム・・・領民たちにはエルフの技術を使ってこの指輪の効果を無効化するポーションを無料でワクチンを接種するといって投与しよう

しかもこれを盗んだのが先日召還されたジョゼフ王の使い魔『シェフィールド』と

ロマリアの平民司教『オリヴァー・クロムウェル』という人物らしいその後王家と貴族との間に大きくしこりが残っているアルビオンに向かったらしい

この情報を手に入れるために苦労しましたよ

情報の探りあいではガリアの一応実在しないとされる北花壇騎士団と『KGB』は

軽い抗争状態に突入していますからね。

ただこちらは装備も数もあちら側とぜんぜん違いますから圧倒的に勝利しているんですけどね

敵の諜報員は領内に入るまでに死体ごと消されたり

飯には入れたとしても『KGB』のほかには領内にはもっと怖い『ゲシュタポ』がいますからね
すぐに消されますよ

だけど何故アンドバリの指輪なんて盗ませたんだろう？
アルビオンに向かったということは・・・まさか内戦を起こす気か？

うゝむよし買いだめを一応しているがさらに買いだめさせよう

呼び鈴で部下を呼び

「はい何でしょう？フリードリヒ様」

「小麦に硫黄に硝石など食料品と火薬の材料を大量に買い占めてほしいんだけど」

「はいわかりました」

「それと大量に倉庫に残っているミニエー銃の溝の本数を6本から3本に減らしてくれ」

まだミニエー銃などのライフル銃は他国にあまり流出していませんからね

フrintロック銃やサーベルや槍（どれも高品質の鉄でできている）

と普通の大砲を射程を1／5倍に伸ばしたもののなんかを他国に大量に売っている

「それとフリントロック銃にライフリングを3本彫ってほしいんだけど」

「はいわかりました」

これから買占めを続けて11ヵ月後

「フハハハハ！やはり反乱が起こったか」

「倉庫にある大量のフリントロック銃やミニエー銃は『モンキーモデルミニエー銃』になったわけだ」
旧ソ連でやっていたような手法です

「それに劣化版ガトリング砲に前装式ライフル砲も売るぞ」
閣下にはこの反乱を利用してアルビオンの国力を著しく落とすことを話し

これらの兵器の売却許可をもらったし

「これで王党派、レコンキスタ双方から金を限界まで搾り取ってやる！」

「フ・・それではまず早く双方の備蓄物資を消費させるために『KGB』を使ってこれらの物資集積地を燃やさせよう」

「そして双方に接触して『私掠船』の許可をもらおう」

こうして2ヵ月後には双方ともに備蓄物資と兵器を使い果たしそう

になった

そして双方から『私掠船』の許可をもらった。
双方ともに4割の利益を渡せ、だそうだ

「よし今からこれらの兵器を販売しよう」

こうして双方に兵器と物資を売りはじめた（レコンキスタのほうには王党派より割高に）

そしてクルップ以外の船を『私掠船』として（名目上ゲルマニアは中立となっているため蒸気機関を搭載した船は使えなかった）偽装したレーダーを使い探査して片っ端から襲った。（クルップの船には敵味方判別装置がついており、同士討ちを防いでいる）

私掠船は中型で船の重要部分は複合装甲によって防護されており風石機関もエルフの技術を使い効率よくエネルギーを使うことができクルップ以外の船より1.5倍のスピードを出すことができた。

そして大砲は改良型アームストロング砲（射程を2.5倍に延ばし強度を増したもの）に炸裂弾や霞弾、焼夷弾が搭載されており竜騎士対策として魔力探知式の手打ち式ステインガーミサイルが搭載されている

兵器や物資を運ぶ船はこれを大型化したものを使っている

このように活動した結果、アルビオンへの航路はかつてないほど危険な航路になった

6ヶ月間で双方から合計で2億5000万エキユーもの金を搾り取った。

5力国の国家予算はガリアが4億エキユー、ゲルマニアは5億5000万エキユー（最近改革によってさらに国力が増したため）アル

ビオンは1億2000万エキュー、トリステインは5000万エキュー

ロマリアは年々変動するためだいたい4000〜6000万エキュー
ちなみにクルップ領の税収は2億8000万エキュー

皇帝直轄領の税収は3億5000万エキュー

アルビオンはこれらの新兵器のおかげで
今までの戦争の3倍以上に死傷者が増え
アルビオン内戦は泥沼化した

そして私掠船の活発な活動によってクルップの船以外はアルビオン
への航路は超危険となった

さらに1カ月後私はアルビオンの王宮に呼ばれウェールズ王子と謁
見した

「やあフリードリヒ、園遊会以来だね」

「はいそうですね、ウェールズ殿下」

「この前一緒に私掠船に乗っていた空軍士官は「クルップの大砲の
威力はすさまじい」といつていたからね。あつという間にレコンキ
スタの軍艦が穴だらけで火達磨になって墜落していったらしいね」

「残念ながらその大砲と弾と火薬は売れませんよ」

クルップ領内軍ではもうこの大砲は完全な旧式なんですけどね

「わかっているよ」

少しウェールズ王子は厳しい顔をして

「君は王党派が買ったら何を要求するんだい？」
ときいてきたので

「そうですねアルビオン国内でのさらなる優遇処置に国内すべてを
無関税化することですね」

「へえー君は貴族なのに、まるで商人のようなことを要求するんだ
ね」

「ええ、見栄を張るにも何事をするにもやはり先立つものが必要に
なるわけですし」

「話は変わるけど、レコンキスタもクルップ製の兵器を使っている
ようだけど・・・」

「多分それは私掠船に奪われたものですね」

「数をそろえて襲われたら、いくら新型大砲を装備していても数の
暴力で対応しきれませんから」
もちろんうそ襲ってきた船は片っ端から落とされている

「へえーまあその言葉を信じることにするよ」

こんな感じで1時間が過ぎウェールズ王子との謁見は終わった

さらに2週間後

レコンキスタ盟主のオリヴァー・クロムウェルと会う事になった

レコンキスタにものを売る際は、探知のマジックに引っかからない改良した

年齢と身長、顔を偽ることのできるエルフの技術を使った、フェイスチェンジのマジックアイテムを使っている。

変装したときの名前は「ビクトル・ボウト」と名乗っている

そしてクロムウェルに会うために彼がいる宮殿に行くために馬車に乗った

そして宮殿に行く道中に大規模な錬兵所が見えた。
銃声が聞こえてきた

< パパ パパ パパーン >

< パパ パパ パパーン >

< \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ >

そして宮殿に着き謁見の間に入った

「おお！ミスタ・ボウトよくきてくれた」

「お初にお目にかかります。オリヴァークロムウェル様」

「ミスタ・ボウトが持ってきてくれる、武器と物資はもぞすごく役に立っているよ」

「そうですかありがとうございます」

そしたらなんかアンドバリの指輪を見せてきたので（もちろん部下たちは全員効かないが）

「ミスタクロムウエル、そのアンドバリの指輪を見せて誰を操ろうとしているのかな？」

「っ!!」

ああ驚いている

「まさかあなたにクルップ製の武器を売ってあげているビジネスパートナーを操ろうなんて・・・考えていませんよね？」

「も・・・もちろん考えてないとも！」

絶対考えていたな多分なんでこのことを知っているんだて思っているんだろっうな

秘書をしている本当の指導者『シェフィールド』に報告するんだろっうな

「本当ですか？・・・互いが信じられなくなったら商売はできませんよ」

「さっきの行為であなたの信用はけっこう落ちましたよ」

「それに秘書のシェフィールド殿の指導でこの組織は運用しているのですか？ロマリアに未練はありませんか？」

「っ!!」

ここまでいっただらお前のことはすべて知っているぞ!といってるよっうなもんだからな

「よく・・・そこまで知っているね」

「ええ情報の速さは商人の生命線にちかいですから」

「た．．．頼む．．このことは．．内密に」

フ．．．お願いしてきたか．．さらに搾り取ることにするか

「ええいいでしょう．．しかし私たちがモノを買う際はさらに箔をけっこうつけて買ってもらうことにします。」

それに最近は活発すぎる私掠船の活動でクルップ以外の船は少なくなっているからね

「それと、次にこのような行為にいたったら．．．あなたのことをばらしますよ」

「わ．．．わかった」

そうしてクロムウェルはがつくりうなだれた

こうしてさらにレコンキスタ側から金を搾り取っていった。

そしてさらに6カ月後

16歳になりました。

双方から私掠船の利益も含め総額4億8000万エキュも搾り取ることができた

レコンキスタ側の財政はかなり厳しいようだねまあどこからか潤沢に支援が来てるようだけど

王党派もけっこう厳しくなりつつあるようだね

双方クルップ製の兵器に食料そして火薬の材料を買うために必死になっ

て買っているからね
そして私掠船の活発な活動の結果アルビオンへの航路は『魔の航路』
とまで言われるようになったね

いまは報告書に目を通した後
父と話している

「お前も3カ月後には「ウィンドボナ魔法学院」に入学しなければ
いけないな」

「はい」

部下が部屋に入ってきて
「グスタフ様」

「む・・なんだ」

「皇帝閣下からの手紙です」

「えゝなになに『フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバ
ツハ・フォン・クルツプに命ずる

トリステインの内情視察のためにトリステイン魔法学院へ入学せよ』

」

「えゝゝゝゝゝ!!」

「どうやらお前にトリステイン貴族はどのようなものかというのを
見てこいつて行っているようなだな」

「それに準備も完了しているらしい」

「どうやら行くしかないようですね・・・」

はあゲルマニアを蔑視している貴族がほとんどのトリステインに行
けて事ですね

まあいいですよ・・・がんばって切り抜けよう

15話

あれから3ヶ月がたち

ついに来ましたよトリステイン魔法学院！

領地から2週間掛けてやっとつきましたよ、トリステイン国境までは2日でついたんですね

鉄道があるから

だけどトリステイン領内に入った瞬間から進行スピードが一気に下がりましたよ

馬車はもちろんクルップ製のサスペンション付のあまり揺れない馬車なんですけどね

クルップ領の人口も増え続け今は330万人にまで増えましたよ
ガリアとロマリアからの移民が多かったな（密偵も混ざって入ろうとしたがクルップ領に入る前にすべて拡張したKGBに消された）

3日前にトリステインの首都トリスタニアを見たけど

ぶっちゃけケーニヒスベルクはおるかベルリンのほうがぜんぜん立派だよ

道は細いし最大の道の幅が5メートルってベルリンはその3〜4倍の広さがありますよ

しかも道路に糞尿が捨てられていて臭いし、平民の格好もみすばらしかったし

ゲルマニアの貧民でももう少し立派なものを着ているよ

そして私の隣にいるのが代々我が家の側近を勤めている

キルヒアイス家の嫡男ジークフリード・フォン・キルヒアイス、年は私と同じ16歳

キルヒアイス家は領地は持っていないが爵位は子爵位を持っている

それにジークフリードとは5歳頃からのつきあいで今では腹を割って話せることができる
数少ない友人であるし、私が使っている武器や兵器などをよく使っていたから

航空機や自動車の運転もうまく、魔法も風と水のスクウェアとものすごい才能を誇り

白兵戦と射撃術に関しては「数百年に1度」ともいえる天賦の才を誇り（この前私が今でもかなわない父を負かしていたし）私は略して彼のことを『ジーク』と呼んでいる

頭もよく回るのし、自分に一生の忠誠を誓った私の優秀な側近でもある

顔もやはり整っているし、身長も高いし、描かれてなかったが内戦でも手柄を立てている

ので「シュバリエ」の称号も持っている

何故トリスティン魔法学院に入学することになったかというと私が暗殺でもされたら敵わないとして、皇帝閣下から私の護衛を任されているらしい

そしてトリスティン魔法学院の門の前に着いた

「名をどうぞ」

「フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップだ」

「ジークフリード・フォン・キルヒアイスです」

「名簿に名がありました。ようこそトリスティン魔法学院へ」

それから魔法学院のメイドに頼んで男子寮を案内してもらった

まあ学園の衛兵のいくつかは『KGB』のトライアングル以上の諜報員に入れ変わっている

そして自分たちの部屋に着いたのでチップを10エキュールあげて部屋に入った

ちなみにジークとは部屋は隣同士だ、まあ話し相手に困ることはないだろう

そして入学式が始まった

しかしまあ私もだけど話はぜんぜん聞いていない
内容がつまらなかったからだ

そして周りを見た

ああ、あのピンクにブロンドがかかった髪を持っているのが
ヴァリエール家の3女

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールですね。

魔法がすべて爆発するらしいですね。

ああ 金髪で顔が整っていて口にバラを加えているのは
グラモン元帥の4男ギーシュ・ド・グラモンですね

ああキュルケも来ていたんですね

夜になり新入生歓迎パーティーが行われた

そして私はテラスでワインを片手に
ジークとともにチェスをしている。

戦況はかなり白熱としている

ジークと私はチェスの腕前は同じくらいで今までも勝敗記録は五分五分だ。

ほかにもボードゲームもしているがやはり強さは同じくらいだ

そして……

「フリードリヒ様、チェックメイトです」

「今回は負けたな、最近はなんか負けが込んでいる気がするな」

「そうですね、この前まではフリードリヒ様が連戦連勝でしたでしょう?」

「まあ、そうだったが」

「しかし、いいんですか?フリードリヒ様」

「ん……何をだ?」

「ご冗談を……あそこでお嬢さん方とダンスをしないでいいのかと聞いているんです」

「いやあ……私はどうもパーティーというのが苦手ですね……特にこのトリステインに」

野蛮で田舎物で各種技術が発展して国力を伸ばしているのゲルマニア貴族に、歴史と伝統が腐るほど長く伝統に拘りすぎて国力を落としている格式高いトリステイン貴族のご令嬢が

私をダンスに招待するなんて考えていないからね」

「フフ・確かにそうですね」

「ジーク、君こそご令嬢方とダンスをしないでいいのかい？」

「いえ私の家は爵位しか持ってませんので」

「領地なら買ってやろうか？近場のやつを、君になら買ってやってもいいと思っているけど」

「子爵に相応しい領地を買ってやるが・・・」

「いえ、フリードリヒ様に尽くすだけでいいです」

「本当にいいのか？」

「はい」

「欲がないやつめ」

こんな感じでしゃべりながら再びチェスをしていると

「フリードリヒ様、こちらに数人の男子生徒が来ました。」

見てみると金髪で美形なのにフリルのついた服のせいで
せっかくのかっこよさが台無しになっているギーシュとその取り巻
きたちがやってきた

「グラモン元帥のご子息のギーシュ・ド・グラモン様じゃありませんか」

「へえ、君は僕のことを知っているようだね」

「ええ、グラモン元帥のご子息を知らないということはありえないことです」

「君の名前は？」

「フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップと申します」

「ふむ」

ギーシュは取り巻きたちに知っていると問いまわしたが
1人は蒼い顔をしたが首を振った
どうやら情報を集めていないようだね

「私はゲルマニア貴族ですし、トリステイン貴族の皆さんは知らないと思います」

「そしてそちらの御仁は？」

「ジークフリード・フォン・キルヒアイスです。」

「ところで君たちは何故ダンスをしないのかね」

「見たところ、相当高い衣装を着ていそうだけど・・・」

「ええ、格式高く伝統のあるトリステインのご令嬢の方々は野蛮で

田舎物の

ゲルマニア貴族の私とダンスをしたがらなさそうなので

「まあ、キュルケ嬢はたくさん踊っているようだけど」

「きみは、本当にそう思っているのかい？」

「ええ、そう思ってますよ」

と不適に笑いながら言った

「あなたの父上はすごいですね」

「やはり君もそう思うかい」

「なにせ「陣地造営はトリスティン」なんですよね」
平時にはぜんぜん役に立たないけどね

「そうなんだよそれで父上は……」
と延々と自慢していた

僕のことはギーシュと呼んでいいよ」

「私のこともフリードリヒでいいです」

そんな感じでパーティーは終わった

そして1週間後授業が始まった

授業が始まった最初は合同クラス授業らしい

そして教師のギトーとか言う先生が

「今年の生徒は不作だ。入学書類を見たがほとんどがドット、ライオンは数名、トライアングルにスクウェアはいるが、全員留学生だ」といつていた

そしてフライの授業が始まった

しかしなんだ・・・
ここまでひどいのか

コモンスペルすらできないやつが多いなんて

風が不得意な私だって15メートルは飛ぶことができる

クラスは火と土がスクウェア水がトライアングル風がライン

ジークは

水と風がスクウェア土がトライアングル火がライン

ジークは10メートルに抑えて飛んだが高速で移動していた
さすが風のスクウェア・・・・・・・・

そんな感じにしていると

「なんだなんだ」

「おい！あれは気絶しているんじゃないか」

ヴィリエとかいうやつだったと思う。

彼の実家はロレーヌ家といって風の名門らしい

見たところ25メートル位飛んだところで気絶している

「フリードリヒ様、あれは気絶していますね」

「そうだね」

「助けなくていいんですか？」

「何のために教師がいるんだよ」

「それに助けるなら私ではなく君のほうが適任だ」

「あのギトー先生は風のスクウェアらしいからな」

「ですが地上に呆然として立っていますけど」

「それに、これはトリスティンの問題だ」

「まさか地上で受け止めようなんて考えていないだろうな」

「まあ受け止められなかったらあいつの運命は終わりだな」

「しかし……本当にいいんですか？」

「それに私たちはゲルマニアの貴族だ、あのヴィリエとか言っちゃつは傲慢らしいからな、助けても因縁をつけてくるだろう」

と話していると

フヨフヨ飛んでいるギーシュが話しかけてきた

「君たちの話を聞くとミスタキルヒアイスは、ミスタロレーヌを助けられるそうじゃないか」

「ん．．．そうだけど、ここは教師が助けるべきなんじゃないだろうか」

「そ．．．そうだけど」

「それにあのギトーという先生は風のスクウェアらしいから．．．．」

「多分．．．．．助け．．．．．られると思う」

「それにかれは同じ学生だが、助けてやる義理はこちらにはない」

「しかし．．．．．」

「フリードリヒ様、ここは助けたほうがいいと思います」

「たぶん因縁をつけられるぞ」

「それでもです」

「．．．．．お前は優しいな」

「いいだろう」

そして飛んでいるヴィリエをジークはキャッチし
そのまま地面に着地し

私は治療のために水の秘薬を投げつけ

私たちはその場を去った

これから2週間ほどすぎ

「よく来たなミスタ・キルヒアイス臆病風に吹かれたかと思ったよ」

何故こうなったかは1週間前にさかのぼる

私とジークがしゃべっているときにヴィリエがやってきて

「あのまま落下して地面にぶつかる寸前にフライをかけるつもりだったんだ」

「それを邪魔しやがって」

とか何とか言ってジークに因縁をつけてやたら挑発をしてきて明らかに気絶していたのに、やはり助けないほうがよかったかこんなのがトリステイン貴族なのか

そして助けられたのに因縁をつけてきてものすごくうっとうしく

「スクウェアであることもうそだ」と挑発してくるので

向こうが『1週間後に決闘だ!』といってきたのでジークには受けてたつていいと許可を出した

そして1週間後ヴェストリの広場にいった

するとヴィリエを中心に20人の男子学生がいた

そして今現在にいたる

「よく来たなミスタ・キルヒアイス臆病風に吹かれたかと思ったよ」

「あれれミスタ・ギーシュこの伝統と格式高いトリステインでは『決闘』というのは

1対多人数でやるものかい？野蛮で田舎物とされているわがゲルマニアでは1対1でするものだけど」

と近くにいたギーシュに私は言った

「そ・・・そんなことはない！ミスタ・ヴィリエ！なんて卑怯なことしているんだ！」

「へえ〜こういうのがトリステイン貴族なのか、早速実家に報告しようこのことを」

「まあいい私も助太刀するよ」

「ふんまあいいだろう！二人そろってスクウェアじゃないことを証明してやる」

「ジーク、手加減せずに痛めつけていいぞ・・・」
と底冷えするような声で言った

「はいわかりましたフリードリヒ様」

「では、はじめ」

始めりの掛け声とともに決闘は始まって20人がいつせいに呪文を発射してきたがすべて余裕でかわし

ジークはスクウェアスベルの『カッタートルネード』を放ち10人をボロ雑巾のように吹き飛ばし

私はクリエイトゴーレムで40マイルの足の裏に車輪がついており
高速移動できる

巨大チタン合金製ゴーレムをつくり
残った10人をゴーレムで殴り飛ばした

「さあ……どっちが勝者ですか？」

「しょ……勝者ジークフリードとフリードリヒ……」

ミスタコルベールがやってきて

「決闘を中止しなさい」

といったが決着はついており

「もう終わりましたよ」

「20人の回収をお願いしますね」

ヴィリエを含め20人は全治2ヶ月以上の大怪我をおった。

このことの私たちへの責任は追及されなかった

3カ月後夏の舞踏会が始まった

2週間前退院したヴィリエはまた決闘を起こした

ドットであるミス・タバサにフライの授業で負けたため
決闘を起こしボコボコにされたらしい

それにタバサの正体は『KGB』からの報告書で

北花壇騎士団に所属しており風のトライアングルであり

暗殺されたオルレアン公の娘シャルロット・エレーヌ・オルレアンらしい

まだあれだけボコボコにしたのに懲りなかったんだな

舞踏会は始まったが

私たちはまたダンスをせず、テラスでチェスをしている

「チェックメイトだジーク」

「ああ負けてしまいましたか」

「負けてばかりもおれんからな」

「しかしさらに強くなりましたねチェスの腕前が」

「君こそ強いじゃないか」

こんな感じでしゃべっていると
ギーシュがやってきた

あれからギーシュとは親しくしている。

まあ虚無の曜日に一緒に飲みに行ったり、チェスをしたり
「君たちはまたチェスをしているのかい？」

「ワインに食事を楽しんでダンスをしていると思ったら」

「ワインと食事はたのしんだよ」

「まあ君たちがチェスが強いということは認めるけど」

「ギーシュはまだ私たちに1回も勝っていませんからね」

「いつか君たちに勝ってやるさ」

「それにこの前ダンスを見せてもらったけど、あれだけうまく踊れるならなんで

レディー達を誘って踊らないのかい？」

「ご教授を願いたいほどうまくいったよ」

「まあパーティーというのは苦手だね」

「そうなのかい」

こんな感じで話していると

建物の中から悲鳴が聞こえてきた。

驚いてギーシュとともに様子を見に行くと

キュルケが全裸になっていたので

カーテンをつかって簡単なドレスを作ってキュルケのほうへ投げた

すると「ありがとうフリードリヒ」

とお礼を言っ て来たので

「どういたしまして」

といった

そしてヴィリエが

「風の魔法だ！風メイジである僕にはわかる」

といった

そして「風メイジで杖を持っているのは1人しかない!」
といった

「彼女だ!ミス・タバサ彼女に違いない!」

まあこの前ボコボコ二されて恥をかかされたから
たぶん犯人はヴィリエに違いないだろう

だがこのまま放っておくのもいいだろう
とも思い放っておくことにした

そして

ヴェストリの広場でタバサとキュルケが決闘を始めた

そしてお互いが魔法を打ち合う中で

茂みに隠れているヴィリエと数人の女子がいた

たぶんヴィリエは恥を書かされたことでタバサに
女子どもはキュルケに恋人を奪われたことで

うらんでいて利害が一致したため手を組んで今回のことを考え付い
たんだろう

しかし一方はゲルマニアの大貴族もう一方はガリアの王族と
下手したら国際問題になりかねないんだよね

お!大勢が決まってきたな

よし『アースハンド』尻を思いつきり叩いて
ヴィリエたちを茂みから出してあげよう

「アースハンド！」

バシ！バシ！バシ！

「うわあ！」「きゃあ！」

こうしてヴィリエたちが茂みの中から出され

「あなた達何をしていたのかしら？」

「僕達はただ見ていただけだよ」

「あなた達はタバサが犯人といったよね」

「そ・・・そうだが」

「戦ってみて思ったけど彼女トライアングルクラスだったわよ」

「実力のない卑怯ではかなやつがこんなことをするのよね」

「何を言ってるんだ僕はラインクラスで・・・あ！」

「フッフ・・・アンタたちまとめてお仕置きよ！」

「もともと君達があの子を痛い目のあわせろといったんだろ！」

「何言ってるの！あなただって乗り気だった癖に！」

「何ごちゃごちゃいつてるの!」

「……………仕置き……………」

「ぎゃああああ!」「きゃああああ!」

これでヴィリエたちは懲りただろう

翌日ヴィリエたちは塔に吊るされていたとさ

これがきっかけでタバサとキュルケは友禪を結んだらしい

2週間後 夏季休暇に入った……

16話

今日から学園は夏期休暇に入った。

学園の生徒達はほとんどが実家に帰っていったようだ

さて私たちは、領地まで遠いからこの休暇を利用してトリステインを観光しようと思っ

っている。

そして1日後

「準備ができたなジーク」

「はい」

「ではどこへ行かれるのですか？」

「うーん・・・まあまずトリスタニアに行こう」

「はいわかりました」

「何でいけますか？」

「竜ですか？馬ですか？それとも車ですか？」

「竜で行こう・・・たしか幻獣狩りのときに捕獲して調教した風竜がいたな」

「はい 3匹いましたね、厩舎に・・・えさ代は学園が負担していますね」

「うん、別に自分で払ってもいいが見栄をはって学園が負担すると言っていたからな」

「虚無の曜日にフリードリヒ様は宝石を錬金して、金ならたくさん持っていますしね」

「そしてそれを月に1度、宝石商に売りに行ってエキユー金貨を大量にもらっているんですね」

「今では総資産350万エキユーほど持っていますしね」

「まあ、ギーシュたちと飲みにしたときにけっこう使っているつもりだが・・・」

「でも、ぜんぜん入ってくるほうが多いですよ」

「父には仕送りは月1000エキユーでいいといったが・・・」

「仕送りはもういらないうちもな・・・」

「じゃあ竜の準備をしますね」

「頼んだぞ、ジーク」

「はい」

こうして竜に乗って20分ほどでトリスタニアに着いた

「つきましたね、フリードリヒ様」

「そうだな・・・さてどこに行こうか・・・」

「そうですね・・・」

「しかしここは道が狭いな」

「ええそうですね」

「そうだ！裏通りにでも行くか！」

「何をするんですか？」

「まあ、ぶらつと歩こうと・・・そして面白そうな店があったら入ろうと」

「そうですね」

こんな感じでぶらぶら歩いていると

「お！武器屋があるじゃないか」

「そうですね」

「掘り出し物があるかもしれないな」

「でも大抵のものはフリードリヒ様は鍊金で作れるじゃないですか」

「まあ掘り出し物をコレクションするのも面白いんだよ」

「それに少しは見栄というのも張っておかないとな」

「でも「場違いな工芸品」を高く買っていますよね」

「あれは技術解析のためだ・・・優れた技術がけっこう使われているからな」

「まあ、そうですね・・・」

「フリードリヒ様と私が使っている杖剣はフリードリヒ様が作ったものですよね？」

「うん、これは炭素クリスタルまあ平たく言えばダイヤモンドで作ったものだ」

「ダイヤモンドは鋼鉄よりもものすごく硬いからな」

「すごい切れ味ですもんね・・・鋼鉄でもチタン合金でもスパスパ切れますから」

「じゃあ、武器屋に入ってみよう」

武器屋に入った

「貴族の旦那。ウチは真つ当な商売してます。お上に目をつけたてるようなことなんか、ぜんぜんしてません」

「いや客としてきたのだが・・・」

「貴族様が剣を振られるのですか！」

「む・・・貴族が剣を振ってはいけないというルールはないはずだが」

「すみません！ただ貴族様が剣を振るって珍しいな」と思いまして

「まあいい剣を持ってきてくれ」

「へいわかりやした」

数分たち

「これは、この店一番の業物です」

見るからに見栄を張る貴族がすきそうな金ぴかの剣を持ってきた

「そしてこれはゲルマニアのかの有名な錬金魔術師シュペー卿が鍛えた剣でさ、鉄だって粘土のように切ることができます」

そしてシュペー卿ってこんな金ぴかの剣作っていたっけ？

「ちょっと貸してくれないかい？」

「へい、どうぞ」

「ふむ、これは偽者だな」

「へ・・・そんなことはございやせん！」

「ちゃんと商人はシュペー卿の作ったものだ！」

「見た目にだまされたな・・・これはなまくらものだ」

「そ・・・そんなああ」

「かかか！親父だまされたな！」

「やい！うるさいデル公！」

「む・・・インテリジェンスソードか！めずらしい！主人あれはいくらか？」

「はあ、厄介払いもかねて金貨１００枚で十分でさあ」

「やすいな」

１００エキューを払った

「毎度あり」

こうして店を出た。

「フリードリヒ様珍しいものをお買いになりましたね」

「いやあインテリジェンスソードが手に入るとは思わなかったな」

「おめえけっこう強いことや横の兄ちゃんのほうがもっと強そうだ」

「まあジークが強いことは認めているけどね」

「名前はなんていうんだ？」

「デルフリンガーだ」

「ふうん、じゃあジークこれをコレクションに追加しよう」

「早速寮に戻るぞ」

「はい」

こうして寮にもどり自室の物置にデルフリンガーを入れた

「こんなくらいとこに入れるのかよ!」といていたが

「ちょっと旅をするから、連れて行けないんだごめんな」

といいながら鞆に収め物置に放り込んだ

そして10日後

「ジーク今日はタルブ村に行くぞ」

「タルブ村ですか?」

「ゆっくり馬車の旅だ」

「はあ、タルブに何をしに行くつもりですか?ワインを买买つつもりですか?」

「まあ、それもあるがこれだ」

こう言ってジークに写真を見せた

「ああ「場違いな工芸品」ですね・・・」

「『竜の羽衣』というそうだ」

「なるほど、それとワインを買ったためにタルプにいくんですね」

「そうだ」

「この写真を見るとクルップ軍の航空機に酷似していますね」

「そこだよ」

「この『竜の羽衣』の重要性をトリステインが理解していない間にわがクルップがいただいてやろうということだ」

「なるほど」

「学園の郊外の土地を大量購入した、そこに格納庫と燃料庫を作ろうとも思っている。」

「ずいぶんと手が早いですね」

「まあ１年前の報告書だからな」

「それに土地購入のためにけっこう金を使ったからな」

「どれくらいですか？」

「１００万エキューほど」

「けっこう使いましたね」

「でもまだまだ残っているからね」

「じゃあ行きましょうか」

そして準備をしていると・・・

「やあ、フリードリヒ」

「ぬお！」

「何ですか？ヴィルヘルム皇太子殿下」

私を訪問してきたのはゲルマニアの皇太子

ヴィルヘルム殿下、6年位前から父が定時報告するときに

私もついて行くことになり、そのときに出会った。

それから、定時報告のたびにあい続け、話をするにけっこう話があったので

親友になった。そして2年ほど前クルップ領に4ヶ月間滞在し（滞在という名の居候）

クルップ領でゲーム場なんかを気に入りクルップ領のことを

「私の第2の故郷」というようになった。

ヴィルヘルム皇太子は、まあ遊び人であるが能力はとても優秀である。

そして私とよく会っていることからジークともよくあっていることになり

彼ともとても仲がいい、年は19歳

「何ですか？ヴィルヘルム殿下」

「私的なときは殿下は要らないよ」

「わかりました」

「では、ヴィルヘルム」

「いやあ、君達が夏期休暇に入ったことを知っていたからね、暇だったから」

君達のいるトリステインに来たわけだ」

「いや、閣下の仕事を手伝えよ、暇だったら」

「いやあね、今回は僕の出番はないわけだし、個人的なつながりをさらに深めようと思ってね」

「そういえば、父上と閣下とオイゲン伯がマザリー二枢機卿と秘密会談をケーニヒスベルクの離宮でするんだっただけ」

「そうそう」

「内容はトリステインとゲルマニアの軍事同盟締結について、でしたね」

「だけど、僕の父上はトリステインとの同盟はサラサラする気がないんだよね」

ほら、自分達を蔑視する役立たずどもを抱えなければならなくなるしマザリー二枢機卿は、アンリエッタ王女と父上を結婚させて同盟を組もうと考えているけど、・・・

君達の開発した新技術とこの前の反乱の鎮圧で皇帝権は大きく向上してけっこう

大きなものになっているから、始祖の血なんてもう要らなくなった

んだよね」

「大変ですね、マザリーニ枢機卿も……実質彼がこの国を持たしていますしね」

「そうだね、この国の貴族はほとんど自分勝手だし、普通はマリアンヌ太后が王位を継ぐべき

だったのに、喪に服すとかで王位につかず、事実上の空位状態だし、苦勞が目につかぶね」

「まあ、ヴィルヘルムこの国の貴族もゲルマニアと同盟するなんて向こうから願ひ下げだろうし

伝統と格式のあるトリステインのことだから自国で何とかするんじゃない」

「それもそうだね、伝統と格式がありすぎて国力が落ち、貴族達は好き勝手して人口もだんだん減り

汚職が横行しているトリステインのことだ自国で何とかするだろうね」

「で旅支度しているけどどこに行くんだい？」

「タルブ村です。ヴィルヘルム様」

「タルブ村か、ジーク」

「はい」

「何が目的かい？ワイン？」

「それもありますが、これだよヴィルヘルム」
そうして『竜の羽衣』の写真を見せた

「ああ「場違いな工芸品」か・・・君の家にはたくさんあるからね」

「そう、これを購入するためとワインを大量に購入するために行くのさ」

「フリードリヒ様、ヴィルヘルム様準備が完了しました」

「じゃあ、行きましようか」

「そうだね」「そうですね」

そうして馬車に乗り込んだ

「この馬車はあまり揺れないね、クルップ製かなこれも」

「そうですよ」

この馬車車輪はゴムタイヤを使っていてサスペンションもついており風石を使う小型発電機もついているため、その電力を使った空調機もついている

しかもこの馬車はチタン合金を全面に使っていて
ガラスは強化型防弾ガラスを使っている

「しかも、中は広いし涼しいし」

「ええ、これで道中でもチェスやトランプができますよ」

「そうだね」

こうして道中トランプやチェスをしていたが戦績は散々だった。

「今回はフリードリヒが負けが込んでいるな」

「つ・次こそ勝つぞ」

といったがまた負けてしまった

「はあ・・・今日はついていないな」

こんな感じで車内で遊んでいると
タルブ村に着いた

「ここがタルブ村か、きれいなところだね」

「そうだね」

「貴族様、タルブに何のようですか？」

「ワインを買うことと、『竜の羽衣』かな」

「竜の羽衣ですか？」

「そうだ、どんなものか見てみたくて」

「変わっていますね」

「まあ、よく言われる」

「『竜の羽衣』のある場所に案内してくれ」

「はい、わかりました貴族様」

「頼んだぞ」

こうして村人の案内の下竜の羽衣が安置されている場所に向かった
巨大な洞窟の中には1機の航空機があった

「ん・・・こんなところに墓標が」

「『佐々木武雄異界に眠る』か」

「読めるんですか」

「フリードリヒ様これは『ニホンゴ』ですね。」

「たしか、クルップ家の書庫の中に東方の言語に着いての本がありましたね」

まあそれは、俺が書いたものだが

「よろしければ、これを買ってくださいませんか」

「それに関しては問題ないと思います。墓標を読めた人に譲ってくれという遺言でしたから」

「金額はそうですね・・・2000エキユーでどうですか」

「そんなにもらって良いんですか」

「良いですよ」

「ありがとうございます」

「フリードリヒ、やはりこれは、君のところが開発した航空機に似ているね」

「そうだねヴィルヘルム、東方の技術をこれで見ることができる」

「では、これは後日私の部下がやってくると思つのでそいつに渡してください」

「はいわかりました貴族様」

「じゃあ次はワインを買いたいんだが」

「わかりました、こちらへどうぞ」

「ここが蔵です」

そしてワインを試飲した

「いいワインだね、さすがタルブのワインだ」

「ありがとうございます」

「じゃあこれを500エキュー分購入するよ」

「そんなにお買い上げで」

「まあ学生の身だからね、暇がないのさ」

「そうですか」

「じゃあ、今日は少し遅いから明日学園に帰るか」

「そうだね」

「じゃあ宿を探しましょう」

そして村にある宿についた

「ふむ、まあまあだね」

「じゃあ、入りましょうか」

「そうですね」

そうして部屋を案内してもらった

「じゃあフリードリヒ、チェスの続きをしようか」

「わかったよヴィルヘルム」

そして再びチェスを開始した。

「チェックメイトだヴィルヘルム！」

「負けちゃったな」

「やっと勝ったぞ」

「これで連敗はストップだな」

そして夕食の時間になった。

「なんだいこれは？」

「これは、村の名物シチューヨシエナベでございます」

「うん、おいしいね」

「そうだね」

「そうですね」

こうして夕食を食べ終え
トランプの大富豪をした

そして

「やあ貧民君」

「すみませんね、フリードリヒ様」

「くそ、また負けてしまった」

「これでは成り上がれない」

「このトランプのゲームよくできてるね、いいカードは富豪に取られてしまう」

「そして貧民は富豪から悪いカードがくる」

その後大富豪をし続けたがついに富豪になることはできなかった

翌朝

「じゃあ、出発しますか」

「そうだね」

再び馬車に揺られて学園に戻った

「楽しかったな〜旅は」

「・・・・・・・・・・」

「まあ、フリードリヒは負けが多かったけど」

「でも、お目当てのものが手に入ってよかったよ」

「ヴィルヘルム様はこれからどうなされるんですか？」

「そうだね〜・・君が作らせたカジノにでも行こうかな？」

「あそこに行くのか」

そうです1年前にガリアとトリステインにカジノを作らせたんですよ
きれいな湖のあるガリアのモンフォール子爵領とトリステインのアルトワ子爵領に

カジノを作ったんですよ。

どちらもどっぷり勘定貴族で金に困っていたようなのでいくつもダミーを作り

その末端のダミーに2人の貴族を金で釣らせ、ちゃんと国からも認

可されて

カジノを作ったんですよ

「ほんとに行くのか、はまると金がいくらあっても足りないぞ」

「大丈夫だよ」

「まあ君達が裏にいることは僕と父上くらいしか知らないけどね」

「ええ、そうでしたね」

「じゃあ船を手配するから」

2日後クルップ領から小型高速空中船がきた

「じゃあ行きましょうか」

「そうだね」

数時間後ガリアのモンフォール子爵領についた

そして停留所に空中船が止まり

カジノの中に入った

「へえ、確かにこれは欲望がそそられるね」

知識を利用して作ったパチンコやスロットがあり

ほかに サイコロ博打から、ルーレット、トランプ、バカラ、花札など古今東西の様々な博打が行われ多くの客がチップや金貨を賭けていた。

現代の技術でイカサマもできないようになっていた。
珍しいものが好きな貴族にはたまらない仕様になっている

「しかし、普通の飲み物も金貨1枚って高いね」
そしてここは金貨がないと飲み物も飲めない
お金持ち専用のカジノである。

「しかし美女もよりとりみどり、そして料理の種類も豊富でおいしいときた」

美女達は奴隷商人などから買い入れて、
料理は知識の中から古今東西さまざまな料理のレシピを書き
それを作らせている。

「しかも、質入所まであるのか」
そうですこのカジノには金貨がなくなってもすぐに質を入れて金貨を
客に渡すシステムがあるので

「たしかに、はまったらすぐに1文無しになりそうだね」

「だけど、まあ遊びますか」

「そうですね」

こうしてスロットに向かった

「じゃあエキュ―金貨を入れて稼動させますか」
こうしてスロットを動かしてはじめてが・・・

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「よし！当たった〜！」

「また・・・負けてしまった・・・」

このまま2時間ほどスロットをし続けたが

ヴィルヘルムは金貨200枚勝ち

ジークは金貨150枚勝ったが

私は運がなかったのか金貨700枚の大負けをした。

いくら最終的に自分へ帰ってくるとわかっていても悔しかった。

「くそ〜！なんて運がないんだ！この前は大勝ちしたのに」

「はは！勝負は時の運って言うからね」

「まあ、残念ということだ」

「そして客も幅広いね」

「ロマリアの坊主もきているし」

「敬虔なる教徒がこんなところで油を売っていても良いのかね？」

「さあ息抜きのためかも」

そして料理を食べカジノを後にした

これら2つのカジノは、その後も稼動し続け多くのトリステインとガリアの貴族、そしてロマリアの財貨をすい続けたが、王国への上納金の支払いの猶予を申し出る貴族、他の貴族や大商人から金を借りたけど、返済を怠り訴えられたりする貴族や、重税をかけて借金を補填しようとした結果

領民の離散や暴動の起きる領地もでき始め、このままではやばいと思いい2カ国同時で

摘発しようと思ったが、いざ摘発のために衛兵を派遣すると、船は煙のように消えていて

2人の貴族はきえた船を見て呆然としていた。

2人の貴族は逮捕されたが、入ってくる大金を次々と使っていただけなので

詳しい事情は知らなかった。一応似顔絵なんかを描かせたが（映画の知識を使ったハリウッドじこみの

メイクをして2人の貴族に会っていた）どこを探しても該当する人物はおらず、

徒労に終わった。2人の貴族の資産は没収されたが失われた大金は2度と戻ってくることはなかった。

しかしこれは1年後のことなので、それまでずっと3カ国の貴族と神官と大商人の財貨を吸い続けた。

この結果、ガリアよりも諸侯軍中心のトリステインでは、約1年後始まるアルビオンとの戦争で資金不足で苦しむこととなった。

カジノを後にして、数時間後寮についた

「ヴィルヘルムはこの後どうするんだ？」

「僕は帰ることにするよ」

「そうか、じゃあ皇帝閣下によりしく伝えてほしいな」

「わかったよ」

「ジーク」

「はい」

「フリードリヒを頼んだぞ」

「はいわかりました」

そして2週間後夏期休暇は終わった

17話

あれから数日がたった

sideグスタフ

「君は誰だね」

ロマリア人が私を訪ねてきた。何をする気だろうか？

「私の名前はクリストファー・コロンブスといいます」

「ふむ」

「君が私に会いに来た理由は何だね」

「はい、私を援助してもらおうと思ひまして」

「何故援助が必要なのだね」

「はい、東方を探検したいからです」

「それなら、ゲルマニアの東方開拓団に応募すれば良いだろう」

「いえ私は船を使って東方へ行こうと思っているのです。」

「む……風石を使い果たしてあの深い森林に墜落するのが落ちだ
と思うが」

「いえ、西方へ船を出して行こうと思うのです」

「しかし、この世界は平らだから地の果てに行ったら地獄に落ちてしまうぞ」

「いえこの世界は平らではなく丸いのです。」

「む・フリードリヒのようなことを言つなあ」

「フリードリヒとは？」

「私の息子だ」

「そうでしたか、申し訳ありません」

「まあよい」

「それで、西方に船を出したいのです。この世界は球体ですから西に行ったら東に着きます」

「うゝむ……まあ1週間後に返答を出す、それまで待て」

「はい、わかりました」

「では1週間後」

こうしてコロンブスは部屋を出て行った

「フリードリヒに連絡してみるか」

学園へ向けて伝書ふくろを飛ばした。

そして6日後『（意識）援助してもいいと思います』

とやってきた

「そうか援助しても良いのか……援助してみるか」

翌日

「クリストファー・コロンブス援助金として60万エキュー、両用艦を3隻渡す」

船はつい最近退役した大型の両用艦を3隻渡すことにした。

「乗組員はその金で集めよ」

「はい！ありがとうございます！」

「その探検成功するのか？」

「絶対に成功させて見せます！」

「そうか、ではがんばってくれ」

こうして3ヵ月後両用艦3隻 人員250名の『コロンブス探検隊』は出発した

side out

sideフリードリヒ

「いやあ、まさかコロンブスが出てくるとなあ」

「これで、新大陸が発見されると良いな。そこをゲルマニア領にすればいいし」

「まあ、気長に成果を待ちますか」

こう1人ごとをつぶやいていると

ガチャ

「どうなされたのですかフリードリヒ様？」

「いやあ父上からね『西方から行って東方に着くという男』が現れたって手紙が来てね」

「それでどうなされたのですか？」

「その男が探検をするために援助をしてくれとっている」

「それで」

「父上がどうしようか迷ったので私に意見を求めてきた」

「なるほど」

「なので私は許可を出した」

「何故ですかフリードリヒ様」

「博打の要素は多いけど見つけてくれたら、航路を開拓して交易することで莫大な利益を得ることができる」

「なるほど」

「これまで、少ししか流れてこなかった東方産の物が大量に買えるようになるんだ、莫大な利益が得られるだろう」

こうして二日がたち虚無の曜日になった

「フリードリヒ」

「なんだいギーシュ」

「これから飲みに行かないかい？ ギムリにレイナールにマリコルヌも来るんだ。地味とジークフリードも来ないかい？」

「ん？この前は私がおごったから次は君がおごってくれるのかい？」

「違うよ、今回は割りカンだよ」

「そうか・・・てつきり君がおごってくれるのかと思ったよ」

「いやあ君と違って僕達の財布は少しさびしいからね」

「そうか・・・まあそうと決まれば行こうじゃないか」

「そうだね」

4時間後トリスタニアの酒場に着いた

「それじゃ、かんぱーい」

「乾杯！」

こうしてギーシュたちとともに飲み始めた

「うんおいしいね」

「そうだね、この値段でこの味は悪くないな」

「そうだろ、この前僕が見つけてきたんだ」とギーシュが言う

「ところで、この前帰省したときに聞いたんだけど君の家ってすごいんだね」

「ん・・・そんなことはないと思うけど」

「そんなに謙遜しなくても良いよ『兵器王』殿」

「ブッ！ゴホゴホ・・・やっぱりこついわれるか」

「そうだよ」

ギーシュの回想

「父上ただいま帰省しました」

「うむよく帰ってきた」

「はい」

数日後食卓にて

「交友関係はどうなのだギーシュ？」

「はい、ギムリにマリコルヌ、レイナールとゲルマニアの留学生2人と仲良くしています。」

「それとモンモランシーとも付き合っています。」

「ほう、うまくいっているかモンモランシ伯爵の娘とは？」

「はい！」

「そうか・・・してゲルマニアの留学生とはどんな感じなのか？」

「はい、二人とも顔がすごく整っており、さらに2人とも2系統スクウェアです。」

「なんと、この年でスクウェアしかも2系統も！」

「はいすごいですよ」

「二人ともチェスのかなりのやり手で私ではまったく歯が立ちませんし、

剣術も2人の模擬戦を見たのですがかなりのものです」

「ふむふむ」

「ダンスはしたがっておりませんでした、一回ダンスを見たとき

とても上手でした。何故しないのかと聞いたら本人はあまりパーティーというのは好きじゃないといっていました。パーティーの間はたいていその留学生2人でチェスをしています」

「ふむ・・・してその留学生の名は？」

「はいたしかフリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルツプとジークフリード・フォン・キルヒアイスだったと思います」

「クルツプだと！」

「父上は知っているんですか？」

「知っているも何も彼の家は『兵器王』と呼ばれていて有名だ」

「なんですか？『兵器王』って」

「うむ、大量に兵器を生産して売りまくっていることからそういう名前がついた」

「・・・なにか悪名に近いような」

「ほかに、缶詰や衣服、薬品や鉄などを大量に生産している。そして近年ゲルマニアがさらに躍進し始めた理由もクルツプが開発した数々の新技術があるかららしい、おかげでさらに国力の差は開く一方だ」

「彼の実家ってそんなにすごかったんだ」

「うむ、そつだまあ仲良くしていなさい」

回想終了

「しかし、よくこんなところ見つかったな」

「まあ、いろいろと伝を使つてね」

「そうか」

「ん？・・・あんなところで賭けチェスをしているよ」

「ああ、そうなんだよこの前1人で来たときにしたんだけどボロ負けしてね・・・」

「ふゝんそうか」

「君もやってみたらどうだい？」

「そつだな、やってみるか」

そして賭けチェスをやっているところへ行つた

「ん・・・貴族様もやられるので」

「そつだ」

「じゃあ、はじめましょうか」

こうしてチェスの大局が始まり30分後

「チェックメイトですよ」
私が勝った

「うぬぬぬ、ものすごくお強いですね。こんなに強い人は久しぶりに見ました」

「そうかい」

「じゃあこれ賭け金です。」

「うむ、ありがとう」

前の人が負けが込んでいたのか500エキューも来た

「すごいな、君は！この前僕がしたときはあの人に歯が立たなかったのに」

「そうだったのか」

「ところでもう結構飲んだと思うが」

「そうだね、もうそろそろ帰るとするか」

その後6人で割り勘をして店を後にした

「じゃあ、そろそろ学園に帰るとしますか」

「そうだね、でもその前に服でも買っていこうよ」

「それもそうだな」

こうして衣服店に向かった

「じゃあ僕はこれを」

ギーシュはひらひらのついた服を購入していた

「ふむ、私はこれにしようか」

わたしは汚れてもいいように軽い服を購入した。

そしてこの後学園にもどった

近状報告

アルビオン内戦はレコンキスタが優勢

北部中部は完全に制圧された。そしてロンディニウム、郊外40リ
ーグまでに

王党派は後退す。このままだと来春には王党派は風前の灯となるだ
ろう

そして今までのわれわれがこの内戦で稼いだ金は双方合わせて
4億5000万エキュー以上

レコンキスタの財政状況は極めて厳しく、われわれから武器と火薬
と食料を購入するために

占領地域でとてもきつい重税を課している模様

王党派の財政状況はレコンキスタほど悪くないが厳しい

次々と貯蓄を切り崩してわれわれから食料や火薬、武器を購入して
いる模様

そして両軍合わせて死傷者は民衆を含めて20万人以上、空軍の数

も次々と数を減らし

内戦前の3分の2に減り、国土は荒れ果てている模様

これらによって国力は内戦前の3分の2に激減した模様

しかし内戦はこれからも続くためうまくいけば内戦前の5分の2までに国力を落とすことが可能

18話

あれから数ヶ月がたったある日

わたしはミスロングビルを自室に呼んでいた

「やあ久しぶりだね、ミス・サウスゴード」

「今はロングビルだよ」

「そうだったね」

「君の父上は、よくがんばっているよ」

数年前のモード大公肅清のとき主君とともに運命を共にするつもりだったらしいが

モード大公に説得されクルップ領に亡命してきたサウスゴード伯爵親子とそのほかの家臣たち

そしてサウスゴード伯は空軍にいたため船の扱いが長けておりその経験を生かすために

クルップ空軍の教官になってもらった。そして今は領内の空賊を討伐する3つある領内警備艦隊の

第2領内警備艦隊の司令になってもらっている。そしてほかにやってきたアルビオン貴族達も

ほとんどが船の扱いがうまかったため教官や中小艦の艦長になってもらっている。

サウスゴード伯の娘マチルダは、サウスゴード伯爵から、身分のしからみがなくなったから

外の世界を見て来いといわれ、諸国を見て歩いていたはずだがなぜか学院の秘書になっていた

「そうかい」

「しかし何で学院の秘書なんかをやっているのかい？もつとほかの場所があるだろうに」

「いやね、オールドオスマンに誘われてさ」

「孤児院に寄付するためかい？」

「そうだよ、だけどね親子2人と家臣たちの収入からの寄付じゃあちよつと孤児院の維持には足りないんだよ」

「だから今日仕事を持ってきたんだよ、ミス・サウスゴーダ」

「私的なときだからマチルダで良いよ」

「じゃあマチルダ、この前うちの諜報部から興味深いものが発見されてね」

「へえ、それを盗んでこいと？」

「そう、『土くれ』のフーケとしてね」

「もちろん僕とジークが援護をするし、報酬も・・・そうだな・・・1万エキューでどうだ」

「確かにそれだけあつたら孤児院もだいぶ楽になるねえ・・・よし乗った！」

「そういつてくれると信じていたよ」

「そうかい」

「じゃあ、仕事の内容を話すね」

「頼むよ」

「今回盗みに入るのはトリスティンの王宮勅使ジョール・ド・モット伯爵の邸宅だ」

「けっこう大物だね」

「そこには最近手に入ったらしい『召還されし槍』というのがあるらしいそれを奪う」

「場違いな工芸品かい？」

「そうだ」

「あんた好きだね」「場違いな工芸品」

「まあね、邸宅の周りには50人近くの警備兵が守っているんだ」

「1人の邸宅を守るにしては数が少し多いね」

「まあ王宮勅使でもあるからね」

「だけど、王宮勅使の家から噂の盗賊『土くれのフーケ』が物を盗

んでしかもその盗賊を何ヶ月も捕まえることができなかったらどうなると思う？」

「そりゃあトリステインという国が信用を落とすことになるね」

「そうそれが目的さ、ゲルマニアとトリステインの同盟の拒否をする1つの材料として使う」

「何でトリステインという国をそこまで嫌っているのかい？」

「個人的には親しい人間はいるが、基本的にトリステイン貴族は身勝手で傲慢でわれらゲルマニアを野蛮人呼ばわりする。やつらのほうが遅れているのに！それにやつらと同盟してもメリットは1つもない

たぶんやつらはわたし達の足を盛大に引っ張るだろう」

「まあ確かに身勝手で傲慢だね」

「まあ国益のためには助けるときもあるさ」

「つまり、私が土くれのフーケとしてモット伯爵の家に盗みに入り「場違いな工芸品」を盗って来い、それは高値で買うから私は金にしばらくは困らなくなり、あなたは那场違いな工芸品を手に入れさらにトリステインの評判を下げ、同盟を拒否するもう1つの要素が手に入るってことだね」

「そうだ」

「じゃあ明日盗みに入ろう」

「わかったよ」

翌日の深夜

「ここがモット伯爵の家だね」

「そうだ、じゃあマチルダは隠れていて、警備兵を殺すから」

「わかった、でも殺すまではやりすぎなんじゃあ」

「なに「土くれのフーケ」という強盗殺人犯1人も逮捕できない国はどうなんだと言っためさ」

「フーケという名前にはたくさんの汚名がつきそうだね」

「血染めのな」

マチルダは無線機を持って不可視のマントをかけて草むらに隠れた

「じゃあジーク衛兵をしとめるぞ」

「はいわかりましたフリードリヒ様」

私は高倍率双眼鏡を持ってジークは命中精度を上げたVSS狙撃銃を持っている

「標準」

「目標を捕捉しました」

「撃て」

<パス>

目標となった衛兵は頭に悲鳴を上げるまもなく風穴を開けて倒れた

「次の目標に対して標準」

「目標を捕捉しました」

「撃て」

<パス>

このような感じで屋敷の外にいた衛兵を皆殺した

「衛兵は全滅したこれより合流する」

「わかったよ」

そしてマチルダと私たちは合流し屋敷に侵入した

「まあ立派な屋敷だね」

「そうだね、確か金庫は・・・こっちだ」

「フリードリヒ様左から衛兵が」

「よし、黙らせろ」

「わかりました」

サイレンサー付自動拳銃で衛兵の頭を撃った

「よし、行くぞ」

「はい」

そして途中で衛兵を5人殺して、金庫にたどり着いた

「じゃあマチルダ、鍊金をしてくれ」

「わかったよ」

「『鍊金』」

これによって金庫は土くれに変わった。そして中から「召還されし槍」を取った

そしてこう刻まれた。「召還されし槍、確かに頂戴しました『土くれのフーケ』」と

そして翌日この惨劇を見たモット伯爵は気絶した

屋敷の外には衛兵達が頭から血を流していたり吹き飛んでいたりと倒れており、屋敷の中も首を切られたり、頭に穴の開いた衛兵が倒れていた

これによって王宮はフーケ搜索に力を入れるが目撃情報は入らずさらに1ヵ月後再びフーケが盗みに入った。王宮は何ヶ月たってもフーケの足取りをつかむことができなかった。

これらのことにより、トリステインの信用はさらに落ち始めた

19話

あれから2ヶ月ほどたち

「何！コロンブスが東方を発見！それは本当かジーク！」

「はいほんとうです。先ほど電報がありました」

フクロウ便が面倒になったからファクシミリが部屋にあるんですよ（重要なものは暗号化されてやってくる）

「そうか……ついに東方が……」

「これで交易ができれば大儲けできますね」

「そうさ、もちろんこれを独占するのはクルップだ」

「はいそうですね」

「フハハハこのことによってさらにわがクルップとゲルマニアは力をつけるだろう」

さらに2カ月後

今日は2年生の進級を兼ねる、春の使い魔召還の儀式が始まった

そして2年生たちは学院から2リーグほど離れたところで召還の儀式を始めた

「フリードリヒ様は、どんなものを召還なされるのでしょうかね」

「そうだな、竜は出てきてほしいな」

「なるほどそう思いますか」

「自分の騎獣がほしいからな」

「風竜がいるじゃないですか」

「まあ、確かにそうだがな、まあほしいんだよ」

「ジークは何が召還されてほしいのか？」

「やっぱり竜ですかね」

「やっぱりそういうと思っていたよ」

「自分専用の高速移動手段ができるわけですし」

「なるほどな」

「フリードリヒ様、召還の儀式が始まりますよ」

「おっとそうだな」

コルベール先生が

「え、今から召還の儀式を始めます。この使い魔の儀式は一生のパートナーを決める

神聖かつ大切な儀式ですので心してするように」
といった

それから使い魔召還の儀式が始まった

ギーシュはジャイアントモールを、モンモランシーは蛙を
マリコルヌはフクロウを、キュルケはサラマンダーを、タバサは風
竜を召還したようだ

そして私の番が回って来た

「では、ミスタ・クルップはじめてください」

「はい」

「我が名はフリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・
フォン・クルップ。
五つの力を司るペンタゴン。われの運命に従いし使い魔を召還せよ
！」

すると10メートル以上はあろうか巨大な鏡が現れた
そして鏡の中から、巨大な火竜が出てきた。すると

『我を呼んだのはお前か？』

ん？しゃべった？

『いや、お前の心の中に直接話しかけている』

なるほどねテレパシーってやつか

「ミスタ・クルップ早く契約しなさい！」

「は・・・はいわかりました」

じゃあ契約することになったから、おとなしくしていてね

『うむ、これからはお前のことを主と呼ぶことにする』

ありがとう君ってここに来るまで何していたの？

『火の精霊魔法を利用して戦ったりいろんなマジックアイテムや精霊石を作っていたが』

なるほど

「我が名は我が名はフリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバツハ・フォン・クルップ。

五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え我の使い魔となせ」

うゝんそうだな。君って男？

『そうだが』

「じゃあ君の名前はヘーパイストスだ」

『わかった、してヘーパイストスとは？』

東方の神で炎を司る神の名前だよ

『神の名前が与えられたか』

まあこれから一緒にがんばろうね……あとあの赤髪の青年にも
テレパシーで話して良いからね

『何故だ？』

絶対に韻竜だってことは話さないと確信しているからさ

『主がいうなら信じよう』

ありがとう

「ジーク、次は君の番だ！どんなものが召還されるのか楽しみだな」

「フリードリヒ様の竜に負けないものを召還して見せます。」

「そうか、がんばれよ」

「はい」

「我が名はジークフリード・フォン・キルヒアイス。五つの力を司
るペンタゴン。」

我の運命に従いし使い魔を召還せよ！」

すると私のときよりも少し大きい鏡が現れて

ヘーパイストスよりも若干大きい風竜が現れた

『主あの竜も韻竜のようだ』

本当か？ヘーパイストス

『ああ本当だ・・・それに我よりも強そうだが、我も韻竜の中では一流の強さをもつが
あれはさらに強そうだ』

「我が名はジークフリード・フォン・キルヒアイス。五つの力を司るペンタゴン。

この者に祝福を与え我の使い魔となせ」

「君の名前はアテナだ」

どうやらその韻竜は女性のようにだ

しかし戦争を司る神の名前をつけるとはな

「ジークどうやら君は韻竜を召還したそうだね」

「フリードリヒ様こそ」

「そうだな」

そしてルイズの番となった

ドーン・チュドーン・ドガン

ここは戦場じゃないはずだが・・・

周りには大小さまざまなクレーターができている。ん・・・しかし普通は1発で成功するはずだが・・・

ルイズのきつい性格に耐えられる使い魔を探しているのだろうか？・・・

そして・・・

<ボガアアアーン!!!!>

ひとときわ巨大な爆発が起きた

そして・・・１人の人間が立っていた

ん・・・あれは日本人か？黒目黒髪そしてあの衣服・・・・・・・・
間違いない・・・日本人だ
しかし災難だな・・・・・・・・このハルケギニアに召還されるとは・・・
価値観がまったく違うからな

「アンタ誰？」

「フリードリヒ様、珍しいですね人間が召還されるなんて・・・聞いたことありません」

「ああ私もだ・・・・・・・・興味深いな」

そしてルイズはその青年に使い魔の契約をした

「ここはどこだ、映画の撮影か」

といているが、残念ながら現実だ

「興味深いな、すこし様子を見に行ってみるか」

「そうですね召還された平民ですか・・・・・・・・興味がありますね」

そしてルイズたちの所へ行った

「こんにちはミス・ヴァリエール」

「何よ、フリードリヒバカにしに来たの！」

「別に・・・バカにしに来たなんて心外ですなあ」

「やっぱりバカにしてるじゃない！竜を召還したあなたが来てもバカにしに来たとしか考えられないわ！」

「そうですか・・・して君の名前は？」

「才人だ！平賀才人！」

「ヒラガ・サイトーン？」

「サイトだ！」

「失礼少し発音しにくいので、で君はどこから来たのかね」

「日本だ、日本の東京からだ」

「知らないな」

「そうなのか・・・」

「ちょっとそのルーンが刻まれた手を見せてくれ」

「ほらよ」

ガン・ダールブかやはりルイズは虚無だったか

「ありがとう、じゃあ失礼するよ。ジーク学院に戻るぞ」

「はい」

sideサイト

なんだよこんなところにいきなり呼び出しやがって
日本に帰せってんだ

「日本に返せよ」

「無理よ呼び出したらもう帰すことはできないんだから」

「ふざけるな！」

「感謝しなさいよね、名誉あるヴァリエール家の3女である私の使
い魔になったんだから」

「そんなのいやだ」

こんな感じで言い争っていると向こうから

1人は金髪碧眼でもう1人はルビーのような赤髪の見るからに美男
子2人がやってきた。

「こんにちはミス・ヴァリエール」

「何よフリードリヒバカにしに来たの！」

この金髪碧眼の野郎はフリードリヒというらしい

「別に・・・バカにしに来たって心外ですなあ」
「いや少しバカにしているだろ」

「やっぱりバカにしてるじゃない！竜を召還したあなたが来てもバカにしに来たとしたか考えられないわ！」

「そうですか・・・して君の名前は？」

俺の名前を聞いてきた

「サイトだ！平賀サイト！」

「ヒラガ・サイトーン？」

人の名前を間違えやがってバカにしているとしか考えられねえ

「失礼少し発音がしにくいので・・・で君はどこから来たのかね？」

ときいてきたので

「日本だ！日本の東京から」

「知らんな」

くそ少し期待を持たせやがって

「ちょっとルーンの刻まれた手を見せてくれ」といつてきたので

「ほらよ」

と見せたやつた

「ありがとう、では失礼するよ、ジーク学院に戻るぞ」
ジークと呼ばれた赤髪の野郎とともに学院？へ向かった

「なあルイズ」

「何よ」

「あの2人ってなんて名前だ？」

「あの金髪のほうがフリードリヒ、赤髪のほうがジークフリードよ」

「何でそんなに機嫌が悪いんだ」

「ああああの2人、ゲルマニア貴族の癖に竜なんか召還しているからよ！」

「そうなのか」

side out

そして翌日使い魔との交流会が始まった

「やあギーシュ」

「ああ、フリードリヒか」

「ジャイアントモールを召還したんだな」

「そうさ、この宝石のような瞳、僕にふさわしい使い魔さ！ああヴェルダンテ！」

そういいながらヴェルダンテにすりすりしている。

ギーシュ・・・やめといたほうが良いぞ・・・モンモランシーがドン引きしているぞ・・・

「君は竜を召還したようだね」

「ああへーパイストスのことかい」

「君たちはすごいね、あんな巨大な竜を召還するなんて」

「そうかい」

「そうだよ、さすがスクウェアメイジだね」

そしてアルヴィーズの食堂へ向かった。

「ジーク、やはり朝食でこれは少しきついな」

「そうですね、これでは残すのも無理ないです」

「マリコルヌ、これ食べるかい？ちよっときつくてね」

「私のも良いですよ」

「いいのかい！ありがとう」

「しかし少し考えてから食べるよ、普通貴族はそこまで太らないものだから」

「わかっているけど欲望に勝てなくてね」

「はあ、そうか」

するとルイズがサイトに床で貧しい食事を与えているのを見た

正直見ていると気分が悪くなりそうだった。

自分は食い物の恨みつまみは恐ろしいことを知っているので、食い物はいいものを

部下達には与えている。『腹が減っては戦はできぬ』というしそれに十分に食事が配給されれば、ちゃんと仕事をしてくれる

「やあ、ミス・ヴァリエール」

「何よフリードリヒ」

「いやね、彼は一応人間なのだからもつとましなものを準備させて上げられないのかなって」

「何よこれは私の使い魔よ！コイツは私の所有物よ！」

「ふざけるな！いつから俺はお前のものになったんだ！」

「そうか、それは悪かったな、いやしかなあゝこの食事はうちの領民の食事よりもぜんぜんひどいなあゝ・・・あ、でもトリステインの平民の平均的な食事はこんな感じか」

「なによ！私の使い魔にえさをあげるつもりなの！」

「いや、そんなことはないさ、そういえばトリステインってうちの缶詰を買えない家庭が多かったけ・・・5カ国の中で1番貧しいかなトリステインは」

「なによ野蛮で田舎のゲルマニア貴族の癖に」

「ロマリアのようにバカみたいに関税をかけているし、平民を搾り取るだけ搾り取っているから
トリステインはいつまでたっても経済が発達せず、貧しいままなんだよ！」

「うるさい！うるさい！」

「それに使い魔の食事に、固いパンと水のようなスープしか用意できないなんてな

ヴァリエール家は、使い魔の食事代を払えないほど貧しいのかな？」

「そそそそんなことないわよ！」

「いやあ、思ったことを素で行ったただだよ……まあほかにも忠告してやろうと思ったが……聞き入れられることがなさそうだから失礼するよ」

「何よ馬鹿にして！」

ルイズはバカだな、これでサイトに逃げられたら自分の評判がさらに下がるだろうに……

まあ私が言ったところで変わることはないだろう

20話

そしてミセス・シュヴルーズの授業が始まった

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。

このシュヴルーズ、こうやって新学期に様々な使い魔たちを見るのが、とても楽しみなのですよ」

「ミス・ヴァリエール珍しい使い魔を召還したようですね」

と先生が発言すると周りの生徒が笑い始めた

ああ教師ならもう少し考えて発言したらいいものを……

するとマリコル又が

「ゼロのルイズ！魔法が使えないからってそこら辺の平民を連れてくるなよ！」

すると

「違うわよちゃんと召還したわよ！こいつが来ちゃっただけよ！」
とルイズが怒鳴った

「サモンサーヴァントができなかったただけだろ？」
すると再び教室は笑いに包まれた

「ミセス・シュヴルーズ侮辱されました！ かぜっぴきのマリコル又がわたしを侮辱しました！」
とルイズが叫んだ

「かぜつぴきだと！僕は風上のマリコル又だ！」

「アンタのガラガラ声が風邪を引いたときのような感じがするからよ！」

するとミセス・シュヴリーズがこの2人の不毛な口論をとめた

「私の二つ名は赤土です。赤土のシュヴリーズです。これから1年間土系統について皆さんに教えます。」

「では、今から皆さんには土系統の基本である『錬金』をおしえます。1年生のときにできるようになった人もいるかもしれませんが、基本をしっかりとらせることも大事です。」
まあ確かにそうだな。

するとミセス・シュヴリーズが小石を錬金して見せた

「ゴゴゴールドですか、先生？」

「違いますこれは真鍮です。金を錬金できるのはスクウェアだけですから。私はトライアングルですから。」

「そうですか」

「では、土のスクウェアメイジであるミスタ・クルップに手本を見せたもらいましょう。」

といって私が指名された。

そして私は壇上に上がり

「ではミスタ・クルップどうぞ」

「はい、では『錬金』」

私は錬金の呪文を唱え目の前の小石を純金に変えた

「すすすすごいですね………完全な純金ですよ！」

そして周りからは歓声が上がった

「ほ……本当ですか先生？」

「ええ、本当ですよさすが『創造』の二つ名を持つメイジですね。錬金でいろんなものを作ったりしていたからこんな二つ名がついたんですよ

「では、私と同じ土のトライアングルメイジである。ミスタ・キルヒアイスにしてもらいましょう」

「え……彼は水と風のスクウェアでは？」

「ええそうですけど彼は水と風がスクウェア、土がトライアングル、火がラインメイジなんですよ」

「すす……すごいな………」

「では、ミスタ・キルヒアイスどうぞ」

「はい、では『錬金』」

ジークは小石を純銀に錬金したようだ

「すごいですね………完全な純銀ですよ………」
そして再び歓声が上がった

「すげえ……」

「彼は『神速』の二つ名を持つメイジですが……『鍊金』でも良いかもしれません」

ジークはスクウェアスペルの呪文もコモンスペルのように早く唱えるから

この2つ名がついたんですね（私はラインスペルくらいの速さですくウエアを唱えることができるが）

ちなみに白兵戦の戦闘のときも神速のような速さで武器を正確に鋭く振ってくるから

訓練の相手をしている私の動体視力はものすごく高くなった。

「では、次はミス・ヴァリエールにやってもらいましょう」

「え？わ私ですか？」

ああ知らないんだな……ミセスシュヴリーズは……

「そうです、これをあなたの望む金属に変えてもらなさい」

「先生」

「なんですか？」

「やめておいたほうがいいと思います」

「どうしてですか？」

「危険です」

このキルケの発言には私は全面的に賛成する。

周りも皆うなずいている。あんなの至近距離でやられたらこっちはたまらない。

心臓に悪いあれは

「危険って何故ですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよ、先生？」

「ええ、そうですが彼女は努力家だと聞いています」

「ルイズやめて」

「やります」

あ・・むきになったな

「では、ミス・ヴァリエール、錬金したい金属を心の中に思い浮かべるのですよ」

さてこのままだと危険だからテレパシーで自分の使い魔にこれからおこるであろうことを伝え備えるように促した。

「では行きます！『錬金』」

「エアシールド」

「アースシールド」

＜ドガアアーン！＞

「だから言ったのよ！あいつにやらせるなって！」

「ヴァリエールは退学しろよ！」

「俺のラッキーが蛇に食われた！」

ああ、可哀想に……。せっかく召還したのに食われるなんて……

そしてルイズから信じられない一言

「ちょっと失敗したようね」

いやちよつとどころじゃないと思うぞ……。シユヴリーズ先生は気絶しているし……

っていうか謝れ！人としてどうかと思うぞ！これだけのことをして！

「ジーク……。相変わらずすごいな」

「ええ……。ものすごい惨劇になっていますけど……」

「いつもどおり謝罪はないんだな」

「まああのお方は公爵家の令嬢ですから……。謝るということを知らないんでしょうか？」

「まあそうかもな……。これでは授業は中断だろうな」

「ええそうですね……。先生は気絶しているし」

翌日昼食の時間

「ジーク……。ギーシュが災難だな」

「ええ……。2人から同時にフラれるって」

「まあ2股していたほうが悪いとは思うが……」

回想

シエスタがたまたまギーシュの香水の入った小瓶を拾ったことから始まる

「貴族様落とされましたよ」

「これは僕のじゃない」

「しかしさっき落とされましたよ」

「ん？その小瓶は！それはモンモランシーが自分のためだけに使っている小瓶じゃないのか？」

「何を言っているのかね、僕は……っておわあ！ケティ！

「ひどいですギーシュ様……、私だけだといってくださいったのはうそだったんですね！」

「いや違う！これは誤k「そんな言い訳聞きたくありません」うっ
あ！」

<パシーン>

ああ……ふられたな……女たらしな血の影響だな

そして近くにいたモンモランシーが

「へえー……ギーシュ……あの一年生とそういう関係だったのね」

「ち・・・違うモンモランシーこれは」

「最っ低！」

「といってギーシュの頭にワインシャワー・・・・・・
見ているとさすがに気の毒に見えてくる・・・・
あとで自棄酒に付きやってやるか・・・・」

回想終了

「待ちたまえ」

「君が軽率に香水の入った瓶を拾ってくれたから、2人のレディの
機嫌が損なわれてしまった
どうしてくれるのかね？」

「おいおいギーシュそれは八つ当たりにも等しいぞ」

「す、すいません！」

「が多分2人に振られたことから血が上がっているんだろう。少し冷
静さがなくなっているようだった。」

「多分モンモランシーにふられたからだろう。」

「おい！そのキザ野郎何シエスタに八つ当たりしているんだ！お
前が二股してただけでシエスタは悪くないだろ！」

「まあ確かにそうだ」

「そつだぞギーシュその平民の言う通りだ」

「といって周りが笑いに包まれる」

「そ、そんなことはない。僕は最初、知らないふりをしただろう？」

それに合わせる機転があってもいいとは思わないかい？まあ、メイドなんかは貴族の機転を期待しない方がよかったとは思うがね、それと君は一体誰なんだ？ああ、もしかしてルイズが召喚した平民の使い魔かい？それならここまで礼儀がなっていないのも頷けるね。」

「よろしい礼儀というのを教えてあげよう」

「おもしれえ！」

「ここでやるのか？逃げるのか？」

「ふざけるな、貴族の食卓を平民の血で汚せるか、ヴェストリの広場で待っている。ケーキを配り終えたら来たまえ。僕の都合でほかの貴族に迷惑はかけられないからね」

あゝ確かにギーシュもメイドにあの香水のときにあそこまでの機転を求めてそれができないからって八つ当たりするのはどうかと思うが、サイトもあの好戦的な性格はどうかと思う。「郷に入れば郷に従え」という言葉を知らないのかな？この世界は貴族制なのに、好き好んでやっているのか？それとも単にバカなだけなのか？たぶん後者のほうだろう。このままだと彼は間違いなくこの世界では長生きできないな。まあギーシュがサイトを殺しかけたら止めることにしよう。彼は多分もとの世界の喧嘩のような感覚で決闘を受けたんだろう。まあギーシュも憂さ晴らしで受けたんだろうが……・決闘というのはお互いの命を掛け合っているものだ……まあいいギーシュがサイトを殺して名義上でもヴァリエール家の令嬢の使い魔を殺してしまったということにでもなれば、ギーシュの肩身も狭くなるだろう。私はトリステインは嫌いだがトリステインの人が嫌いなわけではない。ルイズのように心底嫌いなやつもいれば、ギーシュのように中がとても良好なやつもいる。さてたぶんガンダ

「ルブの力を持っているはずだからサイトが負けることはないはずだが、逆にギーシュが殺されかけたときは助けるとしよう、誰でも友人を失うのはいやだからね。だがあの平民に一応忠告はしておく。」

「おい！その平民」

「なんだよ」

「君の国では、どうか知らんがこのハルケギニアは貴族制だ、つまり君たち平民の権利はほとんどない
どういうことを言っているかわかるかな？」
貴族に対しては喧嘩を売るなどいつているんだ！君が死んでも積みは問われないだろう

「なんだよ！喧嘩を売っているのか！お前もやんのか！」
ここまで好戦的だとは・・・

「わかってないな」

「なんだよ！俺のどこが悪いんだよ！」

「君の世界には貴族がないんだろう、でも昔はどうだ無礼うちとかなかったのか？」

「あつたような」

「そうそれが今の時代だ」

「「郷に入れば郷に従え」という言葉が東方の辞書にあつた。君も

その通りに生きるんだ。でないと
闇討ちとか受けて死んでしまうぞ、君の世界には理不尽かもしれないがこの世界では正しいとされることになることがある」

「だけど！」

「私は忠告した。その忠告に従わなければどうなるか……わかるかな？」

「わかりたくないよそんなの！」

「わかった」

こうしてサイトはヴェストリの広場に向かった。

べつにサイトの決闘を受けてもよかったがめんどくさそうだったし今思うと受けとけばいろいろとトリステインを脅すことができたが（たとえば演習を行っておこっていることを示しいろいろと条件を飲ませる）そうすればさらに殺伐とした学生生活のなりそうなのでやめておいた。それにのちのちこのトリステインはぼろを出すだろう。そのときまで待つか

21話

そしてヴェストリの広場に着いた

そしてギーシュが決闘をしようとしている。サイトはガンダールブだ、ギーシュでは勝てないだろう。

だが、サイトが決闘に勝利しギーシュに止めをさそうとした時は助けることにしよう。

「僕はメイジだ、よもや魔法で戦うことに異論あるまい」

「この『青銅』のギーシュのワルキューレが相手するよ」

「て、てめえ！卑怯だぞ！」

卑怯も何もこれがこのハルケギニアで6000年間も時代が停滞することになった主たる要因の1つ

なのだから、そしてこの力は貴族と平民の絶対的な差でもある。

が、しかしこのままギーシュが丸腰の平民をワルキューレでリンチしても、ギーシュのプライドが納得しないだろうからサイトにはガンダールブの力がどれほどか見極めるためにも、ギーシュには剣を作らせることにしよう。

「ギーシュ」

「なんだい？フリードリヒ」

「彼に剣を与えてはどうだ？」

「なぜだい？」

「いやね、いくらなんでも丸腰の平民を弄つても君のプライドが許さないだろうと思ったからさ」

「なるほど、確かにそうだね、よし彼にもチャンスを与えようとしてよ」

よしこれでガンダールブの力が見れるな

「平民君これを使って戦いたまえ」
「といって剣を錬金してサイトに渡した

「畜生やってやる！」
剣を握ったサイトはおお体が軽いう〜といていた。なるほどこれがガンダールブのルーンの力か

「じゃあいくよ、行け！ワルキューレ！」
とワルキューレが向かったが・・・

「うおりやああー！！！」
くズバ>ワルキューレが真っ二つになった

「何！僕のワルキューレが！」

「中はスカスカじゃねーか」

「ええい！まとめて行け！ワルキューレ！」
その後4体まとめてワルキューレが向かったが、ワルキューレは先ほどと同じ運命をたどった
そして

「どうだ！貴族！」

「ま・・・参った」

どうやらギーシュの精神力が切れたようだ
なるほどガンダールブの力は武器を持つと力が強くなりすばやくな
ることか・・・

だがこれは肉体を酷使するようだな・・・多分あいつの肉体はあの
力に振り回されているな

「貴族なんて弱いじゃないか！」

おいおいさつき警告したばっかだろ。そのようなことを言うなと

「平民君それば僕に対する侮辱かね」

「何だよお前は！」

「僕の名前はヴィリエ・ド・ロレーヌ」

「おまえもやんのか？」

ああ・・・頭を抱えなくなる・・・

「やめなさいサイト！ギーシュはドットだけど彼はラインなのよ」

「それが何だつてんだ！」

わかってないな・・・だがヴィリエ程度だったらサイトにまけるだ
ろうな

「よろしい、ギーシュに変わって私が礼儀を教えてやるとしよう。」

「やってやるうじゃないか！」

「僕は『疾風』のヴィリエだ！ぼくは風魔法で戦う」

「へ！どうせさっきのやつと同じなんだろう」

「ギーシュと一緒にされたは困るな！『エア・カッター』！」

「うお！」

何とかかわしたみたいだな

「ち！かわしたか！でも次ははずさない、『エア・カッター』！」

「くそ！みえない！」

風魔法は対人戦では強いからな

「くそ！またかわされた！当たれ！『エア・カッター』！」

「よし見切った！」

サイトはエアカッターをかわしヴィリエに一気に近づいた。

ガンダールブと交戦する際は、遠距離、中距離から弾幕を張ったほうが1番良い方法だな

格闘戦に自信がない場合は特に

「くらえ！」

<ズバ>

接近戦に持ち込まれヴィリエの杖が切られた

ああ、あいつも終わったな

「な・・・クソ平民の癖に！」

「どうだ！」

「フン！まだまだだ……『エア・カッター』」
お・・珍しい予備の杖を持っていたか

「又オ！」

だがかわされたようだ
<ズバ>

また切られたようだ

「へ！どうだ貴族！」

「畜生！」

どうやら負けたようだなヴィリエは

「やつぱりたいしたことはないじゃないか！貴族は！」

ああ完全に調子に乗っているな・・・そして力によっているな
だがさっきの動きを見ていたがジークの動きよりもぜんぜん遅いし
動きも単純

私にとっては負ける要素はないな・・・・
あいつ私がさっき言ったこと忘れていないか？

「君はさっきフリードリヒ様が言われたことを聞いていたのかい？」
ジークもそう思ったか

「なんだよ！そのフリードリヒというやつも弱いんだろ？」
あ・・・・地雷を思いつきり踏んだな・・・・よろしいここまで
吹っかけられたんだ
やらないほうがおかしいだろう

「君は死にたいのかい？僕の主君を侮辱するなんて……」

ジークが怒っているよ……普段は怒らないからなジークは……
・
・
温厚なほど怒ったときが恐ろしいというがその通りかもしれない……
・
これは私が出る前にジークがやりそうだ……さっきも抑えていたからな

「おもしれえ！やれるならやってみろ！」
しかたない殺さない程度にGOサインをジークにやった

「その挑発受けることにしましょう。」

「やめなさい！サイト！彼はスクウェアなのよ！しかも並のスクウェアじゃない
謝りなさい！サイト！死んじゃうわよ！」
ジークは白兵戦も、ものすごく強いからな……さっきの2人とは違って

「ふん！どうせあいつだつて弱いんだ！」
あゝあどうしようあいつ死ぬかもな……
あ……でもジークは殺しはしないだろうな……

「じゃあやろうじゃないか僕が相手するよ」

「ふんやってやるよ！」

「僕は『神速』のジークフリード……そう言われる理由を教えたあげよう」

「へー！じゃあ行くぜ！」

サイトはジークに向かっていった。そして剣をジークに向けて振っていたが
かすりもなかった。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン

「くそ！あたらねえ！」

「さっきの威勢はどうしたんだい？」

「畜生これからだ！」

といていたがぜんぜんかすりもなかった

「そろそろ決めさせてもらうよ！」

といってジークはサイトを蹴り飛ばした

「うぐわああー！」

4メートル位吹っ飛んだな……

「じゃあ行くよ！『カッタートルネード』！」

スクウェアスベルのカッタートルネードをジークは放った

そしてサイトは悲鳴を上げながら体のあちこちを切り刻まれボロ雑巾のように

なって吹き飛ばされ壁に激突した。

うめき声が上がっているから死んではないようだな……

やっぱり殺さなかったなジークは……

「しょ……勝者ジークフリード」

「ちゃんと殺さない程度にしたようだなジーク」

「はい、これで彼も頭を冷やすでしょう。」

「たしかにああいうやつは痛い目にあわないとわからないだろうな」とギーシュの元に行くと

「ん？ギーシュどうしたんだ？」

どうやら腕を少し深く切っているようだ。血が結構出ている

「大丈夫か？」

「だ・・大丈夫だよ・・いつつ」

どうやらさっきのカッタートルネードで飛んできた石で腕を切ったようだ

「大丈夫ではないだろう・・・医務室へ行こうギーシュ」

「・・・そうだなありがとう」

「立てるか？ギーシュ？」

「う・・つくすまない・・・さっきの決闘で力を使い切ったようだ」

「わかった肩を貸そう」

「すまない」

こうして医務室に向かった。

医務室に着き部屋に入った。

「先生、ちよつとギーシュが腕を切りまして……」

「ああなるほど確かに切っているわね……でも残念ね昨日水の秘薬が切れてしまったのよ」

……へ？

「昨日2名の重傷者が出たの……1人はオールド・オスマン
もう1人はコルベール先生よ」

「なにがあつたんですか？」

「オールド・オスマンはミス・ロングビルに痴漢をしすぎてミス・
ロングビルがぶち切れて

半殺しにされてしまったんですよ。まあ私も同じ女性ですからその
気持ちはわかりますよ」

なるほど……マチルダならしかねないな

「コルベール先生は、実験で失敗して大爆発が起きてあちこちにや
けどを負ったので

水の秘薬を大量に処方したら、水の秘薬が切れてしまったんですよ」

ああ、あの爆発音はそれが原因だったのか

そんな感じで説明を聞いているとサイトが運ばれてきた

「あ、あんた達そこで何しているのよ！」

「ギーシュの肩を貸してこの医務室に来たんだよ。腕を切っていた

「んだから」

「ミス・ヴァリエール使い魔の教育はちゃんとしてほしいな」

「それと水の秘薬は切れているよ」

「なんですって！そしたらサイト死んでしまうじゃない」

「いや、死にはしないだろう。見た限り致命傷になるような傷はないし」

「あんた達がそうしたんでしょ！」

「フン！こいつが吹っかけたんだろうが！」

「うう・・ルイズ」

「大丈夫だ、2、3日放つとしても生きているだろう」

最低限の止血はされているようだからな。見たところジークは手加減したんだろうな

そこまで深い傷はあまりない

「なによ！そんなわけないじゃない！」

「この秘薬は切れているんだろう・・・仕方ない、ギーシュこれを使え」

といってジークが調合した水の秘薬を出した

「ああ、これか君がよく使っていたね・・・模擬戦で重症を負う度に・・・」

そうなんですよスクウェアスperlを撃ち合っから模擬戦で重症を負うことがよくあるんですよね。

「ちよつとそれをよこしなさい！」

<ピシ>

「なによ！」

「やるはずないだろう。ほしいなら金を払え、そうだな3000エキューだ」

「ちよつと高すぎじゃない！」

「いやそれくらいが適正価格だよその秘薬の効能はすごいからね」

「そうね全治3ヶ月くらいの傷が翌日には治っていたんですものね・
・確かにそれくらいしますわよ

ミス・ヴァリエール」

月に1回重傷を負って医務室に運ばれてくるからね、ジークと私は

「無論私は、その対価に宝石をあげているよジークに」

「たしかにフリードリヒは渡していたね・・・でもあれは2万エキューはくだらない価値があると思うが・・・」

「ギーシュは、巻き込まれたただだからな、あの決闘に・・・だからこの秘薬は無料でギーシュに使うことにする。僕とギーシュは仲も良いからね・・・がそいつは喧嘩を吹っかけてきたんだ。それに私のも喧嘩を売っていたし、君はゲルマニアを蔑視しているからね・・・そんなやつらにこの秘薬をただでやるなんて人のいいや

っはいないよ。」

そしてギーシュに秘薬を渡した

「しかしフリードリヒこの秘薬をただでもらっていいのかい？」

「あの時君は精神力を切らしていてシールドを張れなかったしね・
・いつも僕達が重傷を負ったときに助けてもらっている御礼でもあるよ」

「ありがとうフリードリヒ」

ギーシュが傷口に水の秘薬をかけると、あっという間に傷口がふさぎ治った

「いつ見てもすごいな、この秘薬の効能は」

「そりゃあ、水のスクウェアでも極めている位置にいるからねジークは・・・」

「そうだったね・・・でもそこまでの位置にいるのならヒーリングで十分なんじゃないか？」

重傷を負ったときも・・・ヒーリングを使えば・・・」

「互いに精神力を結構使っているからね・・・秘薬のほうで楽で良いのさ」

「そうなのか・・・」

「さあ、どうする？ミス・ヴァリエール？君はさっき私の秘薬を奪

おうとしていたね……
それは人としてどうかと思うが？」

「あ、あんた何様のつもりよ！私は公爵家の娘なのよ！いいからそれを早く渡しなさい！」

「それは『トリステイン』のだろ……ククク私はゲルマニア貴族だ何で小国トリステインの貴族に
大国であるゲルマニア貴族である私がびくびくしなければならないんだ？」

「なによ！私は歴史と伝統のあるトリステイン貴族なのよ！あんた達のような野蛮なゲルマニアとは違うの！」

「歴史と伝統しかないの間違いだろう、それともさつき秘薬を奪おうとしていたが、ヴァリエール公爵家はそんなに金がないのかい？公爵家なのに……」

「そそ、そんなことないじゃない！」

「じゃあ払うんだな3000エキュー」

「くっ！」

「だが、金がないようだから、今回だけ1200エキューにまけてやる。だが即金で渡せよ」

「わ……わかったわよ……はい」

1200エキューが支払われた。財布の中身はほとんどなくなってしまったようだな

「主人と使い魔は一心同体だ、ちゃんと使い魔の教育をしないと君が・・・ひいてはヴァリエール家が損害をこうむることになる。ちゃんと使い魔に教育を施すんだな」
一応ここで忠告しておくことにする。

「わ・・・わかったわよ」

「ほら水の秘薬だ！」
ルイズに水の秘薬を渡した

「明日には目を覚ます、さっき言ったことを忘れずにするんだな・・・彼は暴走しそうだから」

「そ・・・そうね」

「じゃあ僕達は失礼するよ」

こういつて部屋を後にした

そして2日後

「おとといはすまなかつた」とサイトが謝りに来た
もちろんそれは許したが

「次私が言った忠告を守らなければ・・・わかってるね・・・君の行動はよく暴走するからね・・・」

「わ・・・わかったよ」

「ならいい」

そしてさらに3日後虚無の曜日になった。

さて今日は学院の保管庫の破壊の杖を強奪する日だ

昨日ジークとマチルダとともに計画を立てたからな。

回想

「やあマチルダ、よくきてくれたね」

「なんだい、また仕事かい？」

「そうだよ、今日は破壊の杖を奪うんだ・・・」

「へえまた「場違いな工芸品」かい？」

「フフ・・・よくわかってるようだね・・・」

「そりゃあんたが私に頼んで盗ませるものといったらそれしかないからね・・・」

「じゃあ、今回は僕達は手助けできない」

「なぜだい？」

「アリバイつくりのためさ」

「なるほど」

「固定化のかけられた保管庫は物理的な攻撃には弱いそうだ」

「へえ……つまり私にゴーレムを作らせて正面から保管庫を破壊させて破壊の杖を奪わせるってことかい」

「そうだ「破壊の杖」の形状はこんなものだ」

「杖って言うよりか筒って感じだね」

「そうだね、だけどそれはスクウェアクラスの破壊力を誇るらしい」

「結構物騒だね」

「それをつばったら物置小屋に置いてきてほしい」

「へえなぜだい」

「あの平民に使わせる」

「どうしてだい？あんたが使えばいいじゃないか」

「使い方がわからないからだよ」
「もちろんうそだが」

「なるほど」

「じゃあ明日は頼んだよ……報酬は1万5000エキュー渡すか」

ら」

「そんなにくれるのかい？」

「危険手当も込みだよ」

「わかったよ、じゃあ明日奪うよ」

回想終了

さて今はヘーパイストスに乗ってトリスタニアに向かっている。
ジークも一緒にアテナに乗ってきている。

30分後トリスタニアに着いた

「着いたねトリスタニアに」

「そうですねフリードリヒ様」

「じゃあ今日はどこに行こうか？」

「そうですね・・・」

「この町のカジノに行く？」

「なるほどカジノに行かれるんですね、いいのですか？」

「問題ない、行くぞカジノに」

「大負けして泣かないでくださいね」

「大丈夫だ」

そしてカジノ場に入った。

「らっしやい貴族様」

「じゃあルーレットをするよ」

「そうですか、どうぞどうぞ」

その後勝ちに勝ってカジノの支配人を大泣きさせた

「今日はすごい運ですね、フリードリヒ様」

「うんそうだな・・・この前は大負けしたが」

「フリードリヒ様が作ったカジノで、ですね」

「そうだ自分が作ったカジノで大負けする・・・」

「そうがっかりなさらないくださいフリードリヒ様」

「そうだな」

するとルイズたちが歩いているのが見えた

「そこで何しているんだい？ミス・ヴァリエール」

「何よフリードリヒアンタには関係ないじゃない」

「武器屋に向かっているんだよ」

「なぜ？」

「俺に武器を買ってくれるってさルイズが」

「そうか、じゃあ私もついていこうか？」

「あんたには別に関係ないわよ」

「そうかい、君は自分で買い物で交渉したことはあるかい？」

「あまりないわね」

「そうか・・・それじゃあ、君はかまれるな」

「なんでよ!」

「値引き交渉は買い物の基本だからね、言い値で買ったらぼったくられることがよくある」

「それに君は剣の良し悪しなんてわかるのかい？」

「そ・・・それは・・・」

「わからないだろうな」

「あんたも一緒に来てくれ、ルイズだけじゃ心配だ」

「わかった」

こうして数分歩いていると武器屋についた

「ピエモンの秘薬屋の横で・・・あつたここよ」

ああここは前、デルフリンガーを買ったところだな・・・

「ここか？」

「そうよ、入るわよ」

「らっしやい貴族様、うちはまっとうな商売をしています。何もやましい事なんてしてません。」

いやそういうと逆に怪しいと思われるぞ

「客としてきたの」

「そうですか」

ガラガラ

「やあ、主人元気にしているかい？」

「げっ！あのかの貴族の坊ちゃん」

「覚えていてくれたかい、デルフリンガーは元気にしているよ」

「へい、そうですか」

「あんた達知り合いなの？」

「そうでもないさ、前に1回この店に来たのさ、その時インテリジエンスソードを購入したのさ」

「そうなの・・・」

「貴族様何をお探して」

「剣を買いに来たのよ」

「ほうこれは珍しい、貴族様が剣を振られるなんて」

「どうして？」

「いえ、坊主は聖具を振る、貴族は杖を振る、兵隊は剣を振る、そして殿下はバルコニーから手を振るといいますからね」

結構皮肉が利いている気がするな・・・アンリエッタ王女はバルコニーから手を振ることしかできないということか・・・

「使うのは私じゃないわ、その使い魔よ」

「ほう、剣を使いになるのはこの方です？」

「そうよ、あいつに合うような剣を適当に選んで頂戴」

おいおいそれってかもってくれといっているようなものだぞ

「へいわかりやした」

1分ほどして持ってきたのは1本の金ぴかの剣だった。

「これはゲルマニアの有名な錬金魔術師シュペー卿が鍛えた剣でさあ、これは鉄もスパスパ紙のように切れますよ」

どうやらこの前の金ぴかの剣とは違う剣が来たようだ・・・多分

この前の剣は売れたんだろう
だが主人それも偽者だと思っぞ

「いいわね、それおいくら？」

「エキユー金貨で2200枚 新金貨で3000枚ですさあ」

「ちょっと立派な家と森付きの庭が買えるじゃない」

「名剣は城にも匹敵する値段がしますよ」

主人確かにそうだが・・・それはスーパー卿の剣じゃないぞ。
ちなみに私とジークの使っている剣は城以上の値段がする。

2本とも3ヶ月以上剣を鍛え、刃は炭素クリスタルつまりダイヤモンドが使われており、刃や柄には

風石、土石、火石が埋め込まれており、意識すると剣から土魔法のブレードやかまいたちのように

エア・カッターが（鉄もスパスパと切れた）そして火魔法のファイアーボール（当たったところが爆発して小さいクレーターができた）を撃つことができ、2本の剣にはスクウェアの最上位になっている私が固定化と硬化をこれでもかと言う位重ねがけしまくったからね・・・だから1本刃がすべてダイヤモンドでできていて精霊石をふんだんに使われていて、スクウェアの最上位である私が固定化と硬化をかけまくったことを考慮して1本100万エキユーはくだらないだろう。

「買えないわねえ、じゃあほかのない？」

「そうですねえ、これなんてどうですか？」
「といってレイピアを持ってきた」

「最近「土くれ」のフーケなるメイジの盗賊が現れまして下僕にも剣を持たせることが

はやっておりまして、そう言った方々がお選びになるのがこの剣でさあ」

なるほど身の安全を確保するためか……そしてその「土くれ」のフーケの正体は俺たちなんだけども……なるほどだから最近剣を持っているやつが多いのか

「へえ、これいくら？」

よく見るとこれはクルップ製の剣だな、貴族が好むように装飾も施しているし

「金貨350枚 新金貨だと500枚でさあ」

「ちょっと高いわねえ」

「ちょっとお嬢さんいくら持ってきたんですか？」

「金貨100枚しかもって来てないわよ」

おいおい相当値引きしなければいい剣は買えないぞ

「お嬢さんそれだけしかないならいい剣は買えませんが、そうですね……」

といって店の奥へ入っていった

「これなんかしか買えませんか」

なるほど装飾の施されていないレイピアか……しかし見たところあの金ぴかの剣よりかはぜんぜん切れ味の有りそうだしクルップ製の剣には劣るが実用性の高い頑丈そうな剣だった

「ちょっと地味じゃない」

「ミス・ヴァリエールいい剣とは使いやすく頑丈な剣だ、あの剣はその値段にしてはなかなかいいと思うよ」

「そう、じゃあそれをもらおうかしら」

「へい、ありがとうございます」

「平民君、どうだ？」

「なかなか振りやすいし、使い勝手がよさそうだ」

「そうか、ならよかった」

こうして武器屋を後にした。

22話

そして私はルイズたちとは離れ急ぎ学園へ戻った。

そして自分の部屋に着くとファクシミリから4か月分のゲルマニア国内情勢報告書が届いていた

「全国的な地質調査をした結果地下数百メートルに風石の大鉱脈が大量にあることが判明した。

このままだとアルビオンのように浮遊大陸になりかねないので2ヶ月前からこれらの鉱脈の採掘を

開始し1ヵ月後には最初の風石が採掘される予定」

なるほど確かにそうだこれで大地が空に浮かぶという理由で聖戦を起こされては困る

「2ヶ月前にマザリーニ枢機卿の必死の外交努力の結果、ゲルマニアとトリステインの同盟が決定、条件は片務的最恵国待遇を認めること、トリステインの自由貿易を認めること」

よくそこまで認めたな・・・だが王族の親子はゲルマニアが嫌いだそうだ・・・私としても足手まといを作りたくない・・・まあレコンキスタはアルビオン王家を倒したら絶対にまずトリステインに行くだろう。ガリアは（名目上は）ハルケギニア最大の国であるし人口も最多だ、我がゲルマニアは、最近の国土改造で他の4国の圧倒する生産力があり人口も急増している、そしてガリアと違って今は国内は1つにまとまっている。トリステインは人口は徐々に減少しているし国力も低いし団結もしていない

2ヶ月前

回想

S i d e ヴ ィ ル ヘルム

王宮の客間にマザリーニ枢機卿とヴァリエール公爵夫妻にその娘エレオノールが座っていた。

こちら側は僕とフリードリヒの代理のオーベルシュタイン

彼はフリードリヒが5年前に雇ったブレーンでフルネームは

パウル・フォン・オーベルシュタイン、年は24歳 6年前、前オ

ーベルシュタイン子爵が死んだ際に

長男と次男が家督争いを開始したため、3男である彼は相続権を放棄しとつとオーベルシュタイン家を出て行った。その後フリードリヒに自分を売り込みにいきそのまま採用された。

彼は謀略、戦略、政略、内政にかなりのスキルがあり。その分野でフリードリヒを補佐している。

ジークは戦術、戦略といった戦いの面でフリードリヒを補佐している。

彼は感情や倫理、人道より目的達成のための効率・能率を優先させるようだ。

まあフリードリヒも同じようなものだけど

「おやおやマザリーニ枢機卿にヴァリエール公爵どうなされたのですか？」

とオーベルシュタインが言った

「彼は誰なのですか？」

とエレオノールが聞いてきた。

「私はクルップ侯と我が主人であるその子息フリードリヒ様の代理でオーベルシュタインと申します」

「なぜ代理人が来ているんですか！」
「はいちいち突つかからないですよ」

「クルップ候は、今手が放せない状態でしてね、我が主人も貴国に留学なされているので」

「さあ本題は何ですか？」

「レコンキスタの件で話をしたい」

「どうぞ」

「レコンキスタは聖地奪還を掲げている。聖地奪還のためにアルビオン王家を倒した後さらにほかの国へ侵攻するだろう」

「なるほど・・・それで？」

「アルビオン王家はもう瀕死の状態だ、もうすぐ倒れてしまうだろう」

「ほうほう」

「次はトリステインが侵攻される可能性が最も高い、だがそれだけではゲルマニアは大丈夫だろう・・・しかしトリステインが征服されたら次に来るのはゲルマニアだ、それはそちらにとってもあまりよくないだろう？」

「確かにゲルマニアが戦場になるのはとても避けたいけど、ガリアにも行くんじゃない？」

「建前の上では、ブリミルの子孫の建てた国はあまり攻撃しないと思うが」

「だけど、アルビオン王家はどうなんだい？あそこも始祖の子孫が建てた国だけど・・・」

「聖戦に協力しなかったから仕方なく攻めたんだろう、やむを得ず攻めたんだろう」

「そうかい、じゃあトリステインはレコンキスタに協力すればいいじゃないか、そしたら攻められることはないはずだけど」

「それが無理だから同盟を頼みに来たんだ」

「それにゲルマニアが攻められるとは限らない、アルビオン王家のような理由でガリアが攻められる可能性もあると思うけど、位置的にガリアのほうがサハラに近いし」

まあそれはありえないなレコンキスタの後ろにはジョゼフ王がいるということがわかってるからね

「しかしゲルマニアがトリステインの後の攻撃目標として有力なのは事実だ」

「別にトリステインが占拠されても、トリステインごと新造されたゲルマニア軍が殲滅すればいい話だしね？そうだよネーベルシュタイン？」

「はい殿下、フリードリヒ様も同様のことを言っています」

「くっ！」

「しかしそれでは同じだと思いがどちらにせよ」

「君たちは僕達を蔑視しているからね、君たちを助ける義理はないのさ、それに足手まといの君たちがいるかないかで大きく勝手が違うからね」

「私たちトリステインが足手まといだと！」

おいおいこれくらいで怒らないでくれよ交渉に来たんだろ

「だってそうじゃないかトップがいらない不安定な国なんて誰が信用すると思う？マリアンヌ太后があの時王位につくべきだったけどならなかったでしょ？喪に服したいとかで・・・フフ

王族としての義務を果たしていないじゃないか、それに王位に誰もついていないし、そんな国と同盟組んでもいいことないと思うし・・・そんな感じで国内の貴族をまとめられるのかい？」

実際そう思う

「アンリエッタ王女ならできます」

「そうかい大丈夫かな？帝王学もともに受けさせてないようだけど？なんでも伸び伸びと育ってほしいとかで？フフ笑ってしまいそうだよ」

頭の中はお花畑が広がっていきそうだね

「かなりの確率で国内の貴族はまとめきれないと思います殿下」とオーベルシュタインは言う

「われわれトリステイン貴族は皆国に忠誠を誓っている」

「そうかい？ 諜報部の報告からトリステインにはかなりのレコンキスタのシンパがいるそうだけど？」

フリードリヒの諜報組織とゲルマニアの諜報組織からシンパのリストが手に入っているけどね

「そのようなことはない！」

「フフ・・・だったらわれわれゲルマニアの助けは要らないじゃないか」

フリードリヒが内戦に火に油を注いでかなり国力を消耗しているそうだからねアルビオンは

だからトリステインが団結してクルデンホルフから資金をもらえばなんとか大丈夫だと思うけどね

まあ貴族達が団結していないと無理だが

「・・・・・・・・」

「あれ自信がないんですか？」

「交渉するにしても政情がとても不安定な国とは交渉できない。自国をどうかしてください」

「なによ！ 私たちトリステインがここまでして頼んでいるのよ！」

「エレオノール女史！」

「ほらそういう態度ですよ、そちら側がこちらにお願いしているの

に」

「ですが殿下条件付で同盟を結んでもいいと思います」

「へえそう思う？オーベルシュタイン？」

「はい、まずトリステインは一切ゲルマニアの商品に関税をつけないこと、ゲルマニアの商人を優遇すること、ゲルマニア商品の流入に一切規制をつけないこと、片務的最恵国待遇を認めることですね。」

「これらはフリードリヒ様が言っておられました」

「なるほどね、ああ父上はこの条件を飲まなければアンリエッタ王女と自分を結婚させるといつているからね」

「飲みますか？この条件を？マザリーニ枢機卿？」

「少し条件がきつすぎないか？」

「いいえこのくらいは飲んでもらわないと……別に我々は同盟を組まなくていいんですからね」

「いいじゃないですか、我ら野蛮なゲルマニアにこの条件を認めれば始祖の血を渡さなくていいんですから。そうですよね殿下？」

「そうですよ、あなた方だって我々に始祖の血が混じるのはいやでしょう。そうですよねヴァリエール公爵？この条件を飲まないとなた方は父上を皇帝陛下と呼ばなければなりませんよ」

トリステインの貴族はプライドだけは高いからね『陛下』と呼ぶこ

とに屈辱を感じるだろうからね

「そうだな、飲んでもいいのではないかな？マザリーニ枢機卿」
フフフ・・・これでフリードリヒはトリステインから搾り取るだろ
うな金を

「むむむむ・・・」

天秤が揺れ動いているだろうな、多分一番いいのはアンリエッタ王
女にゲルマニアに嫁いでもらって同盟することだろうが・・・そ
んなこと国内のプライドだけ高い貴族達が認めないだろうし・・・

それに早く同盟を結ばないとトリステインがレコンキスタに蹂躪さ
れることになるし、そのあとはゲルマニアが蹂躪するだろうな。表
情が苦虫をたくさんかみ殺しているような顔をしているし

「・・・いいでしょう」

こうしてトリステインはゲルマニアと同盟することになった。

しかし同盟の条件によって多数のゲルマニア商人が大量の安く質の
いいクルップで作られた製品がトリステインで大量に売られるよう
になり、トリステイン国内の商会とギルドは深刻なダメージを受け
た。

なまじ工業化されて安くて質のいいものが大量に作れるようになった
たから余計にダメージを受けることになった。おかげで新たな火種
を抱え込むことになった。

side out

これでトリステインでの市場はものすごく拡大したな、多分あの王
族親子はゲルマニアが嫌いだから、同盟は早く失効することになる
だろうな。だがこの利権は離さない、これを剥奪しようとしたら武

器や戦略物資の供給停止など処置をとることにしよう。国境には大軍を張り付かせてね

ん？これはなんだ？

「神より、これを読んだとき君の頭に未来技術が入ってくるようにしてあるから、この知識でがんばってね」

「……まあ喜ぶべきだろう……おおすごいぞ人工知能とかロボット技術が……これはすごい……核融合炉まであるし……お！スターウォーズのドロイドだ

それとこれは何だ？

「フリードリヒ、許婚が決まった。相手は皇帝閣下の娘のマリア様だ、よかったな」

「……マリア様が……あの方は……まあ活発であるし頭がよく回転するし

それに皇帝閣下の娘だ……相手には申し分がないが……少し気が強いしな……アップパーを食らわされたことがあるし（そのとき気絶してしまった）

しかしあの腐れ皇太子を「御義兄さん」と呼ばなければいけないと考えると……

まあいいかな

回想

「そういえばクルップ候、フリードリヒに許婚っているの？」

「そういえばおりませんな」

「そうかならよかった」

「というと？」

「いやね父上がクルップ家とのつながりをさらに強くするために自分の娘の一人とフリードリヒを結婚させようとしているんだよ」

「なるほど、それはいいことですな」

「それでね僕の妹のマリアと結婚することになったんだよ」

「え！マリア様とですか？」

「そうなんだよ、マリアは少し気が強いし頭の回転が速いから、並の大貴族じゃあ耐え切れないと思うんだ、だからフリードリヒなら大丈夫なんじゃないかって」

「ほらフリードリヒは頭の回転はものすごく速いし強いし優秀だからね、それにマリアのやつも「フリードリヒ様なら」といつてかなり乗り気だし」

「そうなんですか」

「でもよかったよフリードリヒがいて、彼がいなかったらマリアは婚約者がいないままということもありえそうだったからね、ほら気も強いしね」

「しかし、マリア様ですか・・・」

「でもそれでフリードリヒもよかったかもしれない、あやつの性格についてこれ、対等に話のできる女性といったらそうそういませんしな」

「そうかい、ならよかったよ」

「これで僕にも優秀な弟ができるね」

「フリードリヒをこき使う気ですね」

「これも自分が少しでも楽をするためさ」

「……フリードリヒに大変な兄さんができそうだな」

side out

4年前に創設した科学魔法統合秘密研究所からも報告書が届いた
この研究所は異端とされた魔法の研究者や科学者に同じく爪弾き物
にされたエルフや先住の民たちを集めて（ようは科学と魔法のマッ
ドな研究者達）

作った研究所だ。なので科学と魔法技術はものすごく高い、おそら
くハルケギニアでも最高の魔法技術と科学技術があるはずだ……

それで「人造火石の製造に成功した」と報告書が来た。

2年前も人造の風石の製造に成功したから、風石の配給に困ること
がなくなったからね。

土石も作ってほしいな。火石は複数個を瞬発的に同時に爆発させ
るとものすごい爆発が起こるらしいからね……。それに火薬よ
りも管理が楽だしね。

それにおととい転移の鏡が届けられたね。これで領地と寮の移動が
楽になるね……

早速神からもらった知識を利用（悪用）してすごいもの（悪乗りの産物）を作るぞ

ちなみに話していなかったが研究所は北方探検の際に見つけられたクルップ島とは違う島（結構大きい）にあり研究所と領内にある屋敷の近くの自分専用の研究所の地下にある転移の鏡で行くことができる。

早速メタルギアシリーズをつくってみたいな。

お、もうすぐ計画の時間だな寮の外へ出るか

寮の外に出ると面白い光景が目についた……

ああサイトが糞虫の状態になってつるされている。そしてルイズがサイトに向けて魔法を放っている

サイトにとっては災難だな、どこに来るかわからない爆発魔法が自分に来るんだからな……。うお！あれはきわどいな……。たぶん縄を切ろうとしているんだろが……。サイトを殺そうとしているのだろうか？ちょっとちょっかいをかけに行こう

「やあ、サイトを殺そうとしているのかい？」

「あら、フリードリヒ」

「何よ！」

「いやね、どう見てもサイトを殺そうとしているとしか見えないんだよね……。そんなに殺したいのなら銃を借そうか？」

「そそそそんなことないわよ」

「って何で俺を殺そうとしているんだよ!」

「だってこの光景は・・・縄が切れたら下に落ちるだろうし・・・どう見ても殺そうとしているとしか判断できなくてね」

「で?なんでこのようなことになっているの?」

「二人がサイトのために剣を買ったのそれをどちらがもらっただの決闘」

説明ありがとうバサ

「なるほどね」

そして決闘の理由がしょうもない

「それであの縄を速く切ったほうが勝ちという事か」
縄が切れたらシルフィードが助けに行くってことか

「そう」

「じゃあお二人さんがんばって」

「ええ」

そのあとキュルケがファイアーボールで縄を切りサイトは悲鳴を上げながら落ちていった
それをシルフィードが拾った。

まもなくだな・・・

「さて僕は失礼するよ」といつて離れた

数分後20メートル位のゴーレムが現れた。

「うわあなんだあれは！」

「ゴーレムよ」

そしてゴーレムは学院の宝物庫へ向かった。

キュルケはファイアーボールを、タバサはジャベリンを、ルイズは失敗魔法を放ったが

ゴーレムは少しの傷を受けたがすぐに再生される。

そして前もって壁にひびを入れていた所にゴーレムが思いつきり殴り壁を破壊し何かを奪っていった

そして『破壊の杖、確かに頂きました。土くれのフーケ』と書かせた。

そのあとゴーレムを学院の外壁を越えさせた後に土に戻しわざと黒のフードをかけた姿（ジークの偏在）を見せそのまま森に向かわせた。そして森の中にある廃屋に破壊の杖（m72）を置いた

そして翌日

なぜかオールドオスマンに呼ばれた。

今日は盗難騒ぎで授業は行われなかった。

「君たちが犯行現場を見ていたのかね？」

「そうです。オールドオスマン」

「私はあまりよく見ていないんだよなあ」

「詳しく説明したまえ」とミスタ・ギトーがいった

「はい巨大なゴーレムがいきなり現れて、学院の宝物庫を破壊していったんです。

そのとき破壊の杖らしきものを奪っていきました。その後外壁を越えて行った後

ゴーレムは土になって・・・そのあと黒いローブをつけている人が見えました。

多分それがフーケだと思います。」

「なるほど」

「先生方その日の当直は誰だったんでしょうね？」

「ミセス・シュヴリースじゃ」

「しかしそのとき迎撃のゴーレムらしきものは出てきませんでしたか・・・」

「まさか・・・当直をサボっていたとか？そんなことはありませんよね」

「すみません著書の執筆に夢中で・・・」

「ミセス・シュヴリース！この責任をどう取るつもりですか！」
とギトーがいったので

「しかしそういうミスタ・ギトーも当直はちゃんとやっていたんですか？」

「そ・それは」

あんたもやっていなかったんかい！

「これは我々皆の責任じゃ、ミセス・シュヴリーズだけの問題じゃない」

いいこと言っなオールドオスマン

「しかしこれは大変ですね・・・多くの貴族の子弟が通っているトリストイン魔法学院に白昼堂々盗賊が侵入しかもこともあるうか物を盗まれ逃げられる。これは王宮に報告しなければなりませんね」

といていると

ボタン マチルダが入ってきた

「ミス・ロングビル！どこで何をしておったのじゃ」

「フーケの情報を探していました。付近の農民に聞いたところ黒のフードの男が森に入っていた

森の廃屋にいるという情報がありました。」

「それは本当か！ミス・ロングビル」

「はい」

「それです！それがフーケです。」

「距離は？」

「ここから馬で2時間、徒歩で6時間くらいです。」

「なるほど、これで位置がわかりましたね・・・王宮に報告しないでいいんですか？」

「何なら私が報告しますが？」

「それは必要ない。我らはメイジじゃ　フーケを捕まえればシュバリエは硬いぞ！我はと思うものは杖をあげよ」

しかし誰も杖を上げない

「なんじゃ誰も上げないのか？」

「ミスタ・ギトーあなたの風最強論を実践する機会ですよ」

「おおそうだった！だが今は杖を新調中で・・・いや残念だ」
「あんたが換えの杖を持っていることは知っているぞ」

「ミセス・シュヴリーズ汚名をなくすいい機会ですよ？」

「いえさつきから体調が・・・」
「それ本当か？」

「私行きます！」

・ おいおいマジかよ、ルイズが行ってもあまり役に立たない気が・・・

「ミス・ヴァリエール君は生徒じゃなぜ行くのじゃ！」

「だって皆さん行かないじゃないですか！」

「う！・・・」

ここで教師が杖を上げろよ

「私も行きますわ、ヴァリエールがいくなら
キュルケが杖をあげた

「不安」

タバサもあげた

でなぜか私たちに視線を向けてくるオールドオスマン

「何ですか？」

「・・・・・・」

「私が負傷してもあなた方が責任を取ってくださいよ」

無論負傷する気はないが・・・学院長人選を考えましたか？いくら伝説のガンダールブがいるからといって、国内の最大貴族の令嬢、ゲルマニア最大の貴族の息子とゲルマニアの大貴族の令嬢、そして一番いけないのがガリアの王族を連れて行くこと。

どう考えてもやばい気がするんだが・・・今は戦争を起こす気はない

だけどタバサは腐っても王族なのだ、もしも重傷もしくは死亡したら表面上は悲しみにくれないながら

内面的には嬉々としてトリステインに攻め込むに違いない。

ただど行くかどんな戦法を取るか見てみたいしガンダールブの力がほかに何かあるかもしれないから
本来はこれはトリスティンの問題なんだけどな、まあ自分が作った問題だが

「わかったのじゃ」

「じゃあ行きます」

するとサイトが関係なさそうにしていたので

「そこの使い魔君、君は関係なさそうにしているが君も行かなければいけないのだよ」

「え！そうなの」

「そうだよ主人であるルイズが行くのためから・・・使い魔と主人は一心同体と決まっているのだからね」

ルイズが行くと決めたらたとえ火の中水の中行かなければならないのだよ」

「そ・・・そんな」

「どうやら話は終わったようじゃな、ほかに誰もおらんのか？仕方ないの・・・」

おぬし達に任せるとするか・・・」

「オールド・オスマンあなたは行かないのですか？」

「このおいばれを逝かせようとするのか」

「いえただきいてみただけです」

「オホン・・・ミス・タバサは若くしてシュバリエの称号を持つ騎士であるし、ミス・ツエルプストーはゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出している名門で2人ともトライアングルじゃ」

「ミスタ・クルップは、盗賊と幻獣を殺しまくっており数年前の反乱の際も

軍を率いていたそうじゃ、そして彼は2系統のスクウェアであり、ゲルマニアでは

シュバリエよりもっと上の柏葉・剣付騎士鉄十字章を持っている騎士じゃ」

「ミスタ・キルヒアイスも2年前の反乱の際は兵を率いており、2系統スクウェアであり

ミスタ・クルップより1つ下の柏葉付騎士鉄十字章を持っている騎士じゃ」

「タバサあなたシュバリエなの？」

「ん」

「って言うかフリードリヒあなた柏葉・剣付騎士鉄十字章を持っているの！」

「そうだけ聞いてないの？」

「聞いてないわよ！もうその年でお父様と同じ勲章を持っているなんてすごいわね」

「そうかい」

「そうよジークフリードも柏葉付騎士鉄十字章を持っているなんて・・・」

「ねえ？ツエルプストーそんなにその勲章ってすごいのか？」

「ゲルマニア軍人としてはぜひもらってみたい物よ、騎士鉄十字章は・・・」

騎士鉄十字章を持っている人は英雄ということよ」

「へえそうなの・・・」

「年金の額も高いのよ・・・フリードリヒの持っている勲章は年7200エキュー、ジークフリードの持っている勲章は年5000エキューもらえるのよ」

「すごく高いわね・・・フリードリヒなんか月でシュバリエの年金以上の金をもらっているわね」

「だけどその代わりすごく限られた人しかもらえないのよ・・・それをその年でもらっているってすごいわね」

「うむ、ミスヴァリエールはこのトリステインの名門中の名門数多くの優秀なメイジを排出しているヴァリエール公爵家の令嬢で、座学は優秀、そして使い魔はラインメイジも容易に倒せるメイジ殺しでもある、強力な剣士じゃ」

「へへ強力な剣士か」

あのゴーレム相手に剣はほとんど役に立たないぞ

「なんか私のことはほめられていない様な・・・」
そうほめられていないんだよ

「では馬車を用意するから、ミス・ロングビル案内は頼んだぞい」

「はい」

こうして怪盗土くれのフーケ討伐隊は出発した。

23話

そしてフーケの廃屋に着いた

「ここが天下の大盗賊土くれのフーケの居場所？」

廃屋はあちこち散らかっていた

「そうみたいだね」

「なんか寂れた場所にいるわね」

「こういう場所のほうで隠れるのにはいい」

「さあ作戦を考えよう無策に飛び込むのもいやだし」

「そうね、あの廃屋の中に行くのはすばやいのがいいわね、おとりもかねて」

「じゃあ、彼がいいんじゃない？すばやかっただし」
サイトのほうに指を向けた

「何で俺がするんだよ」

「だって君は武器を持つと速くなるじゃないか」

「俺よりかジークフリードってやつの方がいいと思っただけだな」

「そうかい？」

「そうだよ」

「じゃあジーク廃屋の中に入ってきてくれ」

「私は少し離れた場所で周りを警戒しますね」

「そうしてください」

マチルダいいゴーレムを作ってくれよ

「わかりました」

そしてジークは廃屋の中に入っていった物を取ってきた

「破壊の杖ってこれですか？」

「そうらしいな」

すると30メートル位のゴーレムが現れた

「フーケのゴーレムだ！」

「来たか！全員攻撃開始」

「『ファイアーボール』」

「『ジャベリン』」

「『ファイアーボール』」

「『ジャベリン』」

ジークと私は意図的に威力を落としあまりゴーレムにダメージがないところを攻撃した。

（本気でしたら一撃で木っ端微塵になるため）

「何度も何度も攻撃してもあまり効果がないなあ」

「そうですね、欠けた部分は即座に再生されてますし」

土のゴーレムでマチルダはそういう仕様にしている。が胴体を木っ端微塵にすれば倒すことができる

足や手は攻撃してもほとんど無意味

「これはお手上げねえ、あなたは足を攻撃して蒸発させているようにだけどすぐに再生されているし」

「しかしこれから逃げるとなると少しきついな」

逃げながら魔法を放っている……このままだと精神力が切れることになる

「そうね……あのゴーレムの動きをとめることができればいいけど」

「足を攻撃して止めてはいるけど徐々に追い詰められているからね」

「そうだな……『破壊の杖』を使うというのはどうかな」

「あれって使えるの？」

「わからないけど破壊という名前がついているから、威力は高いん

「じゃない？」

「でも使い方がわからないじゃない？」

「そうだね……使い魔君わかるかい？」

「わからないよ」

「そうか……それは残念だな」

「しかしどうしようかな……しかたない撤退するか一応目的は果たしたし」

「そうね『破壊の杖』は取り返したし」

「ヘーパイストス！」

するとヘーパイストスはこっちへ来た

『主どうした？』

撤退だ

『そうか目的は果たせなさそうなのか』

そうだ……ちょっと力を見たかったが

『主ならあんなもの1発じゃろ？』

まあそうだけど

「じゃあ僕はこれに乗るから、ジークはアテナに……ミス・ロングビルは私が回収する」

「君たちはシルフィードに乗せてもらえ」

「わかったわ」

タバサ、キュルケ、サイトの順で乗ったがルイズは乗ろうとしなかった。

「ルイズ早く乗りなさい！」

「嫌よ！貴族とは背を向けないものよ！」

「今はそんなこと言っている場合か！」

「そつよ早く乗りなさい！」

「嫌よ！」

誇りを持つのは結構、だがその誇りで味方を巻き込むな！

「ああ！これだからプライドの高いトリスティン貴族は！」

「いいじゃないか、本人が行きたくないといっているんだ！そうしてやれ……それに、はやくしないと私たちまで巻き込まれる」

「……破壊の杖を使おう」

「主人を助けるためか？」

「まあそんなところだ」

そしてケースの中から破壊の杖を持ち出した。

「うそだろ何でこんなものがここにあるんだ？」

「何か知っているのか？」

「これは俺の世界の兵器だ」

「なるほど」

「使い方は知っているのか？」

「ああ・・・使ったことはないけどなんだからわかる気がする」

そしてサイトは破壊の杖を構え撃った。そして見事にゴーレムに命中！

そしてゴーレムは上半身が吹き飛んだ

「すごい威力だね」

実はクルップ軍にもロケランではないがRPG-7が採用されている。一部にはカールグスタフも配備されている。対ゴーレム用として

「ええそうね」

「これは何発も撃てるのかい？」

「いや単発式で1発だけだ」

「そうかい・・・」

すると森の中からフーケがあらわれて

「フハハハそうだったのか扱い方がわからなかったから、教師なら知っているだろうと思えばおびき寄せようとしたら教師が来ない、変わりにお前達がやってきたためかと思ったらお前達も使えると言うものがいた。だから使わせてみたら１回しか使えないとは残念だ・・・このままここにいても利益はない、逃げさせてもらおうよ」

といって森の中に消えた

さてガンダールブはあらゆる武器の使い方がわかるようだ。戦争にはいい能力だな

「さて破壊の杖は取り戻したから学院に戻ろうか」

こうして学院に戻った

「君たちよくやってくれた。土くれを逃がしたのは残念だが、破壊の杖は戻ってきて、君たちも無事に帰ってきた。これほどの朗報はない」

「ありがとうございます」

「わしから君たちにお礼をやりうと思っている。」

「そうじゃな・・・１人５００エキューやりうと思っている、もちろん使い魔君にもじゃ」

「やったー！」

500エキューが結構大枚をはたいたな

「では明日はフリッグの舞踏会じゃ、楽しむのじゃぞ」

「はい！」

こうして部屋に戻った。

よし目的は達成したな、自分に対する危険物の除去にガンダールブの能力の確認

さてどうしようかな・・・せっかく神からもらった能力が学院で忙しくて生かせないじゃないか

どうしよう・・・そうだ！スキルニルを大量に買ったり作ればいいんだ！

よしそうと決まれば早速今から準備をしよう、まずジークに頼んで偏在でスキルニルを
できるだけ買うようにしよう。

「ジーク」

「はい」

「明日偏在を出してスキルニルを買ってきてくれ」

「なぜですか？」

「せっかく転移の鏡が届いたんだ、私は風が苦手だから偏在は作れ

ない・・・だからスキルニルで私の分身を大量に作り研究所でいろいろ実験をしたい」

「なるほど」

「研究所で新型のガーゴイルを作ろうと思っているんだ。だが私は学業があつてなかなかいけない」

「そうですか・・・次は新型のガーゴイルですか・・・今までのいものをたくさん作られていますからねフリードリヒ様は」

「頼んだよ、費用は私がもちろん出すから」

「はい」

こうしてジークは偏在を5体だしそれぞれ別方向へスキルニルを買いに行った。

そして今日はフリッグの舞踏会だ・・・

私は珍しくダンスをすることにした。

「珍しいね、君がダンスをするなんて」

「まあそうだね、今日は気が変わったのさ」

「ギーシュ君は誰とダンスをするのかい？」

「モンモランシーとさ」

「そうか許してもらえたかよかったな」

「君が案を出してくれたからさ」

ギーシュは彫金が得意らしく、使い魔もジャイアントモール、だから使い魔に宝石を捜すように行ってそれで彫金をすればいい、それに謝罪の書状をたしなめて一緒に送ればいいと言った。

モンモランシ家は精霊を怒らせて（アンドバリの指輪を奪われたから）干拓に失敗したらしい

だから今は負債を大量に抱えているんですね。だから娘のモンモランシーは金銭感覚がものすごくシビアになっていて香水で小遣いを稼いでいるんですね。なので宝石などには弱いと思い（このままだと一生宝石を買えない運命になるかもしれないから）、友人なのでこういう提案をした。その後ヴェルダンテが宝石の原石を取ってきてギーシュはそれを磨き彫金してそれを手紙とともにモンモランシーに送ると許してくれたらしい。ちなみに私も研究所にいる土人の縁からジャイアントモールやジャイアントワーム数十匹をそれぞれ従えている。私に土石や風石、数々の宝石の原石を大量に与えてくれる代わりに、私からは食料を大量に与えている。今は彼らはクルップ領でその仕事をしている。そして月に一度それが私の元へ届けられてくる。

「そうかい」

「そうだよ」

「だけど私にダンスを申し込む令嬢はいるのかな？」

「君は顔もいい資産もあるし領地も広大言うことなしだと思うけどな」

「そうかい？」

「そうだよ」

「まあダンスを楽しむことにするさ」

「そうしたほうがいいと思うよ」

「お！ギーシュダンスの申し込みがあるぞ、行かなくていいのか？」

「そうだね、行ってくるよ」

こうして数時間がたち舞踏会は終わった

そして3日後

「ジークどれ位スキルニルを買うことができた？」

「30体です。」

「まだまだ足りないな」

「3万エキューほど使いましたが」

「まあそれくらいの出費はいい」

「しかしどうします？」

「そつだな……スキルニルを作るか」

「作り方わかるんですか？」

「まあな」

「はじめて知りました」

「研究所にいるエルフに教えてもらった。だが作るためには生きた人間が必要なんだよね」

人間を煮込んで魔法をかけて作るらしいからな……レシピは頭に入っている。これは土のスクウェアでかなりの上位でないと作れない代物だからな

「なるほど……」

「なので次の虚無の曜日に出発しようと思っている……そうだな授業には記憶を引き継げる改良型スキルニルを出すでしょう」

「そうですね」

その後数時間かけ30体のスキルニルを改良型スキルニルにした。28体のスキルニルは私の血をつけ、研究所で新型ガーゴイルの製造を命令した（メタルギアとb1バトルドロイド）

そして虚無の曜日……

「ではジーク賊を生け捕りにするぞ、リストはここにある（KGB提供）ここにある賊たちを成敗しに行くぞ」

「はい……賊が可哀想に見えますよ」

「まあいいじゃないか、私たちの計画のために生贄になってもらお

う」

装備はドラグノフ狙撃銃に弾は麻酔弾を大量に持ってきている。

「そうですね」

「では行くぞ」

「はい」

こうして賊を生け捕りにする計画をはじめた。

24話

さて今は賊の砦の近くにいる

「さてジーク、あれが賊の砦かな？」

「多分そうだと思います。」

「だよ〜いかにもって感じだもん。」

「ジーク、ガスマスクをつけて……歩哨が来たようだ……」

「私が始末しましょうか？」

「頼む」

ジークはスタンロッド（電圧は上げてある）をもって歩哨に近づいた。

「ここらで俺達に逆らうやつなんていんぐぐぐぐぐー！！！！？」

「始末完了」

気絶した歩哨は鋼鉄の糸でぐるぐる巻きになって拘束された。

「ジーク、ご苦労……ではガスマスクをつけよう。今から催眠ガスを錬金するから」

「はい」

ジークは、ガスマスクをつけた。

「よし、では『錬金』!」

催眠ガスを大量に錬金して砦の中に送り込んだ。

数分後

「よし!では砦の中に入ろう。」

「はい」

こうして砦の門をゴーレムで破壊した。

「中の賊はすべて寝ていますね」

「そうだね、早速賊を全員拘束しよう。」

「はい」

十分ほどかけ、200人ほどの賊を鋼鉄の糸で拘束し力が入らなくなる薬を飲ませた。

そしてナベを5個作り、水を入れ沸騰させるまで加熱した。

炭に火石を使っているため、あつという間に水が沸騰するようになった。

えっと次は釜茹でにするんだっけな……

数分後

それぞれのナベに2人ずつ賊を入れた。

「うぎゃあああ！熱い！」

「うぐわあああ！！！」

「やあ目覚めたかい？よかったね僕の生贄になるという素晴らしい名誉が、君たちに与えられることになったよ」

「そんなのんぎゅぎぎえぐああ！！！」

「貴族様！オタスケエエエ！！！」

「んゝ君たちが死んでも僕は、心がぜんぜん痛まないからねゝもともと助ける気なんてないし」

「そんなこと言わじゅーぐぎゃああ！」

「フンフンフフーン」

「ア・・グググ・・悪みやアアアア！！！」

「悪魔と言いたいのかい？それは褒め言葉として受け取るとするよ」

「ぎよあぐぐぐえげげ！！！！！」

「おいしくなゝれ　おいしくなゝれ」

十数分後

「悲鳴が聞こえなくなっただなゝ」

「・・・・・・・・・・」

「ア・・・悪魔だ・・・」

「お・・・恐ろしい・・・こんなことができるなんて・・・人ではない」
「い」
「といってくるので」

「よかったね君たちもこのようになるんだ・・・今までの罪を悔い改めるんだね」

「ぐ・・・ちくしょう！あの世でうらんでやる！」

「恨むのは自分の行いを恨むんだね」

「さて次はこの死体を干からびせないといけないんだったね」

「それはこの『劣化版アンドバリの指輪』を使うとするか」
この劣化版アンドバリの指輪は研究所で作られたもので本家と違って生きている人間には効果ないけど死んでいる人間には効果がある。

「これでまず心臓も抜き取り」
＜ブシャ　ゴソ＞

「代わりに土石を埋め込み」
＜グチヨグチヨ　グチャリ＞

「この指を使い体内の水分を抜き取って」
＜シュワアア＞

「そしてこれに土の特殊な魔法と水の特殊な魔法をかけて完成つと」
こうして作業を続けていると

「フリードリヒ様、うるさい鼠がいたので捕らえてきました。」

「へええ、どんな鼠かい？」

「ガリアの鼠です。」

「といってつれてきたのは、ガリアの北花壇騎士団だった。
10人いた。」

「いやあ、よかったよ・・・生贄がまた増えて」

「私をどうするつもりだ」

「ん？ああするつもりさ」

「ぎゃああああ！！！！」

「悪魔ああああ！！！！」
顔がみるみる青ざめていつている。

「ま・・・まさか・・・ああするつもりか」

「その通り！いやあメイジのスキルニルはいいからね・・・よかったよ！自分から材料になりに来てくれるなんて！」

「こ・・・この悪魔め！」

「フフフハーハハハハ！褒め言葉と受け取っておこう！」

「あんたら・・・災難だったな」

「うう・・・」

こうして1週間、賊を討伐しまくり1000体近くもスキルニルができた。

「これだけスキルニルがあれば、新型のガーゴイルを早く作ることができるな。」

「ええ、期待してますよ、フリードリヒ様」

「ありがとう、最強で最凶のガーゴイルを作ってやるよ」

こうして自分の分身を1000体作り、転移の鏡で研究所へ向っていった。

「しかし、1週間もない間にいろんな報告が来ているな」

「はい」

「どうやらコロンブスが発見したのは東方ではないようだな」

「残念ですね」

「しかし新大陸らしいな」

「そうですか・・・どんなものがあるんですか？」

「金銀に銅に鉄鉱石に石炭に宝石、そして香辛料と風石に土石などが大量にあるらしい、それに土地も肥沃だ、もう言うことなしだな」

「だがしかし、先住民がいる。しかし火砲の存在を知らないし魔法も我々と比べるとお粗末だ」

「なるほど・・・しかし幻獣や亜人は？」

「そこまで強くはないそうだ・・・」

「武器も木の楯に弓に槍も我々のものと比べると粗末なものだ」

「へえ、つでどうするんですか？」

「我々はそこを開拓することにする。」

「なるほど」

「コロンブスが新大陸を発見し帰還したのが9ヶ月前だったな・・・そして開拓団が8ヶ月前に出発した。第1次新大陸開拓団は人員2万人に大量の重機で構成されたいる。」

「そして上陸したのは出発から2週間後だったな、それから町を建設し2ヵ月後にはあらかた完成したそうだ。名前は『ニューベルリン』となったようだ、その後探検が始まり先のような探検結果ができることとなる。」

「6ヶ月前、第2次開拓団が出発した。総勢は6万人、農業機械と

掘削機械を大量に持っていったようだ。開拓団の護衛のために『護衛軍』を新たに組織して、人員は1万8000人」

『護衛軍』の内訳は、人員18000人、その内領内軍は6000人で、新たに採用した新兵が1万2000人

（新兵は一応3ヶ月間各種訓練はしている。）野砲100門、2号戦車50両（訓練用に作っておいた戦車、スペックは、最大時速50リグ、武装は20mm機関砲、7.92mm機関銃を砲塔に1門づつ装備している。）

38t戦車50両（治安維持用に作った戦車、最大時速は50リグ、武装は、砲塔に3.7cm砲と7.92mm機関銃を1門づつ、車体に7.92mm機関銃を1門搭載している。2号戦車と38t戦車いづれも装甲は溶接でくつつけられている。）

ハノマーク装甲車200両、トラック300両、馬車500両、航空機40機（ju87とbf109f、20機づつ）で構成されている。『護衛軍』の武装は、クルップ領軍に比べると貧弱だが、ほかと比較するとかなり強力

「6ヶ月前、ハルケギニア語を話している都市国家を発見、名前は、トラスカラ王国で首都はルテティアで王は代々白人だそうだ。」

「なぜハルケギニア語が話されているんですか？」

「何でも1000年ほど前にガリアが、莫大な資金を使って『西方探検団』を組織して向わせたらしい。だが結局帰ってこなかったため、これ以降探検団は組織されなかった……だが新大陸には到達していたらしいが、船が大破していたため帰ることができなかつたらしい……。そこで現地に国を建てることにしたらしい。」

「じゃあトラスカラ王国は、ガリアの探検団の子孫達が建てた国な

んですね」

「そうだ」

「5ヶ月前、そのトラスカラ王国軍が開拓地を襲ってきた。死傷者は400人に上った。なので護衛軍がトラスカラ王国への報復のために、バイパー少将を司令官として8000人の軍勢を差し向けた。」

回想

sideバイパー

私は今トラスカラ王国の討伐へ向っている。

「マイヤー大佐、兵の士気はどうだ？」

「はい上がっています。それに車両の調子もいいです」

「そうか」

「敵軍発見！」

「そうか！距離は？」

「8リーグほどです」

「砲兵隊！射撃準備！」

無線で指示を出す。

「了解！」

十数分後

「砲撃準備完了！」

「距離は？」

「5リーグほどです」

「よし！撃て！」

「了解！撃てー！」

<ズドンズドンズドンズドン>

敵兵は大砲に驚いているようだ。密集陣形で近づいてきたが、バラになってきている。

<ズドンズドンズドンズドン>

さらに砲撃を加えていき敵はさらにバラバラになったな・・・1部の兵は逃亡を始めたな。

side out

sideトラスカラ王国司令官

我々の神聖な領地に踏み込んでくるとは、何て野蛮なやつらだ

「兵士諸君！やつらに神と鉄槌を食らわせようではないか！」

「オオオオオオー！」

これだけ兵の士気が高ければ勝てるだろう。

ヒュウウウウン

ん？何だ？この音は？

<ドーン！ドーン！ドーン！>

「な・・・何事だ！」

「何もないところからすさまじい音と火と風は起こり、兵が吹き飛ばされました！」

「何！それは本当か！」

「はい！」

ヒュウウウウン

ドーンドーンドドーン

「うぎゃああ！」

「ぐぎゃああ！」

「うわあああ！」

手もげた兵や足もげた兵、体がバラバラになった兵、体の中から細長い管を撒き散らしている兵もいる。なんとおぞましい

「敵です！」

「距離は？」

「5キロです！」

「よし！陣形を楔形に再編して突撃だ！」

「了解s『ドーン！』うぎゃアア！！」

「ええい！とにかく陣形を再建しろ！」

「だめです！一部の兵士が逃亡を始めました！」

「何！連れ戻せ！」

「了解しました！」

「行け！」

馬に乗って逃亡兵を連れ戻すために側近の兵たちが向ったが……

ヒュウウウン

ドーンドーンドーンドーン

「うぎゃああ！」

「ぐわあああ！」

「手が！手がアアああ！」

どうやら無理そうだ

side out

side バイパー

「敵軍！陣形がバラバラになってきました！」

「よし！砲撃を加え続けろ！」

「はい！」

「航空機隊が援護に来ました！」

「よし！やつらを叩いてくれと伝えろ」

「了解！」

side out

side ju87のパイロット

「よし！やつらへ爆弾と鉛弾を食らわせてやる！」

「気合が入っていますね」

「初の実戦だからな！」

「そうですか」

「そうだ」

「喰らえ！」

<ダダダダダダダダダダ>

地上にいる敵兵が次々と血飛沫を上げながら倒れていく

「爆弾投下！」

<ドガン>

「再び喰らえ！」

再び機銃掃射をした。

<ダダダダダダダダダダ>

「死ね死ね死ね死ね！」

<ダダダダダダダダダダ>

敵兵はミンチになっていく

「よしいったん基地に帰ろう」

side out

side バイパー

航空機の攻撃を受け、敵軍の陣形がさらに崩壊し始めた。

「よし！突撃！」

「戦車、装甲車隊を前にして、その後に歩兵隊が続け！」

「は！」

これで我が軍の勝ちだろう。

s i d e o u t

s i d e 戦車長

こっちに槍を持った騎兵や楯を持った歩兵がこっちに向ってくる

「ふん！そんなヘナチヨコ武器で何ができる！撃て！撃て！」

「死ね死ね！」

<ガガガガガガ・ガガガガガ>

「うぎゃああ！」

「ぐわああ！」

「フッフハハハハ！死ね死ね！」

<ガガガガガガ・ガガガガガガ>

「撃てば当たるぞ！」

「はい！」

「我らの力を思い知れ！」

<ガガガガガ・ガガガガガ>

「前に敵兵が！」

「踏み潰せ！」

「了解！」

<キュラキュラキュラキュラキュラ>

<ベキボキバキ「ぎゃあああ!!」ベキボキベキ>

「ハハハハハ！」

side out

sideトラスカラ指揮官

な・・・何なんだ・・・俺達是最強じゃないのか？

「なんなんだ！あれは！」

なんだかわからない鉄の箱？がこっちに迫ってきている。

「ぐわ！」

「ぎゃあ！」

前にいるやつが倒れた。

鉄の箱は、すさまじい音を鳴らしながらこつちへ向ってくる。

味方の兵が音と同時にからだに穴を開けながら死んでいつている。

「何だあれ！魔法か！」

「しらねえよ！」

「悪魔か！」

「鉄の悪魔か！」

「騎兵隊が次々とやられているぞ！」

「最強の騎兵隊が！……」

俺達はとても混乱している

「畜生！あの悪魔を倒せ！」

「うわあああ！」

そして再び突撃をした。

<ガガガガガガ・ガガガガガガ>

「うぎゃあー！」

「うぐわああ！」

次々と味方が穴から血を出して倒れていく。

「うおりやああ！」

<ビシ>

「ぎゃあああ！」

足に激痛が走り倒れこけた

「くそ！くそ！」

立てないぞ！畜生！

<キュラキュラキュラキュラキュラキュラ>

鉄の悪魔がどんどんこっちに近づいてくる！

「来るな！来るな！悪魔め！」

<キュラキュラキュラキュラキュラキュラ>

私は槍を構え突きまくった。

<カン、カン>

「くそ！くそ！死ね！死ね！来るな！来るなー！」

<ベキボキバキ>

「ぎゃあああああああ！！！」

すさまじい激痛が走り踏み潰されていく……ああ、私の人生は
終わりか……

「ぎゃあああああああ……！！！」

<ベキベキボキバキベキボキ>

side out

side バイパー

「敵は完全に崩壊しました。」

「そうか」

「まだまだ追撃しろ！」

「はい」

side out

その後追撃しまくり、ついに敵は降伏した。

敵の兵力は25000人で死者15000人、負傷者8000人、
捕虜2000人となり全滅した。

我が軍の損害は、死者50人、負傷者100人だった。

sideフリードリヒ

「その後敵の首都まで攻め上がり、4ヶ月前『トラスカラ王国』は我々への服属を表明した。」

このことは、ハルケギニア史上初めて海外に『植民地』を持った国として、ゲルマニアは記録されることとなる。

「なるほど・・・」

「そして2ヶ月前から、新大陸のこの地域で最も力を持つ国『アステカ帝国』への侵攻を開始している。

一番最近の報告では、首都まで後もう少しらしい」

「どんどん侵略していますね」

「この新大陸を我がゲルマニアのものにするため、日々侵略しているのさ」

この1ヵ月後アステカは完全占領され、新大陸の中部は完全にゲルマニアのものとなる。

「南には『インカ帝国』というのがあるらしいですね」

「そこも『アステカ帝国』の侵略が完了したら、攻め込むさ」

こんな感じで話を進めていた。

3日後は、使い魔品評会があるらしい、すっぱかそうかな。

25話

今日は、使い魔品評会があります。

sideスキルニル

オリジナルのやつ、すっぱかしやがって……。なにが、エルフに会いに行くだ
なまじ記憶が引き継げるから、これからも学院をちょこちょこサボるんだろつな
だけど、面白いことをいろいろとしてくれそうだからいいか

sideフリードリヒ

「よし、完了」

「何をなされるのですか？」

「ん？学院をサボるのさ」

「またサボられるのですか？」

「その代わり、一年半ほど前からコネクションを持っているビターシャルというエルフがいるところの国の統領に会いに行く」

「なぜですか？」

「2年ほど前、オルレアン夫人が心を壊したのは知っているな？」

「はい」

「その薬を調合したのがビターシャルだ」

「なるほど」

「私は、3年前にエルフの評議会とコネクションを持つと考えたとき、どうやってコネを持つのか考えたんだ」

「へえ、っでどう持とうとしたんですか？」

「彼らの政治形態は、共和制で議員は、選挙で選ばれるというのだ」

「なるほど・・・そうですが、東方の本で見たことはあるんですけど、選挙制って面倒ですね」

「そうなのだ、権力者と有権者に媚を売らなければならないのだが・・・」

「そのためにどうしても必要になるのが『金』ですね」

「そうなんだよね。でも汚職とかは禁止だからね」

「そこで、我がクルップ製品を安く特定のエルフに売ろうと考えたのさ」

「でもエルフといえば、我々よりも優れた魔法技術を持っていると聞いているんですけど」

「しかしエルフの土地は、砂漠で質素な生活しかできないんだよね」

「実際見てみると、ほんとに質素だったな」

「そうだったんですか」

「そこで、評議会議員の名簿を手に入れて、どいつとコネクションを持とうかと考えていたら・・・」

「見つけたんですね」

「そうなんだよ、ビターシャルは、評議会の中では少し低い位置にいるが、統領に近い位置にいて、しかも実家は、大きな商店をいくつか経営しているらしい」

「なるほど、ビターシャルの家に安くクルップ製品を売ろうと考えたんですね」

「そう、クルップ製品を安く買って、高く売れば大きな利益が上がり『金』は十分に手に入るからね・・・だけと思いつてから本人と接触するまでに一年半かかったけど」

「本人は、何が望みだと聞いてきたから、あの研究所の存在を許すこととジョゼフ王の動向を教えることを要求したさ」

「で？なんと？」

「ジョゼフ王の件は、了承してくれたが、あの研究所は少し言葉を濁してな」

「なるほど」

「だけど、統領は、クルップ製品をさらに多くくれることと『聖戦』に参加しないことを条件に研究所を認めたのさ」

「『聖戦』の件は、閣下に聞かなければいけなかったが、閣下はエルフと貿易できることを知って」（意識）聖戦に参加するよりか、エルフのマジックアイテムを貿易で手に入れたほうがいい、それにあのロマリアに従ってもろくなことはなし、聖戦で国力を著しく落としたくない」といつて了承してくれたさ」

「そして閣下から私に」（意識）大使に命じるからうまくやってこい」といわれて国書をもって統領に会いに行くことになったのさ」

「それともう1つ理由があつてね・・・」

「なんですか？」

「今度、ジュゼフ王に、『新たな技術を渡そうか』と言つ情報がビターシャルから入つてな」

「ふむ・・・で？エルフの技術は、我々はすでに持っているじゃありませんか」

「ジョゼフ王に渡す技術が問題なのだ」

「何を渡すんですか？」

「ガーゴイル技術と火石」

「それはまずいですね．．．ガーゴイルはいいですけど、火石はやばいですね」

「研究所から『虚無の力を使ったら絶大な破壊力を発揮する』という事が伝えられてな．．．」

半径数リーグが消滅するくらいの威力らしい

「ジョゼフ王は虚無ですもんね」

「しかもあの『有能王』のことだ．．．ろくなことに使うことはないだろう」

王としての能力はものすごく有能ではないので『無能王』とは呼ばない．．．

だが私もろくなことに使わない気がする

「そうですね．．．」

「必死に作り上げた艦隊が火石の爆発で一瞬にして大量に失うのは勘弁してほしいからな」

「だからいくんですか？」

「そうだ、彼らの国の名前は『ネフテス』だそうだ」

1日後

ネフテスの首都に着いた。

人員は、私と護衛の4人だけだ

護衛は、ジークと研究所にいるエルフで腕利きのやつを3人連れてきた。

「ここがアデイルか」

「大きいですね」

「まあ首都だからな」

30分後

「ここが統領府か」

「ゲルマニアの宮殿に比べると派手さがありませんね」

「まあ、あの宮殿は金がかかっているからね」

「来たか、フリードリヒ」

「やあ、君がビターシャルか・・・どうだい？商店の経営は？」

「おかげでうまくいっているよ」

相当儲けているようだからね

「そうか、それはよかったこれから長く頼むぞ」

「こちらこそよろしく頼む」

10分後

「こちらが統領のテュリユーク様だ」

「フリードリヒ・アルフレート・オーレン・ハルバッハ・フォン・クルップです。」

貴族式の礼をする。

「ネフテスの統領テュリユークだ。」

「ではこれが国書です。」

「うむ、これからの関係を期待しているぞ」

「はい」

「そして、これは、ゲルマニアの皇帝閣下が乗っている車です。」
ヘーパイストスとアテナに頑張ってもらって、皇帝閣下と同じ車を持ってきたんだよね。

メルセデス・ベンツ770k（防弾仕様）
対戦車ライフルの直撃にも、らくらく耐えられるからね。防御能力はピカイさ

「これを私にくれるのか？」

「ええ、技術解析のために分解してもかまいません」

「そうか」

「しかしフリードリヒ殿、あなたの領地の技術力は高いですね」

「そうですか？」

「ええ、場違いな工芸品のようなものを量産しているそうじゃないですか。」

ああ、確かに戦車や航空機に装甲車にジープなどを大量に作っているね

「そういえばそうですね・・・でも技術はあげませんよ」

「わかっている」

「こちら側も条件として、研究所を認めることとマジックアイテムの貿易の許可に、ジョゼフ王に火石を与えないことを要求します。」

「うむ、いいだろう」

「これからも、よい関係を築き上げていくことを期待してますよ」

「うむ、こちらこそな大使殿」

こうしてネフテスを後にした。

翌日

「ふう何とか戻ってこれたな」

「すっかり真夜中になりましたね」

「まあ早く帰ってこれたほうだと思っが」

「まあそうですね」

「あのあつゝい砂漠からこの緑あふれるトリステインまで休みなしで飛んだのだから」

「ほんとにあそこは暑かったですね」

「ん？使い魔品評会は出ていなかったな」

「そうでしたね」

「アンリエッタ王女が来たようですね」

「ああ、あのお花畑王女か」

「随分とひどいことをおいわれになるのですね」

「ん？本当の事を言って何が悪い？」

「まあそうかもしれませんがね」

「正直トリステインと同盟することは、反対だったんだがな」

「まあそうですね」

「王位に誰もついていなくて汚職も横行しまくっている。はつきし言ってよく国が持っているなと思うぞ」

「王族がもうだめだしね、マリアンヌ太后が4年前に王位についておいたらもう少しはましな状態だったかもしれないけどね……」

母子ともに帝王学を受けていないなんて……だめだろ」
ちなみにゲルマニアの王室に『君主論』『戦争論』『国富論』など
などを帝王学をする際に役に立つようにと送っている。

「マザリーニ枢機卿の苦勞が目には浮かびますね」

「ああ、そうだな」

部屋に戻るとスキルニルから報告を受けた。

「おいおい嘘だろ」

「……………」

「友達を死地に向わせるかね？普通」

「あのお花畑王女め何考えているんだ」

「いくらフーケを退けたからといって、内戦の最前線にいきなりル
イズたちを送り込むかね？」

「考えられませんね」

回想

数時間前

「ふう使い魔品評会は終わったな、オリジナルが使い魔を連れて行
ったから参加はできなかったのさ」
オリジナルのやつつまくやったかな？、エルフとの交渉

2時間後

「ん？黒フードをかぶった人物が女子寮へ向ったな・・・誰だろう？」

偵察用ガーゴイル『ニンジャ』を使って後を追うことにした。

このガーゴイルは大きさは50 سانت位で風石を動力とし不可視のマントを利用した光学迷彩装置で身を隠すことができる。ちなみに風石を使っているから浮くこともできる。武装はナイフかスタンロッド

どうやらルイズの部屋に入ったようだ

早速屋根裏から侵入する事にした。そして音を立てないようにしてルイズの部屋に着地し、ベットの下に隠れた。

「お久しぶりですね、ルイズ」

おいおい王女様なんでルイズの部屋なんかに行ったんだよ・・・何か物理的なおねがいあるのかな

「ひ・・・姫様！」

驚いているな・・・まあそれは本当か・・・そしてルイズはひざまずいた

「ああ、ルイズ！私たち友達じゃない！」

「姫様は姫様ですから」

「ルイズにちよつとお願いがあるの」

「何なりと姫様！たとえ火の中水の中！」

「おい！それはちよつと言いすぎじゃないのか！」

その意見に賛成だ、ちよつといいすぎじゃないか？

「なによ！姫様のためなのよ！光荣じゃない！」

狂信に近い忠誠心があるな

「ありがとうルイズ！そこまで私のことを思ってくれているなんて・・・」

「当然じゃないですか姫様！」

「でそのお願いの内容なんだけど・・・」

簡単に言つと

ウェールズ王子に亡命してもらいたいんだけど、ほかの貴族達は信用できない！

そこで信頼できるお友達のルイズに亡命を勧める手紙を渡すから、それをウェールズ王子に届けてもらいたいって言うことだけだ

なんか・・・実践経験のない学生をいきなり死地に向わせるかな・・・しかも友達を

これはルイズたちに死ねといっているようなものだな

でもルイズたちだけじゃあ心配だから、魔法衛士隊のワルド隊長をつけるようだけど・・・

実はコイツ裏切り者なんだよね・・・あれ詰んでね？

「アルビオンに行つてウェールズ王子に手紙を渡してくればいいんですね？」

「そうよルイズ。土くれを退けたあなた達ならやつてくれますね？」
あれは、すぐく手加減していたんだけどな

「もちろんですとも姫様！これは急ぎの任務なのですか？」

「はい、王党派はレコン・キスタに大陸の端まで追いやられています。一刻を争う事態なので、急ぎでおねがいします。」

「わかりました。」

「頼もしい使い魔さん」

「ルイズのことをお願いしますね」
といつて手の甲を出した。

「いけません姫様！そんな使い魔にお手を許すなんて」

「いいえ、この方は私のために働いてくれるのです。その忠誠に報いなければなりません。」

そして手の甲にサイトは接吻をした。礼儀を知っているようだな・
・この前のあれが効いたのかな？

すると・・・

バァン！

ギーシュが出てきた．．．．何しているんだ？

「キ．．貴様！姫殿下に！何をしているのかー！」

「ギーシュ！あんたこの話聞いていたの！」

「バラのように美しい姫様が、使い魔にお手を．．．」

「何であんたがここにいるのよ！ここは女子寮よ！」

「いや．．ちょっとモンモランシーに呼ばれた帰りに、黒フードの人物がルイズの部屋に入っていくのが見えたから．．．」

「盗み聞きしていたってことね．．．」

「姫殿下！その困難な任務、このギーシュ・ド・グラモンに仰せください」

「グラモン？まさかあのグラモン元帥の？」

「子息でございます。姫殿下」

「あなたも、私の力になってくれるというの？」

「任務の一員に加えてくれるなら、光栄の極み」

「では頼みます。ギーシュ・ド・グラモン殿」

「トリステインの宝石と呼ばれる姫殿下が、私を褒めてくださった

「！」

といつてはしゃいでいた。

「では明日の朝にでもすぐに出発します」

「頼みましたよ、ルイズ」

「はい」

さてと、このことはオリジナルに報告しなければな
本体が帰ってきたのは、その2時間後だった。

2時間後

「そろそろ私も王党派に会いに行くか」

「なぜですか？」

「いろいろとな」

「ウエストウッドにいるティファニア嬢にも来てもらおう。」

「ハーフェルフだからまずいんじゃないですか？」

「なに耳がとがっているだけだし、その耳も整形手術（私がした）
で丸くなっているんだ」

「そうでしたか」

「それに耳が丸くなったら、モード大公の面影を持つ美しい娘にしか見えないだろうさ」

「それで、ティファニア嬢を連れて行かれるとなると、何か目的があつてのことじゃないですか？」

「まあモード大公とその直臣たちの罪を許してもらい、ティファニアの王位継承権を認めさせるようにする」

「しかしどうやって認めさせるんですか？」

「どうせ、明日滅びるような王朝だ、そんな約束しても別に問題ないと思うだろう。それにティファニアの姿を見せて、あなたは、レコンキスタに賛同する貴族達に嵌められたのです。ともいえば認めるだろう。もともと兄弟の仲はよかつたしね」

「それにティファニア嬢には、ウエストウッドで礼儀などいろいろな英才教育を受けているから、礼儀の面でも大丈夫だしね、マチルダも驚いていたし」

トリステインのアホ姫よりも数十倍いいしね

「ウェールズ王子はどうなされるのですか？」

「それは、亡命するかしないかは本人の意志に任せるさ」
それはそのときに決めるさ

「そうですか」

「私も明日ここを出る。身代わりにスキルニルを立てておこう」

「結局またサボられるんですね。」

「記憶は引き継げるし、あの程度の内容、サボっていても問題ない」

「では、準備を始めますね」

「ああ」

こうして危険なアルビオンへの訪問が決定した。

26話

翌日の早朝、私はヘーパイストスに乗りジークとともにラ・ロシエールへ向かった。

王族へ会いに行くとしたとき、ファクシミリで『急ぎ軍艦2隻を手配してくれ』と打電し、ラ・ロシエールで落ち合うことにした。

3時間後

「何とかつきましたね」

「ああ、結構強行軍だったな」

「手配した船は着ているでしょうか？」

「さあ？でも何が来るかな？何をよこせとは言ってなかったから」

「まあ大丈夫でしょう」

十数分後

「船の発着場についたな。」

「はい」

「しかしどこにいるのかな？」

すると腕章をつけた将校が来た。

「フリードリヒ様お迎えにきました。」

「ああ、ありがとう」

来たのは、2年前に作った領主直属の私兵『武装親衛隊』の将校だった。

この武装親衛隊は、領内軍の精鋭を引き抜いて創設されており、装備も領内軍よりも一つ上の物を使っている。そしてすべての兵士が領主の家族（特に私）に対して絶対的な忠誠を誓っている。

「こちらです。」

数分後

「これをもってきたのか」

「はい」

目の前にクルーザークラスが2隻あった。

見た目は、各国が使っているクルーザークラスだが（トリステインはクルーザークラスが最大艦）

中身は魔改造されており、エルフの使っている船でも最新式の風石機関（この任務には蒸気タービン艦は連れて行けないため）今の人間の最新鋭の風石機関の10倍くらいの効率を誇り、風石消費量は百分の一に抑えられている。そのため長期の航海が可能であり、武装も10cm速射砲と5cm速射砲を装備していてポンポン砲も装備しており、レーダーも最新式を装備しており、武装はすべてレーダーで連動させることができる。速度も3倍くらい、火薬もトリプ

ルベース火薬に現代の高性能爆薬を使っている。

ただこの船いろいろな最新技術も使っているため、コストが高く同型艦は4隻しか存在しない

「結構いい物を持ってきたな」

「ドッグに残っている船の中でかつ今回の任務で使える物の中で一番いいものを持ってきました」

「そうか、ありがとう」

「では乗ってください、フリードリヒ様」

「わかった」

ちなみに私は、領内軍では中將の地位を持っており、ジークは少將の地位を持っている。

艦内にて

「これよりアルビオンに向かう」

「アルビオンですか？レコンキスタに何か用でもあるのですか？」

「いや王党派にだ」

「王党派ですか・・・確かもうニューカッスルに追い詰められていますよね」

「ああ、そうだ」

「だが少し用があつて、ニューカッスルの秘密の港に入港する。」

「なるほど・・・ニューカッスルに港はあるんですか？」

「ないことになっているが、岬の下に存在していることが報告されていて、地図もここにある。」

「さすがフリードリヒ様、準備がいいですね」

「そうか？今から2、3日くらいは空賊狩りをする。」

「なぜですか？」

「実戦経験をさらにつむためと金を少々稼ぐためだ」

「船賃を稼ぐためですね」

「そうだ・・・レーダーで空賊を探せ！」

「は！」

さてここらで空賊を狩りまくるか。

数時間後

「空賊発見！」

「よし！向かえ！」

「は！」

数十分後

「空賊が見えてきましたね」

「よし！弾着確認ガーゴイルを発進させろ！」

「は！」

このガーゴイルは、簡単に言うと映像送信機であり、こちらにある映像受信機で弾着を確認して外れれば弾道を修正することができる。

「砲撃準備！」

「は！」

「距離は？」

「3500！」

「まだ近づけ！」

「は！」

数分後

「距離は？」

「2000！」

必中範囲だな、よし撃ってもいいだろう

「撃ち方はじめ！マストを狙え！」

「は！撃ち方準備！マスト狙え！」

「照準に合いました！」

「撃て！」

10？砲と5cm砲がいつせいに火を噴いた

<ドンドンドーン>

<ドガンボキバガン>

マストと舵に命中したようだ。舵は壊れマストが一本折れている

「よし！まだ撃て！」

「は！」

「マスト狙え！撃て！」

<ズガスガスガスガン>

<ボキボキドガン>

残りのマストが折れ船尾にも命中した。

「よし！再び装填準備」

「は！」

「敵が白旗を掲げてきました！どうなされますか？」

幕僚の一人が聞いてきた・・・どうしようかな？そのまま沈めようかな・・・

いや食料、風石、金目の物を奪おう

「よし！杖と武器を捨てろと言え！」

「は！」

10分後

空賊の船に乗り込んだ

「へ！まだあきらめないぜ！」
といって抵抗してきた。

<ダダダダダダ！>

抵抗したやつをmp40で蜂の巣にした

「うぎゃあああー！」

「まだ抵抗するのか？」

「い・・・いえ・・・しません」

「そうか」

「食料、風石、金目の物を奪え！」

「了解しました！」

それから20分ほど空賊の船内を探しまくり風石、食料、金目の物をすべて取った。

むろん空賊どもが身につけている装飾品や武器も奪った。
武器は後で転売するからな

「よし！すべて取ったな」

「はい！」

「フリードリヒ様、後はどうなされますか？」

「そうだな……全員射殺しろ」

「なぜですか？」

「軍に連行してやつてもいいが、食料をやつらにやるほど余裕はないし、途中で反乱でも起こされたら面倒だ」

「確かにそうですね、はいわかりました」

「甲板の中央で1列に並ばせて処刑する。全員頭を狙え、ほかの部位だと生きている可能性が高いからな」

それにこいつらは社会のごくつぶしだからな、生かせてやる価値もない

ここで殺さなかったら、あとでクルップの船やクルップの航路上の船を脱走して襲いかねない

収容船があつたら新大陸に連行して使い潰すという手もあるがな

「は！では甲板に並ばせます！」

「頼んだぞ」

side out

side 空賊船長

何か獲物はないかとさまよっていたら、でかい獲物が2隻もいた。

「4時の方向に商船2隻発見！」

しかも護衛らしき物をつけていないし2隻とも商船は大きい

このところでかい獲物がいなかったからな・・・久々のでかい獲物に血が騒いできたぜ！

部下達も興奮しているようだ

「砲の数も大きさに比べれば少ないですぜ」
こりゃ鴨だな

「野郎ども！でかい獲物だ！掻っ攫ってやろうぜ！」

「おおー！！！」

十数分後

「商船が横腹を向けています！」

「なに、まだぜんぜん距離があるんだ、ここまでは絶対に砲弾は飛んでくるまい」

「そうですよね」

<ドンドンドーン>

「敵艦発砲！」

「は！俺達を恐れて敵の艦長は狂ったようだぜ！」

「あんなに離れていたら当たるはずもねえ！」
そう思っていた

ヒュウウン

<ズガボキズガン>

「何！命中した！」

「マストが吹き飛びました！速力が落ちています！」

「何！一発でこの威力か！なんて威力だ！」

「クソ！仕方ない！このままでは分が悪い！撤退だ！」

「了解しました！」

<ズガンガンガンズガン>

「敵艦再び発砲！」

「な・・・なんて速い装填スピードだ・・・」
くそ！とんでもない魔物にぶち当たったようだぜ

<ドガボキドガスガン>

しかも砲弾が命中すると爆発する……ありえない

マストと舵と船尾に命中したらしく船尾の船員の腕と足がちぎれて死んでいた

バラバラになっていた。そして飛んできた破片で重傷を負ったやつもまあまあいた。

「う……うう……」

「助けてくれ……」

「ママー……ママー……ああー……!」

多種多様な悲鳴が聞こえてくる。ここは地獄か？

「マストに舵がやられました!これでは芋虫同然です!」

「しかたなねえ!降伏する!白旗を揚げろ!」

「降伏するのですか?」

「ここは命あつてのものだねだ!」

こういう場合たいてい捕虜は奴隷にされるか軍に引き渡されるだけだからな、命はとられまい
収容所から脱出してやるぜ

「へい!わかりやした!白旗を揚げろ!」

数分後

商船に横づけされ
見たこともない軍服を着た兵士達が出てきた。

しかも動きは、ものすごくよく訓練された最精鋭兵みたいだった。
これじゃあ負けるわけだ

よくここまで訓練された兵を大量に持っているな……………

「へ！まだあきらめないぜ！」

どうやら部下の数人が抵抗をした

<ダダダダダダ>

「うぎゃああああ！！」

信じられないスピードで弾丸を連射する銃だ……………これじゃあ反乱
起こしても

すぐに制圧されてしまうな……………撃たれたやつは蜂の巣になって、
血を垂れ流している。

そのあと俺達の持っている金品を剥ぎ取り、武器も没収され、拘束
された。

こいつら金品まで剥ぎ取るのか？

しかも重傷を負っている仲間を次々と止めをさしていった。

そして船内に入り金目の物や風石、食料、武器を探し回り根こそぎ
奪っていった。

まるで空賊みたいだ、

すると将校みたいなやつと貴族の坊主がしゃべっているのが見えた。

なるほどこの軍隊は、あの貴族の坊主が持つ私有軍ってことか
しかし何をしゃべっているのだろうか？

数分後

将校みたいなやつが

「貴様ら！立て！立たんか！」

といってきたので、仕方なく立った。船に連れて行くのだろうか？

「そこに1列に並べ！」

なぜそこに1列に並ぶのだろう？と思ったが、逆らえないのでまあ並ぶことにした。

すると敵の兵士達が何か銃らしきものを持ってきた。

「何をする気だ！」

「フッフ・・・フリードリヒ様はお前達を射殺しろとお命じになったのさ」

なんてこった！俺達よりも凶悪なやつだな。降伏したやつを殺すなんて

「狙え！」

「撃て！」

<ダダダダダダダダダダダダ>

「うぎゃあー！」

「ぐわあああ！」

私は今何とか朦朧とした意識を保っているがまもなく死ぬだろう・
・
・
腹と胸を撃たれたからな

「よし！撤収だ！ガソリンをまけ」

「は！」

そして油らしき物が船にまかれ兵士達は撤収して行った。

数分後船に、火をつけられ燃え上がった。

何とか生き残っていたやつも悲鳴を叫んでいる。

「うぎゃああああ！」

「あああああ！」

意識が薄れてきた・・・・あのフリードリヒとか言う坊主は、多
分ろくな死に方をしないだろう。

s i d e o u t

あれから2日たち

それからも同様に空賊船を襲い
貴金属と金貨を合わせ600万エキュー相当を奪うことに成功した。
食料も1ヵ月半分、風石も1ヵ月分手に入れた。こちら辺はよほど
鴨が多いんだな、600万エキューも取れるなんて・・・・

sideフリードリヒ

「結構稼がせてもらったな」

「ええ、まさかこんなにあるなんて思いもしませんでした。」

Bannon!

「フリードリヒ様！空賊船を発見しました！」

「よし！そこへ向かえ！」

「しかし！横に商船がいるようですが・・・」

「それも一緒に奪うぞ！」

どうせ船員は全員殺すし

「は！」

十数分後

「あれか？」

「はい」

確かに商船を連れているな・・・まあいい奪ってやろう・・・
ん？片舷に24門も砲がある。・・・軍艦かな？でもどくろが掲
げてあるし

「あれを襲うぞ！近づけ！」

「は！」

さらに数分後

「よし戦闘配置につけ！」

「了解！戦闘配置につけ！」

ダダダダダ

「急げ急げ！」

「戦闘配置つきました！」

「了解！」

「砲台用意！装填！」

「装填完了しました！」

「敵空賊へ照準あわせ！」

「照準合いました！」

「撃ち方準備！」

「撃て！」

5 c m 砲と 1 0 c m 砲が いっせいに火を噴いた！

< ダンダンダンダン >

「敵空賊船マストに命中！」

「次弾装填準備！」

「次弾装填準備完了！」

「右に 2 コンマ上に 1 コンマ修正！」

「修正完了しました！」

「狙え！撃て！」

< ドンドン ドンドンズドン >

「敵空賊船！船尾に命中！」

「よし敵の船に乗り込む！砲兵は残りのマストを攻撃しろ！」

「了解！」

「突撃隊は、乗り込む準備をしろ！」

「了解！」

乗り込む部隊の武装は、s t g 4 4 か m p 4 0 かショットガンにトマホークを装備していて、チタン合金のボディ―アーマーをつけている。

数分後

「敵艦発砲!」

<ドンドンドンドン>

「伏せろ!」

<ガンガンガンガン>

「全弾弾きました。」

フ・・・おろかな・・・球型の砲弾じゃあこの艦の装甲は貫けんさ

1分後

「敵艦白旗をあげました」

「何!・・・仕方ない武器と杖を捨てろと伝える。」

「は!」

S i d e o u t

S i d e ウェールズ

ニューカッスルに行こうとしていたとき、事は起こった

「ウェールズ様!」

「何事だ!」

「2時の方向よりクルーザークラスが2隻接近中!」

「何!」

「旗は何を掲げている?」

「見たことない旗です。鷲に十字架みたいな物を持たせていて、右端には楯の中に2本の雷が描かれています。」

「ふむ……わからないな……」

「ク……クルーザークラスが発砲!」

「何!」

「距離は?」

「およそ2000!」

「これだけ離れていればほとんど当たらないよ」

<ズガン>

「何!命中した!?」

「マストに命中しました!」

「2000も離れているんだ!なのに命中するなんて……」

「敵艦！再び発砲！」

「何！？こうも装填時間が短いとなると、当てはまる船は・・・クルップの船だな・・・」

<ズガン！>

「船尾に命中！砲弾が爆発しました！」

「間違いないな・・・クルップの船だ・・・」

砲弾が当たった瞬間爆発するなんてクルップの船以外ありえないからな

「敵艦！さらに接近中！おそらくこの船に乗り込むつもりでしょう！」

「ならば！近接戦闘準備！」

「了解！」

数分後

「敵艦射程に入りました！」

「よし！狙え！」

「照準合いました！」

「よし！撃て〜！」

<ズドズドズドーン>

<ガンガンガンガン>

「ぜ．．．全弾．．．弾かれました．．．」

「ち！敵は鋼鉄艦か！」

「間違いなくクルップだね．．．鋼鉄艦を使っているところなんて
ゲルマニアの新鋭艦隊か
クルップの領内軍くらいだからね」

1分後

「これ以上抵抗しても仕方がない．．．降伏しよう」

「なぜですか！ウェールズ様、私たちはまだ戦えます！」

「その前にこの船が沈められるさ．．．多分クロの旗を掲げ
ているから空賊と間違えられたんだろう。誤解を解くしかないな。
ここで死ぬのはまだいやだからな．．．」

「わかりました．．．降伏する．．．白旗を掲げる．．」

「は！」

side out

sideフリードリヒ

敵が白旗を揚げ来たため、横付けして空賊の船に乗り込んだ。

「武器を捨てさせる！もちろん杖もだ！」

「は！」

「おい武器を捨てろ！」

ガチャガチャガチャ

「よし！甲板の中央に集まれ！」

「おら！動け！動け！」

ビシ！ビシ！

「ヘイヘイ」

甲板の中央に集めた後

「船長は誰だい？」

「俺だ！」

「そうか・・・空賊だから・・・処刑だな」

「ま、待ってくれ！処刑はやりすぎじゃないのか！」

「何いつているんだ、犯罪者だから処刑は普通じゃないか」

すると新たに数人縛られてきた。

「な、何縛っているのよ！」

「ル、ルイズ落ち着け」

「うるさい！だまれ！」

見てみるとルイズが縛られていた。

「あんた達のボスを出しなさい！ボスを！」

「お前なんかマイン・フューラーがあってくれるはずないだろ」

「いい加減黙れ！お前の立場をわかっているのか？」

「離しなさいよ！この無礼者！」

はあ・・・立場がわかってないね

「落ち着けて！」

「落ち着けるはずないじゃない！」

バアン！

どうやら空に向けて銃を撃ったようだ

「次はコイツを食らわせるぞ！黙らないと！」
ルイズに銃口を向けていた。

「ヒ！」

どうやら黙ったようだな。

「さて船長、さっき言った様に処刑することにするよ」

「ま・・・待ってくれ私はウェールズ・テューダーだ」

「そんなの信じられるはずないじゃないですか、それにウェールズ王子は、そんな毛むくじゃらじゃないですよ」

ウェールズ王子だということはこの船を見たときに知っていたが、面白いのでそのままいじめることにしよう・・・

「これは鬘だ！」

「まだ嘘をつくんですか、それに光栄あるアルビオン空軍が、それもあなたの言っていることが本当なら王太子直属の親衛隊が空賊なんてするはずないじゃないですか」

「そ・・・それは、レコンキスタから物資を奪ったためだ」

「そうですね・・・まあ、あなたが判断は間違っていないですね、今王党派に物を売りに行こうとしている酔狂な商人はいませんかからね。」

「まあ鬘といっているから、鬘を取ってください。」

「は！」

すると金髪金眼のウェールズ王子の顔が現れた。

「へっ確かにウェールズ王子ですね」

「分かってくれたかい」

「ええ、縄を御解きしろ！」

「は！」

「すみませんね、ああいう真似をして……でもドクロをあげたまま航行しないでくださいね。

空賊狩りをしていたから、思わず襲ってしまいましたよ」

「君たちは何を襲っているんだい？」

「レコンキスタの軍艦、空賊、レコンキスタに物を売りに行った船ですね」

「つまりほとんどの船を襲っていたって事だね」

「まあ、そういうことになりますね。おかげで大量に稼がせてもらいましたけど」

「君たちに襲われた空賊たちが可哀想に見えてきたよ」

「そう思いますか？」

「空賊たちの積荷や貴金属、武器なんかを奪って、後は全員射殺しているんだよね、さっきの行動からそうしているように見えたからさ」

「ええ、御明察の通りです。」

すると将校がこちらに来て

「マイン・フューラーあなたに面会を求める者がおりますが、お会いになりますか？」

「そうだな、会おうじゃないか。ウェールズ殿下あなたも一緒に来ますか？」

「そうだね、行かせてもらおうよ」

2分後

「こちらです。」

「さっきまでうるさかったから、黙らせておきましたけど」

「そうか」

ルイズたちが縛られているところへ来た

「あ、あんた！何でここに居るのよ！」

「ん？おやおや誰かと思えば、ミス・ヴァリエールじゃないですか。どうなされたのですか？」

「どうしたもこうしたも、あんた達に縛られているのよ！」

「へっ……っで？」

「早く縄を解きなさい！」

「いやだね」

「何ですって！」

「トリステイン貴族は信用ならない」
事実君たちの中にも、レコンキスタの内通者が居るからね

「ゲ、ゲルマニアの野蛮な貴族の癖に何なの！」
ククク、君たちトリステインは、メイジの数以外何もかも我がクル
ツプ領に劣っているんだよ！

「じゃあ、トリステイン貴族は誰も裏切らないといえるのかい？」

「ももも、もちろんよ！誇り高きトリステインの貴族は国を裏切ら
ないのよ！」

レコンキスタの内通者リストは、すでに手に入っているけどね
トリステイン貴族の内通者は多かったな

「本当かい？じゃあ裏切り者はすぐに処刑してもいいんだよね？」

「何！私たちの中に裏切り者がいるって言うの！」

「ククク・・・そうさ、ジーク例のものを持て来てくれ。」

「はい、わかりました。」

数分後

ジークは、ある書類を持ってきた。

「どうぞフリードリヒ様」

「フフ、ありがとうジーク」

そして悪魔のような笑みを浮かべながら

「やあ、グリフォン隊隊長ワルド子爵、あなたは裏切り者でないと
言い切れますか？」

「も、もちろんだとも」

「フフフ・・・そうですか」

「じゃあこれは何ですかねえ」

見せた書類は、ワルド子爵がオリヴァー・クロムウェルと会っている
写真とそのとき交わしたサイン入りの誓約書で、任務としてウェ
ールズ王子を暗殺せよという命令書があった。

「ど・・・どうしてそれを・・・」

「フフフフ・・・レコンキスタのとある内通者から提供された
ものさ」

「く・・・くそ！」

「ワルド子爵、ウェールズ王子暗殺未遂と国家反逆罪で処刑を行う
！連れて行け！」

「はー！」

「さてどう殺そうかな？」

「磔と釜茹でなんてどうでしょうか？」

「いいこと言うじゃないかジーク

「へえ、いいねそれにしよう」

「ミス・ヴァリエール残念だったね、婚約者が裏切り者だったなんてね」

このことは、ヴァリエール家の力を落とすために利用させてもらうよ
こういうゴシップは、貴族がよく好むからね『ヴァリエール家は、
婚約者を使ってレコンキスタと内通していた』ってね、せいぜい国
内で足を引っ張り合ってくれ、トリステインのアホ貴族ども

「あと君には、裏切り者の運命を眼に焼き付けてもらうことにする
よ」

数分後

「ワルド子爵、ウェールズ王子暗殺未遂と国家反逆罪で、磔刑に処
す」

そしてまず、私がワルドをヒーリングをかけながら殴りまくること
にした。

「クククワルド子爵覚悟してくださいね」
と満面の笑みを浮かべながら言った

「ヒ！」

ククク恐怖が顔に出ているよ

「フッフでは行くよ。」

<バキ、ドカ、バキヤ、バキ、ボコ、グチャ>

「ギヤアアアア！！！！」

「フッフ・・・アハッハッハッハ！！！」

<ガツン、ベキバキドカ>

「タ・・・ダズゲ・・・グギヤアア！」

「フハハハハ！」

「ちょ・・・ちょっと！いくら裏切り者でもそのやり方はないじゃない！」

「何言っているんだい、簡単に殺したら楽しくないじゃないか、苦痛を与えまくって生きていることに後悔するくらい拷問しまくって殺すさ」

「ア・・・アンタ悪魔ね」

「何、裏切り者に当然の報いを与えているだけさ」

そのあと十数分間殴り続けた。

あゝあ服が穢れた血で汚れてしまったよ
なんか親衛隊以外の人間が引いていたけどなぜだろう？ただ罰を与

えているだけなのに

「静かになつたな」

「・・・・・・・・グ・・ググ・・」

顔のあちこちが膨れ上がって、からだもあざだらけになっていた

「さてとつと次はこれを使おうかな『錬金』」

先に鉄の型がついた鉄の棒を錬金した。

そして棒の先を火の魔法で高温で熱した。

「鉄がすごく赤くなつたな」

「・・・・・・・・グ！・・グググ！・・フー・・フー！」

「これがほしいんだよね」

と赤くなつた鉄の棒を見せて悪魔のような笑みを見せた。

「ギヤ・・・・・・・・ヤヴェロ・・・・・・・・ヤヴェデグデー！」

「何言っているかわかんないな・・そうかこれがほしいのか、じやあ遠慮なく」

<ジユウウウ>

「ぐぎやああああ！！！！」

腹に焼入れをした。ああ、気持ちいい

「フフフフ、アッハハハハハハ！」

人間が焼ける匂いが当たり一帯に漂っていた

「お、おえー！」

「ウゲー」

おいおいこれくらいで吐いてどうする。ウェールズ殿下もゲロゲロ吐いているし、その親衛隊も目をそらしているか、吐いているかだな。だけど武装親衛隊の隊員は、これくらいなんともないという顔をしている。まあ戦場の地獄を見てきたやつが多いからな。

「じゃあ次はここに焼入れしようね」

と言って男の大事なところへ焼きを入れに行った。

<ジユウウウ>

「ぐぎゃあああ@KんふぁえDっふDFJぢー!!」

フフフ・・・後半の部分は言葉になっていないよ

「オ、オエー！」

「うつぷ！うげー！」

これを見ていて武装親衛隊以外の顔色が青白くなっているな・・・
・なぜだろう？

ルイズと使い魔君は盛大に吐いて気絶しているしな・・・気絶すんなよ、目に焼きつかないじゃないか

ワルド子爵に同情する視線と可哀想に思う視線をたくさん見せている・・・裏切り者に同情することないのにな

まあ、ここまでしているのは、彼がトリステイン貴族で気に食わないからという理由もあるんだけどね

「彼が処刑人じゃなかったら、もっと楽に死なせてくれただろうに・・・可哀想に・・・」

とウェールズ皇太子は言っているが、こうしなければあんたは死んでいたのに・・・

「さてと、次は釜茹でと行こうじゃないか」

「『錬金』」

といって人間1人が楽々入れる大きななべを錬金した。

そして火石と炭に火をつけ、その上に水を大量に入れ土石を少し入れたなべを置いた。

数分後

<グツグツグツ>

「いい感じで沸騰してきたね・・・ついにフィナーレだよ」

そして縛り上げたワルド子爵の瀕死体をなべの中に入れた。

「ぎゃあああああ！！！！あづい！あづい！」

「いい加減おとなしくしようよ・・・フフフフ」

「ぢつぎよおお！！のろつでやる！」

「ハハハハハ！！裏切り者の末路がこれだ！聖地に行きたい？何あほなこと抜かしているんだよ！」

あんな砂漠に何があるっていうんだよ！」

「ゴノヤロー！<ジユウウウ>グギャアアア！」
顔に焼入れした。

「いい加減うるさいよ、黙って死んでいってくれないかな？」

数分後

「おいしくなれ おいしくなれ」

なんか親の敵を見るような視線が私に向いてくるんだけどなぜだろう？裏切り者を痛めつけているだけなのに……WHY？

「……………」

「静かになったか……ジーク、あれを頼むよ」

「はい」

ワルド子爵の瀕死体を鍋からだし、ジークの前においた。

ジークは、アンドバリの指輪の劣化版でワルド子爵の水分を抜き取った。

<しゅわあああ>

するとミイラになったので、私がワルド子爵の心臓を取り出し

<ズブズブズブ、グチャ>

心臓の部分に土石を埋め込み

<グチャグチャ>

そして水と土の特殊な呪文をかけると

<シュウウワアアア>

スキルニルが完成した。

「できたね、スキルニルが……ほしいかい？ミス・ヴァリエール？」

「いいい、いる訳ないじゃない！」

「お前、人の形をした悪魔だな」

「何を言っんだい、僕は天使のような慈悲を与えたつもりなんだけどな」

「あれのどこが天使だ！」

「いやね、もっと残酷な殺し方はあったんだけど、心優しい僕はそれを実行しなかったんだよ」

「まあいいや、このスキルニルはもらっておくことにするよ」

「ところでウェールズ殿下亡命なさるのですか？」

「いや、ニューカッスルで華々しく散るつもりだ」

「なぜですか！生きていれば何度でも再起が可能なのに」

「だけど亡命はできないのさ、亡命すればアンリエッタに迷惑がかかる」

「本人がどう思っているかは、わかりませんけどね」

「ウェールズ殿下これを」

「ん？これはなんだい？ヴァリエール嬢」

「アンリエッタ王女からの手紙です。」

十分後

アンリエッタ王女の手紙を読み終えたウェールズが言った

「やはり亡命することはできない」

「なぜですか！」

「私が亡命すればトリステインの民に迷惑がかかるからだ」

まあ確かにトリステインを攻め入る名目が立つな

「ですがウェールズ殿下、あの利権者どもは聖地奪還を目指しているから、適当な理由をつけてトリステインに攻め込むと思いますけどね」

間違ったことは言っていない、レコンキスタという組織は、掲げる

スローガンのために常に進まないと組織が維持できないのだからな

「た．．．確かにそうかもしれないが．．．」

「せっかく亡命してくれと言われているんですから好意に甘えればいいんじゃないですか」

「そうですよウェールズ王子」

「それに華々しく散つても、そのとき話に残りますが、ゆくゆくは忘れ去られると思います。

ここは、恥を忍んでも亡命すべきかと」

「王家というのは血筋を残して永らく繁栄してこそ意味のあるものです。あなた達がここで血筋を絶やしたら光栄あるアルビオン王家の血が絶えてしまうことになります。王族としての義務を果たしてください。」

「．．．．少し考えてくる」

数十分後

「．．．亡命することにする．．．」

「それがいいと思いますよ、ウェールズ王子」
だが、アンタが王位につけるとは限らんがな

「そうですよウェールズ殿下」

「そう思うかい？ヴァリエール嬢」

「ええ」

トリスティンの国力を考えて言うんだな、そういうことは・・・まあわからんだろうが。

数十分後

ニューカッスル城が見えてきた。

さてどうやってジェームズ王を説得しようかな？

27話

あの後ニューカッスル城の秘密の港に到着し、最後の晩餐に参加することになった。

「あれ？ミス・ヴァリエールあまり食べてないね」

「あれを見た後に、食事を渡されても食欲はわかないわよ！」

「ハハハハハ！そうかい」

「アンタは平気なの？」

「もちろん」

「そうよね、アンタ悪魔だもん」

「悪魔とはひどいな」

「本当のことじゃない」

こんな感じでしゃべっていると・・・

「諸君！聞いてほしいことがある！」

「は！なんでしょう？ウェールズ殿下！」

「私は悔しい！あのような不忠者たちに国を奪われて！」

「だがここで華々しく散つても無意味だ！」

「なぜでありますか！」

「確かに我々が華々しく散つたときは語り継がれるだろう・
・だが！いずれ忘れられるだろう！」

「なので私は、光栄あるアルビオン王家を残すために、そしてアル
ビオン王国を再興するために！」

「トリステインに亡命することに決めた！」

「おおー！！」

「アルビオン王国万歳！」

「アルビオン王国に栄光あれ！」

2時間後

私はジェームズ王に謁見していた。

「おぬしがあやつを説得してくれたのだろう？」

「いえ、決断したのはウェールズ殿下です。ただ私は、王族とはど
ういうものかということを少し教えただけです。」

「そうか・・・だがおぬしには感謝している。あやつを決心させて
くれて」

「そうですか・・・」

「何かわしに用なのか？」

「そうです。これにサインしてもらいたくてここに来ました。」

「こ・・・これは！」

その書類には、簡単に言うとサウスゴード伯爵とモード大公の罪を許す事とティファニアに王位継承権を認めることと書いてある。

「これはサインできん」

「なぜですか？」

「あやつは、エルフを妻にしておったのだ」

「あれはデマですよ」

無論嘘だが・・・

「何！」

「これがモード大公の娘の絵です。」

といって写真を見せた

「な！耳が丸い！」

まあ、私が整形したわけだが

「そうですよ、彼女はハーフエルフではありません。」

「・・・そうだったのか・・・」

「ジェームズ王陛下」

「エルフを妻にしていると、言ったのは北部貴族だったでしょう？」

「確かにそうであつた……」

「南部貴族と王家との溝を生ませるために、仕組まれた罠だったという事ですよ」

「もちろん嘘だが、言ってきたのは北部貴族だから（情報を流した）信憑性は高いさ」

「ジェームズ王陛下……貴方は北部貴族達に嵌められたのですよ……」

そして憎しみを北部貴族達に向けさせる

「お……おお……」

悲しみにくれているな……

「すまなかつたな……エドワード……」

「これに王印をお願いします。」

「う……うむ……」

書類に印を押した。

フフフ……これで完了だな……

「ありがとうございます。」

「あとこれを後で差し上げますね……」

といって書類を見せた。

「む？いいのか？」

まあその内容には、大中の中古艦艇10隻に、ミニエー銃^{モンキーモデル}6000丁、前装式ライフル砲30門、軍資金に500万エキューをアルビオン王家のみに渡すという物だった。

まあこれだけあれば、4000人くらい兵を集めることはできるだろう

「ええ、どうぞ」

「すまん」

まあ、こちらもティファニアを女王にするために、軍を編成しているがね……

歩兵は15000人、騎兵4000人、装備は、スナイドル銃にスパンサー銃 改良型アームストロング砲
だからね、格が違うのさ……ちなみにすべて元アルビオン人で構成されているからね

「では失礼します。」

そして深夜……

アルビオンの宝物庫に床から侵入して

風のルビーと始祖のオルゴールを奪い、変わりにその二つによく似たレプリカを置いていった。

ちなみにそのレプリカちゃんと反応するが、教えられるスペルはと
ころどころ間違いだけだね

だから全力を出しても効果は5分の1なんだけだね

自分の脅威になるようなものは、前もって排除をするんでね……
そして岬の周りにc4や火石を仕掛けまくったからな……
ニューカッスルの宝物庫で夢中になって略奪しようとしている瞬間
にドガンと爆破しようかね

翌朝

イーグル号とマリィ・ガラント号に分乗して王党派の兵士達は、
ラ・ロシエールへ向けて出発した。

私たちも一路キールへ向かった。だがニューカッスルには偵察用ガ
ーゴイル「ニンジャ」を置いていった。

「敵が来たな……何もないのに……」
映像受信機で様子を見ていた

「これを見ていると滑稽なものですね」

「敵は突入しても何もなく爆破され岬ごと空へ死のダイブですか・
」

「フフフそうさ……すばらしいだろ？」

「ええ」

「お！来たな！」

『ワアアアアア！！』

すごい雄たけびだな・・・

ドガン！

『なんだ？誰もいないぞ？』

『いや！わなに違いはない！』

『よし！どんどん城に突入させる！』

『了解！』

十分後

『うわ！ガーゴイルだ！』

そこには昔私が趣味で作ったターミネーター-1がいた。

昨夜秘密でニューカッスルに10台置いてきたのだ

ただこれ、作るのものすごくコストがかかるから30台しか作ってないけど

後の20台は、研究所の護衛をしている。

『ウーーン・・・「テキヲハツケン、コウゲキカイシ」』

『ダダダダダダダ』

『ぎゃアア！』

『グワ！』

『な・・・何なんだあのガーゴイルは！』

『ものすごい勢いで銃が連射されているぞ!』

『逃げる! 化け物だ!』

『ダダダダダダダダ』

『ぎゃアアア!』

『逃げるな! この先には宝物庫があるのだぞ!』

『そ・・そうだった! いくぞ!』

『グエア!』

『ギエ!』

『ク・・クソ! ファイアb・・』

ファイアーボールを詠唱しようとしたメイジは、蜂の巣にされた。

『すごいな・・』

『ええ・・・敵が可愛そうですね』

『よし! 頃合だな! 「ニンジャ」をニューカッスルの外に退避させよう』

十分後

『フッフ大量の兵が突入しているな』

「ええ」

「では！世紀の瞬間を！」

「楽しみですねフリードリヒ様！」

カチ

チユドドドドドドドーン！……！！！！！！

ガラガラガラガラチユドーン！ガラガラガラガラ

ニューカッスル城のある岬ごと爆破され

次々とレコンキスタの兵たちが空に落ちていった。

「見ろ！人がごみのようだ！」

『ウワアアアアア！……！！』

『助けてクレー……！！！！！！』

「ハ―ハッハッハッハ―！」

「すごい映像ですね」

「ああ！こんな映像取れる機会なかなかないからとって置こう！」

「ええ！」

十分後

「さてと大方終わったな」

「ええ」

「敵もだいぶ減ったでしょう」

「そうだろうなまさか岬ごと爆破されるなんて夢にも思わなかっただろう」

「そうですね」

「さてと、ニンジャも爆破するか」

「そうしましょう、証拠が残らないように」

「では「カチ」」

ドン！！

「ではキールへ向かうとしましょう」

「そうだな」

キールへ戻った後1日かけて学院へ戻った

28話

あれから1ヶ月がたち

今日から夏期休暇です。10日後にウィンドボナでパーティーがあるらしいので

領地に戻ることにしました。

「久しぶりだな、領地に戻るの」

「ええ」

「今日来た報告書に面白いのがありますよ」

「なにに……メタルギアZ E K Eにクリサリスにピースウォーカーが完成……」

「しかもそれぞれ5機づつ……」

「すごいですね……」

「ああ楽しみだ」

といいながらヘーパイストスに乗った

3日後

「おお！これはすごい！」

目の前にメタルギアとピースウォーカーがあつた

「すごいですね」

「俺たちこれを作るのに苦労したんだぜ」

「よくやってくれたな」

「ああ」

「これで戦争に負けることはないな」

「まあそうですね」

「次は、メタルギア r a y にメタルギア月光にそれを運用するアーセナル・ギアを作ってくれ」

「ああ、まあ趣味だからな、オリジナルもがんばれよ」

「んゝ俺も作りたいなゝ」

「はは！無理だな、お前は忙しいからな」

「くっ！当たっているだけに反論できん」

「まあがんばれよ」

「わかったよ」

「フリードリヒ様、時間です。」

「ああ、わかった」

7日後

今は帝都ウィンドボナのシェーンブルン宮殿にいる。

幾多の宝石がきらびやかに光り

周りでは、華やかなクラシックが演奏され、幾多の貴族、貴婦人が踊っている。

そして笑い声とそこで交わされる陰謀も含めた噂や情報

皇帝閣下が出るということになって周りにはたくさんの貴族が居るそんな中パーティー嫌いの青年が一人、赤髪の青年としゃべっていた

「はあ・・・パーティーは嫌いだ・・・」

「まあまあそう言わずに・・・」

「テラスでチェスをしようよジーク」

「今日はだめです。踊ってもらいますからね」

「えゝそんな」

「そんなもこんなありません!」

「ちっ! まあいいか」

絶対抜け出してやる

「私がつちり監視しておきますからね」
く! 読まれたか

「わかったよ」

『アルブレヒト3世閣下のおなぐり』

「来たね皇帝閣下が」

「ええ」

皇帝閣下の周りからは、支配者としての威厳がにじみ出ている・・・
いや、すごいね・・・私もある程度は出せるが、あそこまでは出せないな
為政者としての風格がすごいよ・・・

「さてと、料理を楽しむとするか・・・」

「そうですね・・・」

数分後

『ゲルマニア第一皇子、皇太子ヴィルヘルム殿のおなぐり』

「来たか、ヴィルヘルム殿下」

腐れ皇子の登場だ！絶対コイツが即位してもいいことはない！
俺を扱き使う気だ！あいつは優秀なのに怠け癖があるからな・・・
まあ俺もだが・・・

「心の中で悪態をついていたでしょう？」

「まさかそんなことはない！」

「嘘おっしやい」

『父上ご機嫌麗しゅう・・・』

ヴィルヘルムは屈託なく微笑んでいた。・・・微妙に怖い・・・

『うむ』

「・・・」

おゝおそんなこといって心にもないことを・・・

「ヴィルヘルム皇太子殿下ですか・・・」

「すばらしい皇太子殿下だ、即位したらさぞゲルマニアはさらに繁栄するだろうな」

俺を扱き使つてな！

「フフ・・・そうですね・・・すばらしい手腕を使ってこの国をお治めになるでしょうね」

そう人を扱き使いまくるといふ、使われるほうからすれば、いやになるという手腕がな！

その後も次々と皇族がパーティー会場に入っていった

『第3皇女マリア様のおなゝり』

ああ・・・私の婚約者だったな・・・彼女は・・・

たぶん結婚したら尻をしかれるんだろうな・・・

なにせ、あの腐れ皇子の妹だ、なので彼女自身能力は優秀だしね・・・

ただ優秀すぎるゆえに若干気が強いのもあいまって、普通は12歳くらいで婚約者が決まるのに

並の大貴族の子息じゃあ耐え切れないだろうから、どうしようかと考えていたら

私が目に留まったわけだ……まあ私もマリア殿下が婚約者でよかったよ……

婚約者がバカだったらいやだからね

私が10歳のときに始めてあったんだっけ……それから3カ月ごとに出会っていたな

いろんなこと聞いてくるもんさ……しかも姫君なのに父に影響されたのか

政治と軍事に興味を持っているなんて……これじゃあ寄り付かないわけだ

「フリードリヒ様の婚約者が来ましたね」

「そうだね」

「マリア様が来てくれるならば、クルップ家は安泰ですね。」

「まあそうだろうね」

自分の子供は、能力値が高いようにコーディネートして生まれさせよう

私とマリアあの教育があれば化け物が生まれるな

さて十数分たち

パーティーに参加している貴族達は、再びパーティーを楽しみ始めた

「さてとつとどうしようかな」

「フリードリヒ殿」

「これは、マリア殿下何か御用で？」

「ええ、ダンスでもどうかと？」

「といって笑みを浮かべていた・・・どうやらダンス嫌いということを知っているらしい
だが断れないので

「ええ喜んで」

そして踊り始めた

「あら？結構お上手で」

「ええ、これでも結構仕込まれているんですからね」

といいながらダンスを踊った

そして

「ジーク、飽きた。テラスで休憩する。君も手伝え」

「はいはいわかりましたよ」

「あら私も少し疲れましたの一緒に行こうかしら」

「じゃあマリア殿下も一緒にどうぞ」

「ええそうさせてもらっわ」

十数分後

「じゃあ『錬金』」

チエスの駒と盤を錬金した

「さて今日は勝たせてもらうよ」

「いえ私が勝たせてもらいますよ」

「あらあら楽しそうじゃない、どんな勝負が見れるか見物だわ」

20分後

「むむむ・・・どう動こうか？」

「どう動かされますか？フリードリヒ様」

「少しフリードリヒ殿が少し追い詰められていますわね」

10分後

「フッフどうだ！ジーク」

「むむむ・・・これは・・・」

「あら盛り返してきたわね」

10分後

「チェックメイト！」

「な！・・・負けました・・・」

「フリードリヒ殿が勝ったようですね」

「いやあああの時はやばかったよ」

「やはりあの時こうしたのがいけなかったのか？」

「でもお二人ともすごい打ち手ですね、なかなか見られませんよあ
あいう勝負」

「そうですか？」

「さてそろそろ戻るとしますか」

「えー・・・まあいいか」

「それじゃあ戻りましょう」

<ドガアアアアン！！>

<パリパリパリパリーン>
と宮殿のほうが発した

こうしてフリードリヒの長い長い夜が始まった。

29話

宮殿のほうが発火したため私は急いで宮殿の中に向かった。

「くそ！一体どうなったんだ！」

私も若干傷を負った、だがこれくらいなんともなくヒーリングをかけてすぐに宮殿へ向かった。

「警備兵はいつたい何をしていたんだ！」

「とにかくフリードリヒ様！グスタフ様を探しましょう！」

「ああ」

「どこです！どこです！父上！」

周りは地獄絵図だった。

あちこちで貴族達が悲鳴を上げていた。

「……うつ……たすけてくれ……」

「……うぐぐ……ぐ……」

「アアアーーーー！腕が腕が！」

「つく！とにかく父上を探さなければ！」

「ジーク！見つけたか？」

「いえまだです！」

「絶対見つけるぞ！」

「はい！」

ダッダッダッダッダ

「くそ！どこです！父上！」

「どこだ！どこだ！どこだ！」

一応肉親であるから失いたくないしな、3年前に母は死んでしまっ
たし……

ああいい母上だったのにな……

「あーいたぞ！ジーク！いたぞ！」

「本当ですか！今行きます！」

結構ひどい傷を負っていた。

「う……ぐぐ……フリードリヒか……」

「大丈夫ですか？父上？」

「……ぐぐ……あんまり……」

「ただいま来ました！」

「よし！ヒーリングをかけるぞ！」

「はい！」

2人でヒーリングを掛け捲り何とかひどい傷を治すことができた。

「大変だ！帝都でクーデターだ！」

「何！」

「帝都は危険ですね、領地に帰りましょう！」

「ああ！そうしよう・・・で？閣下は？」

「残念ながら・・・。」

「そうか・・・ではヴィルヘルムは？」

「ヴィルヘルム殿下も・・・残念ながら・・・。」

「どうか・・・くそ！良い友人をなくした！」

「兄様が・・・そんな・・・。」

「マリア姫殿下・・・一緒に来ますか？」

「ええ・・・行かせてもらっわ・・・帝都にいても危険なだけだし」

「では急ぎましょう！」

「ああ！」

ジークは父上を担ぎ急ぎ自分の使い魔のところへ向かった。
私も同様に自分の使い魔のところへ向かった。

「ヘーパイストス！帝都から離れる！行くぞ！」

「アテナも頼むよ！」

『どうやら外が騒がしいと思ったらそういつことか・・・よしならば
急ぐぞ』

ああ頼むよ

「では行くぞ！」

「はい！」

十数分後

「目の前から竜騎士が迫ってきます！」

「敵か味方か！どっちだ！」

「どうやら敵のようです！」

「ちっ！」

ヘーパイストス！プレスでどうにかなるか？

『大丈夫だ主、ぜんぜん必中圏だ』

では頼む

『了解した』

ボオウ！ボーン！

すさまじい勢いでファイアーボールが放たれた。

ボガアアアン！！

竜騎士は、竜ごと黒焦げになった。

もう一体の竜騎士は、アテナのウィンドカッターで真っ二つになった。

「よし！急いで領地へ行くぞ！」

「はい！」

それから何回か追撃を受けたがどれも瞬殺して逃げた

翌朝

無理していつもよりかなり速い速度で飛んでもらい

何とか領地の屋敷に着くことができた。

「だ・・旦那様！」

「一応深い傷は処置をしたが、まだ治療が必要だ！医務室へ連れて行ってくれ！」

「は、はい！」

「あと皇女殿下はお疲れだ！寝室へ案内しろ！」

「わかりました！」

「フリードリヒ様はどうなされるので？」

「私は指揮をとる！急ぎ参謀本部へ向かう！幕僚達に参謀本部へ向かえと伝えろ！」

「は、はい！では車を準備します！」

「ああ、頼む！」

数時間後

参謀本部にて

「帝都でクーデターが起きたんですか！」

「ああそうだ」

「これは危険ですね・・・」

「最悪独立も考えなければいかんかもな」

「独立ですか・・・」

「ああ」

「デフコンを2まで引き上げますか？」

「そうしよう・・・もう戦時みたいだな」

「そうですね」

バアン

「ただいま報告で帝都はクーデター軍によって制圧されたという報告がありました。」

「皇帝閣下の子供達はことごとくとらわれ処刑されたそうです。」

「そうか・・・」

「これにより、皇帝閣下の直轄軍が敵に回ることになりますね。」

「ああそうだな・・・警戒を厳にしろ」

「は！」

「モルトケ参謀総長！準備はできているか？」

「は！1年間の作戦行動が続けてできるほどの物資を蓄えております。」

「そうか・・・フリースランドに居る部隊にはこっちに戻ってくる

ように伝える」

「は！わかりました。」

「あと植民地軍もいったん休戦させて12000名をこちらに戻ってくるように伝える！大急ぎでだ！」

「了解しました」

「ふゝ・・・休むとするか・・・」

「そうなされたほうがいいですよ」

「では、私は、屋敷に戻るから急ぎの用があつたら屋敷に連絡しろ」

「わかりました」

これから1週間後

新皇帝ハインリッヒ4世が即位した。

しかも『（意識）北部と西部を皇帝の直轄地とする、だから寄越せ』
と言ってきた

多分南部貴族達に寄せられたんだろう・・・それに以前とは比べ物にならないほどに

強力になった皇帝直轄軍もあるから、力づくでも実行するだろうな

何せ、南部と中部ゲルマニアを持っているんだ、だから実行できる
と思っただろう

確かに中部ゲルマニアは豊かだからな・・・無論南部も・・・だがそれは一昔前の話で今は北部もぜんぜん豊かになってきている。特に北東部

つまりクルップ領は、別格だからな

それから2日後

ジユットランド半島を領土とする、ジユットランド王国

北西部ゲルマニアを領土とする、ハノーファー王国

中西部ゲルマニアを領土とする、ラインラント王国

南西部ゲルマニアを領土とする、バイエルン王国

北東部ゲルマニアを領土とするプロイセン王国

そして中部ゲルマニアの大部分と南部ゲルマニアを領土とするゲルマニア帝国に分かれた。

つまり、ゲルマニアは6つの国に分かれたしまった。

人口はジユットランド王国 100万人、ハノーファー王国200万人、ラインラント王国100万人

バイエルン王国250万人、プロイセン王国450万人、ゲルマニア帝国、700万人

国力比は一番低いラインラント王国を1として

ジユットランド1 ハノーファー1.5 バイエルン3 プロイセン8 ゲルマニア10

30話

独立から1週間後、領土拡大とゲルマニア帝国と雌雄を決するために、ゲルマニア帝国に侵攻することにした。ゲルマニア帝国もプロイセン侵攻のために軍を中部ゲルマニアに集結させていた。

目標はシュレージエンと旧ザクセン選帝侯領にズデーデン地方の上半分を占領すること。

ハルケギニアはかなりの衝撃をもって、プロイセンによるゲルマニア侵攻を目撃することとなる。

まったく新しくかつ、恐ろしい戦術 彼らはこれを『電撃戦』と呼んだ。

『電撃戦』では、戦車や爆撃機を敵陣への斬りこみに用いて、敵の前線を突破し兵力を孤立させていく

そして歩兵隊や砲兵隊、装甲車隊によって包囲し、壊滅させるのだ

制空権の確保には、戦闘機を使い、敵の施設への奇襲に用いる。

その後人口の多い地帯を、爆撃機で空爆する。

装甲師団は、砲兵隊や爆撃機に援護され、鉄道や主要な道路などの交通網の破壊などを行う

すばやく、徹底的なこれらの奇襲攻撃は、敵を早期に降伏させるために考案された。

プロイセンのゲルマニア侵攻軍の総兵力は6万人である。皇帝軍は総兵力は8万人だが、各地に散らばっており、まだ集結していない。装甲師団の機動力を使い、皇帝軍を各個撃破する戦法を使うことにした。

そしてゲルマニア艦隊が多数集まっているキール軍港にも奇襲攻撃をかけ占領することにした。

担当するのは、第一機動艦隊、第2艦隊　総司令官はティルピッツ提督

空母3隻　戦艦2隻　巡洋戦艦3隻　重巡洋艦4隻　軽巡洋艦5隻
駆逐艦24隻　護衛空母2隻

航空機240機　輸送艦10　強襲揚陸艦10　海兵12000の
大兵力で攻め込むことになった。

sideフリードリヒ

「これだけ兵力があれば大丈夫だろう」

「ええ」

「これよりゲルマニアへの侵攻を開始する！全軍前進！」

「了解しました！」

「今頃は、キール軍港への奇襲攻撃が始まったところだろう。」

side out

side 海軍パイロット部隊長

「見えましたあれがキール軍港です！」

「よし！そのまま突っ込めと伝えろ！」

「は！」

第一次攻撃隊120機がキール軍港へ向けて突撃していった。

十数分後

「あれは戦艦アルブレヒト3世号です！」

「よしそれを攻撃する！」

「はい！」

「そのまま・・・そのまま・・・撃て」

カチ ヒュウウウウン

side out

side アルブレヒト三世号乗組員

一体何なんだ！なぞの鉄の竜が攻撃してきている！

「くそ！一体何なんだ！あれは！」

「そんなことしている暇があったら、あいつらを撃ち落すぞ！」

「ガトリング砲台につけ！」

「はい！」

ガトリング砲台に着いた

「狙え！」

「敵が速すぎます！狙いが定まりません！」

「ええい！何とかしろ！」

すると敵の鉄の鳥が何かを落としてきた

ヒュウウウン ガコーン

何かすごい音を出した……でも確かそこって……

「逃げろ！弾薬庫に落ちたぞ！」

やっぱり……

「うわあああ！にげろー！」

「ひいひい！ー！」

カチ

チュドーーーーン!!

船首が吹き飛んだ・・・

「うわあああ!!」

「もうだめだ!」

「総員退艦せよ!」

「海に飛び込め!」

数分後

「私もボートに乗せてくれ!頼む!」

「俺も乗せる!」

「早くしろ!」

と言い争っている

ブーーーーン!

鉄の鳥がこちらに向かってきた。

「早く乗せる!」

「来る！来る！」

「鉄の鳥がこっちに来るぞ！」

バババババババババババ

機銃をこちらへ掃射してきた

「グワ！」

「ぎゃああー！」

「ゲフ！」

<ドス>

どうやら俺にも当たったようだ

くそ・・・俺の人生も終わりか・・・

side out

sideゲルマニア空海軍司令官

私は悪夢を見ているのか・・・

プロイセンが突如宣戦布告をしてきて準備しようとした矢先にこれだ

ドン！！！！！

「ええい！被害報告！」

「まだ定かではありませんが、旗艦が沈んだそうです！」

「何！」

そんなバカな……

「竜騎士は！竜騎士は何をしている！」

「すでに壊滅しています！」

「何！」

「鉄の鳥は風竜の最高速度の2～3倍のスピードで飛んでいるようです」

「なんと！」

チュドーン

「戦艦オイゲン号轟沈！」

「く！」

「何とかならんのか！」

「無理です！」

「くそ！」

s i d e o u t

その後4度にわたり攻撃を行い

敵艦隊総勢110隻のうち60隻は轟沈し20隻は大破 10隻は
中破 10隻は小破 の甚大な被害を与えた

ほとんどの大型艦は、轟沈するか大破した。

そしてキールを占領すべく

空母3隻と護衛のために駆逐艦8隻 軽巡洋艦2隻 重巡洋艦1隻
を残し

残りの艦艇でキールに突撃した。

上空には常に援護のために、80機の戦闘機と急降下爆撃機が待機
している

s i d e テイルビッツ提督

「キール軍港が見えてきました!」

「よし!総員戦闘配置!」

「了解!」

「急げ!戦闘配置に着け!」

「は
」

「それと上空の偵察機に弾着を観測するように伝えろ！」

「は！」

数分後

「総員配置に着きました！」

「よしそのまま攻撃開始の指示があるまで待機だ！」

「は！」

数十分後

「射程に入りました！」

「よし！撃て！」

<ズドドドドーン！！！！>

戦艦の41cm砲と38cm砲に副砲、重巡洋艦の20.3cm砲
がいつせいに火を噴いた

ヒュウウウウン

<ズガズガズガズガン！！！！>

「敵軽巡洋艦と重巡洋艦に命中！敵艦轟沈！」

「よし！再装填」

『了解！』

「再装填完了しました！」

「よし！撃て！」

<ズガズガズガズガン！！>

「敵駆逐艦、巡洋艦に命中！敵艦轟沈！」

「よし！この勢いで攻撃を続けるぞ！」

「は！」

s i d e o u t

s i d e ゲルマニア軍司令官

「何！敵艦隊がキールに突っ込んできた！？」

「はい！そうです！」

「クソ！どうする！」

「沿岸砲台で反撃しろ！」

「了解しました！」

ズガスガスズガーン

「巡洋艦2隻轟沈しました!」

「何!」

「ほぼ一撃で撃破されました」

「なんとこの威力だ・・・」

「こちらヘラクレス砲で応戦しろ!」

ヘラクレス砲とはキール軍港を守るために配備されている35cm
砲で10門ある

「は!」

s i d e o u t

s i d e テイルビッツ

「敵沿岸砲台攻撃を開始しました!」

「よし反撃しろ!」

「了解!目標!敵沿岸砲台!」

「狙え!」

「標準合いました!」

「撃て！」

<ズガスガスガスガーン>

ヒュウウウウ・・・ン

<ドカドカドカドカーン>

「敵沿岸砲台に命中！」

「よし！攻撃を続ける」

side out

side 沿岸砲台兵

「クソ！何だよ！あの馬鹿でかい戦艦の艦隊は！」

<チュドーンズガスガスガーン！！！！>

「うわあああ！！！」

「目が！目が！」

「ぎゃあああ！！！」

バラバラになった兵士の死体が大量に転がっていた。

「ここは地獄か・・・」

「お・・・おえー！」

「はいている暇があつたら撃て！」

「しかし弾が届いていないじゃないですか」

「稀に当たってもぜんぜん被害がなさそうだし」

ヒュウウン

「また来たぞ！伏せろ！」

「うわあああー！」

<チュドーンチュドーンズガスガスガーン>

「ぎゃあああー！」

「うわあああー！」

俺たちの地獄はいつ終わるのだろうか・・・

side out

side テイルビッツ

あれから20分後

「敵沿岸砲台沈黙！」

「よし！」

「敵巨大沿岸砲出現！」

「なに！」

「急降下爆撃機が沿岸砲を破壊するそうです！」

「そうか・・・頼むと伝えてくれ！」

「は！」

side急降下爆撃機パイロット

「あれが巨大沿岸砲か・・・」

「大きいですね」

「よし！あれを攻撃せよとの命令だ！行くぞ！」

「は！」

数分後

「食らえ！」

沿岸砲へ急降下して爆弾を投下した。

ヒュウウン

ズガーン・・・チウドチウドーン！！

「なんかすごい爆発を起こしたな・・・」

「弾薬が有爆したんでしょう・・・」

「すごい揺れかただったからな」

「ええ」

side out

side テイルビッツ

「敵巨大沿岸砲沈黙！」

「よし！」

「被害は？」

「我が方は、あの巨大砲の砲撃で駆逐艦2隻が轟沈 重巡洋艦が中破」

「そうか」

「しかし敵の抵抗は、ほぼなくなりました」

「よし海兵たちを揚陸させる！」

「は！」

s i d e o u t

s i d e ゲルマニア軍司令官

「・・・ヘラクレス砲に沿岸砲台もやられたか・・・」

「もう反撃できませんね・・・」

「そうだな・・・」

「敵揚陸艦が突撃してきました!」

「もう抵抗しても無理だな・・・」

「はい・・・」

「降伏する・・・」

「はい」

「白旗をあげるぞ」

「はい」

s i d e o u t

s i d e テイルビッツ

「敵は白旗を揚げました」

「降伏したか……」

「そうですね……」

「よし！捕虜達は収容所に送れ」

「はい」

「これで作戦完了だな」

「はい」

s i d e o u t

ちなみにこの戦いが終わった後もゲルマニアと停戦する2週間後まで、小規模な海戦は

いくつかおきたが、どれもプロイセン軍の勝利で、停戦時にゲルマニア空海軍に残された戦力は

戦艦1 巡洋艦4 駆逐艦10 フリゲート10だけだった。

開戦時の戦力は戦艦15 巡洋艦35 駆逐艦70 フリゲート100だった

そのうちの8割近くをこのキールの戦いで失った。

この戦力の回復のためにゲルマニアは、15年以上の歳月を待たなければいけなかった

s i d e フリードリヒ

「どうやらキール軍港奇襲作戦は、大成功のようだな」

「ええ」

「これで、制空権に制海権は、プロイセンのものだな」

「はい」

「さてと、次は陸戦の番だが・・・敵も士気が大きく下がっているだろうな」

「はい、艦隊が壊滅したんですからね」

「ああ」

「陸戦でも完膚なきまでに叩きのめして勝利してやる！」

「その息でがんばりましょう！」

「それにもうすぐで帝都に爆撃隊が向かっているからな」

「さらに敵の士気をくじくことができるでしょうね」

帝都爆撃隊 b-24 100機 改型ta152 200機（航
続距離を伸ばした）が向かっていた。

side out

side ハイリッヒ4世

「何！あの強大な艦隊が壊滅！？」

そんなバカなあの世界最強の艦隊が・・・

「嘘のようでございますが本当でございます」

「宣戦布告と同時に敵の大兵力による奇襲攻撃で、やられました」

「何をやっておったのだ！」

このままでは非常にまずい！陸戦では勝たなければ

ヒソヒソザワザワ

会議がすごくざわつき始めた

そしてあちこちで音信不通になっている施設がたくさんある。

「な・・・講和を結びましょう！制空権を取られては」

「何を言っておる！陸戦で勝てばよい！陸戦こそすべてなのだ！」

「何寝ぼけたこと抜かしている！」

「彼らに特使を送りましょう！賠償金で」

「やつらは、我らの領土が目的だ！賠償金程度じゃあどうにもならん！」

「ならば領土を割譲して・・・」

「まだ陸戦では戦っておらんだ！戦わずして逃げるとは何事だ！」

「プロイセン軍なんぞ一ひねりだ！我がゲルマニアの力を見せてやる」

「そうだ！そうだ！」

「バアン！」

「プロイセン軍があちこちから大兵力で信じられないスピードで侵攻を開始しました！」

「何！」

「このままでは次々と領土が奪われます！」

「絶対死守命令を伝えろ！」

「は・はい！」

「何言つておる！リューネブルク侯爵！食料も弾薬もそこまでないのだ！すぐに日干しにされるぞ！」

「大丈夫だ！我がゲルマニア軍は簡単には降伏はせん！」

「しかし士気が下がった状態で・・・」

「大丈夫だ！」

「ならば、リューネブルクに任せる。プロイセンを撃退して来い」

「は！この身をかけまして必ず撃退してごらんに見せます！」

ウー！ウー！ウー！

「な・・何事だ！」

「帝都に爆撃隊が来ております！」

「何！」

外を見るとウィンドボナが爆撃されていた。

ヒュウウン

ズドンズドンズドン

「竜騎士はどうしたのだ！」

「迎撃に向かっておりますが！敵戦闘機に阻まれています！」

「くそ！」

「あああ！帝都まで来たのか・・・」

爆撃機は次々と通常爆弾と焼夷弾を投下していった。

ヒュウウン！！

ズドン！ズドン！ズドン！

「帝都が・・・帝都が・・・」

相手にしてはいけないものを相手にした気がする・・・

side out

この空襲によって

工場や物資の集積場が軒並み焼かれ生産能力は低下した

市街地も焼かれ、ウインドボナの4分の1が焼失した。

その後も爆弾の代わりにプロイセン軍有利のビラがまかれまくり

これらのことによってさらに士気はくじかれた。

31話

あれから1週間がたち

今私はシュレージエン地方侵攻軍の指揮をしている。

ちなみにジークは、旧ザクセン領侵攻軍の指揮をしている。

中將の地位を与え、兵を運用するという能力においては、ジークのほうが若干優秀だからね

それにクリサリスにピースウォーカーも与え、勝利するだろう。そして向こうにはモルトケ参謀総長もいるから大丈夫だろう。

まあ私は、クリサリスにメタルギアZ E K Eを持ってきて来ているが

「マンシュタイン將軍侵攻状況はどうだい？」

「ええ、後2日でシュレージエンは完全占領できます。」

「敵がアホみたいに死守していたおかげで、簡単に包囲殲滅できたからね」

「一旦退くということも知らないんでしょうか？」

「たぶん、南部のアホ貴族の將軍が命令したんだろう」

「時には死守もいい方法ですが、この状況では意味がありませんね」

「おかげで早く敵を殲滅することができる。」

「ええ」

「2日前には最大都市ヴロツワフも占領しましたし」

「もうすぐだな」

「あとは、マルシヨヴィツ要塞だけだな、ここを落とせばシュレージエンは手に入れたも同然だ」

「捕虜の収容所が満杯になりそうなほど、捕虜ができたからな」
2つあわせて35000人くらいの捕虜ができた。

物資も弾薬もそこまでなかったし、包囲されて戦車と航空機に15cm榴弾砲と10,5cm榴弾砲にロケット弾の攻撃でズスタにされてすぐに降伏したもんな。

「はい」

「見えてきたね」

「はい、マルシヨヴィツ要塞に立てこもるゲルマニア軍12000ですね」

「要塞といっても最近できた野戦築城をかなり立派にした程度の要塞ですがね」

「だけど今までの要塞の中ではかなり落としにくいと思うな」

「確かにそうですね、塹壕が網のようになっていますし、有刺鉄線

やトーチ力で進みにくいですね」

「下手に進むと十字砲火の餌食だからな」

「ですがこちらには戦車がありますしね」

「そうだ歩兵しかいなかったらきついが、戦車があり航空機が大量にあるから簡単だな」

「はい」

「よし包囲しろ！」

「は！」

3 時間後完全に包囲した。

「よし砲撃を開始しろ！」

「了解しました！」

『目標！敵要塞！攻撃はじめ！』

< シュパシュパシュパシュパ <

b m - 2 1 のロケット砲が火を噴き

< ズドンズドンズドンズドン >

1 5 c m 砲と 1 0 , 5 c m 砲がいつせいに火を噴いた。

ヒュウウウン

<ズガズガズガーン>

トーチカや建造物が次々と破壊されたいった。

そして30分おきにやってくる爆撃隊の猛烈な爆撃

が続いた。

sideゲルマニア兵士

ヒュウウウウン

ズガズガズガーン!!

「クソ！これじゃあ死守も何も俺たちが死んでしまっぞ」

「ああそっだ！」

「塹壕の中に隠れているがそれでも当たるときは当たる！」

ヒュウウウウン

ズガズガズガーン!!

200メートル先くらいの塹壕に命中したようだ・・・

急いでそこにいった

「うぎゃあああ！！！！」

「腕がー！」

「落ち着け！」

ばらばらになった死体があちこちに転がっていた

「くそ！ぜんぜんこの雨のような攻撃はやまないぞ！」

「たぶん山のように砲弾が補給されてくるんだろっ」

「それに煙のようなやつを吐きながら飛んでくるやつもいやだ！」

グオーーーン！

「来た！鉄の鳥だ！逃げろ！」

「逃げろってどこに！？」

「うわあああ！」

ヒュウウーーン

ガガガガガガン！！！！

急降下爆撃機はクラスター爆弾を投下した。

そこにいた兵士達はほとんどが死んだ

s i d e o u t

s i d e フリードリヒ

数時間後

「さて、敵は降伏してくるかな？」

「後もう少しでしょう」

「よし！仕上げだ！戦車隊と装甲車部隊と突撃歩兵部隊を突撃させよう」

「もちろん突撃歩兵は、装甲車に乗るか後ろからついて行って突撃する。」

「はい」

s i d e o u t

s i d e ゲルマニア軍兵士

「敵が突撃してきたぞ！」

「よし応戦しろ！」

「鉄の箱が突撃してきたぞ！」

「うわ！鉄線も意味がない！」

「くそ！食らえ！」

7.5cm歩兵砲を撃った。

<ドーン>

<ズガン！>

「やったか！」

<キュラキュラキュラキュラキュラ>

「何！ほぼ無傷！？」

<ズガン！>

<チュドーン！>

「うぎゃああー！」

「くそ！」

「もう無理だー！！！」

「逃げろー！！！」

<ダダダダダダ>

「ぎゃアアア!!」

次々と機銃で殺されたいった。

<バス>

「うぎゃあ!!」

意識が遠のいていく……ああ……しん……だ……のか

side out

sideゲルマニア軍司令官

絶え間ない雨のような砲撃

空からは鉄の鳥が死を振り撒いてくる……

「敵軍が突撃を開始しました!!」

「なに!!」

「戦車に装甲車が大軍で前進してきます!!」

「突撃を止め切れません！」

「く！」

「防御陣地が次々と突破されています！」

数十分後

「兵士達は次々と降伏していています！」

「・・・・・・・・・・」

「降伏しよう・・・」

「はい」

司令部から白旗があがった

side out

sideフリードリヒ

「降伏したか・・・」

「そうですね」

「もうちょっと粘ると思っていたが、あっけなかったな」

「はい」

「よし捕虜達は、本国の捕虜収容所へ連れて行け！それと再び侵攻を開始するからその準備も一緒に急ぐように」

「は！」

「緊急連絡です！」

「何だ？」

「旧ザクセン領を完全占領したそうです。」

「ち！先を越されたか！」

「こちらにも負けてられん！がんばるぞ！」

「は！」

敵の被害は、死者2500人 負傷者3000人 捕虜6500人

こちら側の被害は 死者200人 負傷者800人

3時間後次々と輸送艦がやってきて物資の補給を行い、空いたところに捕虜を敷き詰め
再び本国へ戻っていった。

そして2時間後再び進軍を開始した。

2日後シュレジエンを完全占領した。

さらに2日後、ザクセン領侵攻軍とともにボヘミアへ侵攻した。

sideハインリッヒ4世

もう会議は、ものすごく混乱している。ざわつきはとまらない

開戦当初は自信満々だったが、開戦から九日たち、今はもう顔が真っ青だ

「何！もうシュレジエンが占領された！？」

「ザクセン領もです。皇帝閣下」

「バカな！直轄軍が守っているんだぞ！」
陸戦でも負けたというのか

「敵は信じられない侵攻スピードで蹂躪してきたそうです。」

「おかげで、次々と包囲殲滅され各個撃破されていったそうです」

「しかもボヘミアへ侵攻する準備をしているという情報もあります」

「なんと！リユーネブルクあやつはどうしたのだ？」

「戦死なされました。」

「ち！役に立たないやつ」

「我こそはと思うものはおらんのか！？」

「講和なされたらどうでしょうか・・・」

「ええい！もともと開戦しようといったのはそなた達ではないか！」

「プロイセンなんぞ一ひねりだと！言ったのはそなた達ではないか！」

「そ・・・それは・・・」

「しかし閣下が、最終的にお決めになったこと、私たちに責任を転嫁しないでください！」

「なんだと〜！」

「今言い争っていてもいいことはありません、とにかく迎撃の準備をしなければ・・・」

「それもそうだ！だれかおらんのか！」

「あんたが行きなさいよ・・・」

「お前こそプロイセンなんて一ひねりといっていたじゃないか・・・」

「それは言葉の弾みというやつだ・・・」

「とにかく誰か手を上げてくれ・・・」

「お前があんなこといったんだ責任を取れ・・・」

「カラレス将軍が喜んで志願するそうです。」

「な！・・・わたしはそんなこと・・・」

「おお！カラレス行ってくれるか！」

「は・・・はい！身に余る光栄にございます」
畜生！おぼえていやがれ

「ではそなた達も、諸侯軍を供出せよ」

「は・・・はい」

sideフリードリヒ

「ジーク、久しぶりだね」

「はい」

「このボヘミアを占領したらゲルマニア帝国方面への侵略は一旦停止だな。」

「ん？もつと行くと思っていましたか？」

「工業化がなされている中部ゲルマニアがほしかったからな」

「そうですか」

「代わりにハノーファーとジュットランドへ侵攻を開始する。」

「北部をすべて手に入れるためですね。」

「そうだ」

「しかし、これまでの戦いでゲルマニアは、最新兵器を装備した直轄軍を8割近く失ってますよね」

「そうだ、なまじ死守命令なんて出されたから、退くこともできなかったんだろっ」

「おかげで簡単に包囲殲滅できましたけどね。」

「そうだな、多分これから戦うのは、旧式の装備を持つ諸侯軍だろうな」

「簡単にボヘミアも取れそうですね」

「ああ」

「ボヘミアでは、あれも使うんですよね」

「そうだ、あんまりにも簡単に勝ち続けることができたから、使うことを忘れていたよ」

「楽しみですね．．．あれの雄姿をみるのが」

「敵を次々となぎ払うだろうな」

「フッフ．．．ハハハハハ！！」

3日後

ボヘミア最大都市プラハの郊外15リーグ地点で戦闘は始まった。

「敵軍は．．．直轄軍20000に諸侯軍50000か」

「まだ直轄軍が残っていたんですね」

「諸侯軍も50000も出てくるとはな、さすがにやばいと南部貴族達も思っただろう」

「こちらは、50000ですね」

「よし！両翼に部隊を集中させて中央に穴を開けるとしよう」

「あれを置く為ですね」

「そうだ！コントローラーも持って来たしね」

「敵が慌てふためく姿が楽しみだ！」

数時間後

sideカラレス將軍

「プロイセンなんぞ一ひねりだ！全軍突き崩せ！」
絶対に無理だろうな・・・

「お・・・おおー！！！」

「ウムその意気だ！」

士気は、ものすごく低いし・・・勝てる要素はほとんどないな・・・

「て・・・敵軍に巨大ガーゴイルが出現！」

「なに！」

sideout

sideフリードリヒ

「メタルギアZ E K E 起動せよ」

『ピピ・・・リョウカイ』

「よし、このノートパソコン型コントローラーで映像を見ながら操作をしてやるぜ」

「では敵軍へ向かって突撃！！！」

敵へ向かって全力疾走をし始めた

ガチャンガチャンガチャン

敵の声が聞こえてきた

『何だあの化け物』

『すさまじい勢いでこっちにきているぞ!!』

『なんて速さだ』

『クソ食らえ! ファイアーボール!』

『パーン』

『何! 魔法が弾かれた!』

そりゃそうだ、カウンターをものすごく焼き増してもらったからな。

それに装甲だってセラミック・チタン複合装甲だ、まずこの世界の兵器では倒せんよ

そして食らえこの電磁加速機関銃の威力を思い知らせたやる

4門付いている電磁加速機関銃がいつせいに火を吹いた!

<ダダダダダダダダダダ!!>

「うぎゃああああ!!」

「ぐわあああー!!」

「ぐえええ!!」

「な・・何なんだ!あの銃は!」

「逃げろ!ここにいたら死んでしまう!」

そして逃がさないように、足の裏に車輪を出しロケットエンジンを
使い高速で移動した。

無論機銃掃射も続けている、脚部の装甲の中には人工筋肉を使っ
ているから迅速で滑らかで複雑な動きをすることができる。

キュイイイイン!!

『ウワアアア!!』

『逃げろー!』

『ものすごく速く移動しているぞ』

『逃げ切れない!』

『グワアアア!!』

<バキ!ドカ!グシャ!バキ!>
相当な数の人間を轢いているな

よし後退しよう

後ろへ大跳躍をした。

『なんだ！跳んだぞ！』

『あの巨体が跳ぶなんて・・・』

フッフこのレールガンの威力を見せてやる・・・
弾頭は超高純度の火石だからな・・・

フッフ・・・敵の集団の中心に照準をあわせて・・・

発射！

<カキョーン！>

<チュドーーーン！>

『な・・・何なんだ！！』

『いきなり大爆発したぞ！！』

『1000人部隊が吹き飛んだぞ！！』

『逃げるーーー！』

『死ぬぞーーー！』

『逃げてても無駄だーー！殺される！』

<カキョーン！>

<チュドーン！>

『また消滅したぞ！』

『ウワアアア！！』

<カキョーン！>

<チュドーン！>

<カキョーン！>

<チュドーン！>

<カキョーン！>

<チュドーン！>

しばらくレールガンを掃射していると白旗が揚がった

そして捕虜達は、収容所へ送ったが、上層部の貴族達は皆殺しにした。

「すごい威力だな、ZEKEは」

「ええ」

「とんでもないものを作ってしまったな」

「はい、でもすごいですね」

そのときの俺たちの目は、最高の玩具見つけたような目をしていたという。

捕虜は50000人、死者は18000人、負傷者は20000人だった

そして1週間後ボヘミアの占領が完了した。

ボヘミア占領から1週間後

アーヘン条約が結ばれた。

この条約で

プロイセンのボヘミア、シュレジエン、旧ザクセン領の領有

賠償金3億エキュを払うことと

プロイセン商人を優遇することとプロイセン商品に関税をかけないことが明記された。

アーヘン条約が結ばれてからすぐに、ハノーファー、ジュットランドへ電撃戦を仕掛け

わずか5日間で占領することに成功した。

この結果、プロイセン王国は北部と中部ゲルマニアを領有する国家となった。

ラインラント王国にトリステインとの国境地帯を割譲することにした。

あんなめんどくさい国と国境を接するなんてごめんだからな

人口は1100万人となった。

早速占領地では、洗脳教育を行うことに決めた。

国力比も トリステイン 1 ラインラント 1、5 ロマリア 1 バ
イエルン 3

ゲルマニア 6 ガリア 1 2 プロイセン 1 3 となった。

そして私はマリアと結婚することになった。

個人的には、政略結婚はいやだし、国を吸収されかねないし

仮にこちらが吸収するとしても、足手まといが増えるだけだ

それに結婚したやつがバカだったら迷惑だからな

そしてまず、貴族は存在させるが領地を持つことは認めないし、私有軍を持つことも認めないし徴税権も認めないと公布した。

憲法もきわめて君主権が強くなるように作った。（憲法自体ほかの国にはなかったがな）

つまり君主の力が極めて強い国家が完成した。

議会も作ったがこれも権限は弱い。

国家の運営は、君主とその直属の国家戦略会議（人員10名）が行うことになる。

その下に内閣が存在しており9つの省が存在する。省の長は尚書と呼ばれる

軍も陸空海統合して参謀本部に直属とした。

軍の中で対立されていたらいやだからな

32話

あれから2週間後、正式にゲルマニアから『プロイセン公国』として独立することになった。

父上はプロイセン公グスタフ1世となった。まあ私は第1公子となった。

なぜ公国になったかというと・・・

回想

sideフリードリヒ

「何！『帝国』と名乗れないだど！」

バカな！我々は、いまやハルケギニア1国力を持っている国だぞ

「教皇聖下は、帝国を名乗ることができるのは『ゲルマニア』だけだとおっしゃられています」

「どうやら、『坊主より我々を信じろ』という教育と『プロイセン国教会』が気に食わないようだな

「そうですか・・・ではなぜ『大公国』を名乗れないんですか？」

「ここプロイセンが未開の地であると教皇聖下がおっしゃったからです。」

へへ未開の地ね・・・宗教的には未開かもしれないが、科学技術、

魔法技術ではほかハルケギニアの国々よりも隔絶して高いぞ……
よって軍事力も生産力も隔絶して高い

「だから『公国』なんですね」

「そうです。」

じゃあもうこいつらに、利権をくれてやる必要はないな、せつかく
新大陸を手に入れたのに

残念だったな……元からあった利権もくれてやらないでおう
国家として侮辱を受けたからな……傲慢な坊主どもに天罰を加
えてやる。

ここで青筋出しても意味がないな……引き下がるか……
だがやることは代わらんがな

「わかりました。ベネディクトウス枢機卿猥下」

こいつらが助けを求めてきても、絶対に助けないでおう

「では、失礼します。」

ガチャン

「……………」

「あの俗物坊主どもめ」

「許しがたいですね……………ロマリア」

「あいつら『始祖の代弁者たる私たちの逆らうなんて信じられない』
というおめでたい思考回路
をもっているんだろうな」

「そうですね」

「君もそう思うかい？マリア」

「ええ」

「あんなアホ坊主とも相手しているよりかは、東方の国と国交を持ち交易したほうがいいに決まっている。」

「そうですね、あんな俗物クソ坊主と相手しているよりかは、エルフのほうがよっぽどいいですわ」

回想終了

独立宣言から1週間後

「さてと……トリステインと『外交』を始めますかな」

「ええ、はじめましょう」

私は衛星電話を取り（1年前に偵察衛星と通信衛星を打ち上げた）

「デーニッツ提督」

「はい、フリードリヒ殿下」

「トリステインで例の作戦を実行せよ」

「了解しました。」

夕方キール軍港から艦隊が出撃した。

測量艦隊 巡洋戦艦1 重巡洋艦2 軽巡洋艦3 駆逐艦8

旗艦巡洋戦艦シャルンホルスト

翌朝

sideデーンツ

「トリステイン最大の港、ジーブルージュの近くに着きました」

「そうか、よし今回の任務であるジーブルージュの測量に入るぞ」

「は！」

「ジーブルージュ沿岸砲台がこちらに砲を向けておりますが」

「かまわん、続ける」

「は！」

15分後

ズドーン！

そして600メートルほど先に水柱が立った

「沿岸砲台が発砲しました」

「この様子は撮ったな」

「はい」

「よしモーターボートを引き上げろ！」

「了解」

数分後

「モーターボート引き上げました。」

「よし、敵はまだ攻撃してくるか？」

「はい」

「よし、反撃だ！目標沿岸砲台！」

「一般人がいるようですが」

「かまわん！向こうが攻撃してきたから悪い」

「戦闘配置に着け！」

「了解！」

「距離は？」

「3200！」

「よし」

「急げ！急げ！」

「戦闘配置に着きました。」

「よし砲弾を装填せよ」

「装填完了」

「狙え！」

「照準合いました！」

「撃て！」

<ズダズダズダダーン！>

いつせいに28cm砲に20、3cm砲、15cm砲が火を噴いた

<ズドーンドンチュドーン！>

「敵沿岸砲台に甚大な被害を与えました。」

「敵は全滅したか？」

「いえ、まだです」

「ならばまだ攻撃を続けろ」

「は！」

8分後

「敵沿岸砲台沈黙しました。」

「そうか」

「港にいるトリステイン艦隊が発砲！」

「反撃しろ！」

「了解！」

「狙え！」

「撃て！」

<ズドズドズドズドーン！！>

ヒュウウン

<ズガスガバガンチュドーン！>

「敵巡洋艦、駆逐艦轟沈」

「まだまだ砲撃を続ける」

「は！」

20分後

トリステイン海洋艦隊は壊滅した。

「敵艦隊壊滅しました。」

「よし、港にいる船と港の施設もすべて破壊しろ」

「了解しました。」

20分後

「目標、港湾施設」

「狙え！」

「撃て！」

<ズガン、ズガスガスガーン！！>

ヒュウウン

<チュドーン！ドカドカドカーン！！>

「港に命中！」

「まだまだ続ける！」

「了解」

50分後

港にいる船も含め港湾施設のすべてを破壊した。

「完全に破壊しました。」

「よし！撤退だ」

「了解しました。」

side out

sideフリードリヒ

「デーニッツ提督はやってくれたか」

「これで、トリステインは我々の要求を呑むだろう」

「ええ、ここまで力の差というのを見せれば必ず飲みますわ」

「フッフ・・・あがりまくったアホ貴族どもにわれらの力というものを見せたからな」

「さてこの映像は、証拠になる」

「国籍不明艦をいきなり砲撃したんだからな」

「我々のしたことは、あくまでもこのことの報復行為だからな・・・」

「まあ、すごい報復ですわね。沿岸砲台の壊滅、艦隊を壊滅させて、港を完全破壊」

「まあいいじゃないか・・・我々の国益のために・・・」

「この条件をトリステイン貴族達は認めるかしら？」

「飲まなざるおえないはずだ、ウェールズ王子を匿っているおかげで、レコン・キスタに真っ先に

トリステインは侵攻されるだろうからな」

国力の面でもトリステインは小国だからな

「条件を飲まなかったら、トリステインを蹂躪するのがレコンキスタから我々プロイセンに変わるだけだ」

「そうですわね」

side out

このことは『ジューブルージュ事件』と呼ばれた。

数日後、マザリーニ枢機卿の元にこの事件の責任を求める書状が来ることとなる。

sideマザリーニ

「なんてことをしてくれたんだ！ラ・ラメル侯爵！国籍不明艦隊を攻撃するとは」

「よりによって、その艦隊が、最近にできた新興の大国、プロイセン公国の艦隊だったなんて」

「このことで責任を求める書状が来ているが・・・」

「姫殿下・・・これは・・・きついですね。」

この書状にはこうかかれている

『（意識）トリスティンにこのことへの責任を取ってもらいたい、我々はこの条件を認めてくれたら、貴国への矛を収めようと思っている』

1、プロイセン商人を優遇すること。

2、プロイセンの商品に、関税をかけないこと。（つまりトリスティンの関税自主権を認めない）

3、プロイセン人がトリスティン国内で犯罪を犯した場合、プロイセンの領事館でプロイセンのほうで裁判をする。その場で無礼打ちすることを認めない。

（つまり、領事裁判権を認めるということ）

4、ジーブルージュに租界を作る事を認めること。

5、ジーブルージュ租界を守るために軍隊の駐留権を認めること。

これらのことが守られない場合、我々は再び報復処置をとるだろう。

この条約は、トリスティン＝プロイセン通商修好条約と呼ばれる。

「こんなこと認められません！」

「しかしアンリエッタ殿下、今は認めるしかありません！レコンキスタが不可侵条約を結んでいるとはいえ、いつ侵攻してくるかわかりません！無用に敵を増やしてもいけません！それに相手は、新興国とはいえ大国です。」

「相手は公国ではないじゃないですか！」

「公国とは名ばかりです！実態は、ガリア以上の国力を持つ大国です。」

「しかし！格下の新興国にここまで挑発されては引き下がれません！」

「ですが……これほどまでの力の差を見せ付けられましたから……認めましょう」

「これ以上攻撃されたらたまりません」

「……相手から何か引き出せないんですか？」

「多分無理でしょうね」

「借款でも借りることがいいんですが……」

「戦費の不足が顕著ですからね……貴族達の金がほとんど謎の力ジノに吸い取られていて、借金までしている貴族が多数いますからね……諸侯軍の資金不足が」

2年位前に作って最近本国へ戻したカジノが、ここでトリステインに多大な負担をかけていた。
ちなみに稼いだ金は、ほとんど今のプロイセン公家に入ってきている。

「は〜〜〜」

心配事が尽きない

side out

sideフリードリヒ

「なになに、借款として5000万エキュを貸してくれだって」

「無理に決まっているじゃないか、今からさらに国土を改造するんだから」

「そうですね・・・無理だということを伝えましょう」

「肝心の条約のほうはどうなんだ？」

「ええ、飲むようです。」

「そうか・・・これでトリステインを半植民地化できるな」

「はい」

「国土も改造しなければ・・・まず主要都市を工業都市化か金融都市化しなければな」

「話は変わるが、ゲルマニア帝国は、南に領土を求めることにしたらしい」

「現在ハンガリアとトランシルヴァニア公国、ワラキア公国、モルダヴィア公国への侵攻準備をしているとのほうくだ」

「ゲルマニアも国力回復のために必死ですね。」

「まあそうだな」

「我々は、市場を東方と新大陸に求めるとするか」

「プロイセンの更なる繁栄を……」

「ええ」

これから4ヶ月後に、新大陸はプロイセンによって完全占領された。

33話

翌日私は、東のポーランド・リトアニア連合王国への侵攻を命令した。

ポーランド・リトアニア連合王国の人口1200万人であり、国力もそれなりに高いが

400万人のポーランド人が、800万人のゲルマン人を抑圧支配しているため、ポーランド人支配に対するゲルマン人たちの怨み辛みの声が上がっているが、ポーランド人は騎馬が得意であり陸戦ではかなりの強さを誇っているため、反乱を起こしてもすぐに鎮圧されるが多々あった。

今まで、ゲルマニア帝国はゲルマン人解放のために、何度か出兵したがその騎馬軍団の強さと

ゲルマニア帝国とポーランド・リトアニア連合王国の国境は、魔の森（幻獣と亜人が多い森）が多いため補給が困難なこともありいずれも失敗していた。

しかし、8年ほど前からのクルツプ軍による魔の森掃討作戦で、魔の森は大減少しておりかつ、今の近代装備で固めたプロイセン軍装甲師団なら、楽々侵攻可能だと判断したからだ。

それに、数年前に王が死んで今は、実質王位は空位状態であり政治は貴族議会が運営していた。

そのため、結束が弱くなっており近年国力はさらに低下していた。

そこで人口と領土確保のためにポーランド・リトアニア連合王国への侵攻を決めた。

4日後、ポーランド・リトアニア連合王国の国境に演習と称して10万の兵を集結させた。

sideフリードリヒ

私は今参謀本部に電話をかけている。

「モルトケ参謀総長」

「はい、殿下」

「白作戦を実行せよ」

「は！」

白作戦とは、ポーランド・リトアニア連合王国侵攻作戦のことで、侵攻軍は2つに分かれており、A軍団は東プロイセンから敵国の首都ワルシャワへ向け侵攻し

B軍団は、ボヘミアから敵国の第2首都クラクフへ侵攻したあと、第3首都キエフへ向け侵攻することになっている。

「成功しそうか？」

「はいほぼ100パーセント成功します。」

「そうか……」

s i d e o u t

翌日の早朝プロイセン公国は『抑圧されているゲルマン人解放』のために、ポーランド・リトアニア連合王国へ宣戦布告し侵攻した。

s i d e マンシュタイン

私は、B軍団の指揮を任されクラクフへ侵攻している。

「クラクフまでは、後どのくらい時間がかかる？」

「後6時間ほどです」

「そうか」

「敵は驚くでしょうな」

「そうだな」

我が軍は、ハルケギニアの軍隊の平均的な進軍スピードの10倍の速さで進軍しているからな

s i d e o u t

s i d e クラクフ守備隊兵士

夜

「今日も何もないな」

「そうだな」

「平和が一番だよな」

「うんうん、仲間とのみに行つて」

「あゝ早く時間が過ぎないかな」

「飲みに行きたいんだろ？」

「そつだよ、この前は飲み損ねたからな」

「そうか」

「ん？何だあれは？」

「えゝどれどれ・・・」

「なんだろう・・・」

「て・・・敵だ！」

「な！速く連絡しなければ！」

<ズガン>

「うわ！撃ってきた！」

ヒュウウウン

<ドゴーン!>

「ぎゃあああ!!」

物見台にいた兵士達は、戦死した。

side out

sideマンシュタイン

「物見の兵士達は始末したそうです。」

「よし!クラクフを包囲しろ!」

「は!」

「翌朝敵の慌てふためく姿がよく見えそつだ」

side out

その後、2時間かけ万全の体制でクラクフを包囲した。

翌朝

sideクラクフ守備隊司令官

「何!包囲されているだ!」

「はい・・・」

「宣戦布告からまだ1日しかたつてないぞ！」

「しかし確かに包囲されています」

「敵の数は？」

我々の数は7000だからな

「およそ40000は超えているでしょう。」

「そのような大軍がわずか1日でここまで到達するとは……
敵は化け物か……」

「しかしこのクラクフは鉄壁の2重城壁を誇る要塞都市ですから」

「確かにそうだな1週間ほど耐えれば援軍が来るか……」

「1週間くらいはこのクラクフだったら楽々耐えられますしね」
しかしこの後この考えは誤りだったことに気付くことになる。

side out

sideマンシュタイン

「よし敵の第1防壁へ向け砲撃開始！」

15cm砲と10.5cm砲が四方八方からいつせいに火を噴いた

<ズドンズドンズドンズドン>

<バガンズガンダガンバガンズガーン!!>

「敵の防壁に甚大な被害を与えました！」

「よしそのまま攻撃を続ける」

「は！」

その後5斉射ほしたら円形の城壁は10箇所ほどとても大きな穴を開けた。

そして門も破壊した。

「よし突入！」

「は！」

4方からそれぞれ8000人の兵が突撃を開始した。もちろん戦車や装甲車、ジープに乗って

そして市街戦に突入した

side out

side クラフ守備隊司令官

<ズガーーン！<

「な！・・・」

「城壁が破壊されました・・・」

「これで籠城戦はできないな・・・」

「もう一つの城壁があるじゃないですか！」

「それもあの敵の大砲に壊されるだろう」

「・・・」

「バン！」

「敵が見たこともない鉄の箱に乗って進撃してきます！」

「何！」

「鉄の箱の上にはまわる大砲が付いており、そこから発射される砲弾は信じられない威力を持っています！弓もぜんぜん効きません！」

「しかも敵は、雨のように連射する銃を持っているようで、次々と味方は戦死しています。」

「・・・降伏しよう・・・」

「・・・はい・・・」

「このまま抵抗しても無駄死にするだけだ」

「はい」

こうして司令部は白旗を掲げた

s i d e o u t

s i d e マンシュタイン

「敵は降伏したか」

「はい」

「よし！武装解除をさせて補給に来る空中船に、捕虜たちを詰め込み本国の収容所へ連れて行け」

「は！」

そしてクラクフに入城した。

数時間後

補給に来た空中船に捕虜たちを詰め込んだ。

この戦いでの損害は

プロイセン軍 死者15名 負傷者100名

ポーランド軍 死者1300人 負傷者2000人 捕虜3700人

プロイセン軍がクラクフに入城すると、市内のゲルマン人たちから

『プロイセン軍万歳』

『解放者プロイセン万歳!』

『プロイセン公国万歳!』

と万歳三唱されて歓迎された。

よほど前の支配がひどかったんだな

そして1日後

治安維持のために3000人ほどを残してキエフへ向けて進撃した。

それから数時間後

sideポーランド・リトアニア貴族議会

「プ・・プロイセンが侵攻して来ましたぞ!」

「ど・どうなされるのです!」

「あの装備が更新されて強大化した、ゲルマニア皇帝直轄軍に全滅に近い損害を与えた軍ですぞ」

「ここは講和で穏便に・・・」

「何を言っておる!まだ一度も矛を交えてないのだぞ!ここで降伏してどうする!」

「しかし全滅した後では遅いのですぞ！」

「その噂はデマかもしれん！」

「ええい！結論はどうなのだ！」

「議長！そうせかさないでください！」

「しかし一刻を争う事態なのだぞ！」

「どうなされるのです！」

「と・・・とにかく今は情報の収集を・・・」

バン！

「ワルシャワより80リーグの距離にある砦が破壊されました！」

「何！もうそんな距離に・・・」

「まるで疾風だ・・・ア・・・悪夢だ・・・」

バン！

「次は何だ！？」

「クラクフが陥落したそうです！」

「何！？あの鉄壁の2重防壁の要塞都市が陥落したのだと！」

「そ・・・そんな・・・」

「わずか1日で陥落したそうです・・・」

「敵は化け物か!」

「どどど・・・どうなされます?」

「こうなったらワルシャワの郊外で決戦だ!準備しろ!」

「勝てる保障がありませんぞ!」

「戦いとはいつも勝てるかまけるかわからないものだ!」

まあ普通は戦う前からほとんどの場合勝敗が決しているか・・・

「わ・・・わかりました!急いで準備します!」

side out

2日後A軍団60000の兵が到達するまでに、ポーランド軍は45000の兵をかき集めた。

34話

プロイセン軍A軍団と集結したポーランド軍が、ワルシャワ郊外で対峙していた。

sideモルトケ

ふゝむ・・・これだけ速く進軍したから、敵は少ないと思っ
たが・・・

45000もいるとは予想外だったな・・・

「よくあれだけこの短期間で集めたな・・・」

我々でも2日間で45000も兵を集めるのは結構難しいぞ

「根こそぎ動員をしたらしいですよ」

「なるほど・・・」

「見た感じ、張りぼての軍隊という感じのが否めませんね」

「まあそうだろうな」

クルップ領では、予備役制度が6年前から始まっているからな。

急に徴兵されてもましな動きはできるように訓練されている。

「しかし騎馬軍団は立派ですね」

「そうだな・・・ポーランド軍の最精鋭だな・・・あれは」

ポーランド軍最精鋭軍団、装飾重騎兵軍団 人員は8000人

あれには、旧ゲルマニア軍がポーランドに侵攻した際、何度もゲルマニア軍部隊を

全滅もしくは壊滅に追い込んでいる……

「ですが我々には、重騎兵より恐ろしい戦車があります。」

「あの重厚な装甲と苛烈な攻撃力で、あの忌々しい騎兵たちをなぎ払ってくれるでしょう。」

「そうだな……できればこの戦いで、ポーランド戦役の決着をつけたいな」

「はい、アルビオンもきな臭くなって来ましたし」

「それに、戦争というのは金がかかる。このポーランド戦が終わったらしばらくは、動かないだろう」

「そうですね」

副官と会話をしていると

「敵軍進撃開始！」

「よし！砲撃準備！」

「了解！」

数分後

「敵軍射程に入りました！」

「よし！」

「撃てー！」

<ズガ！ズドズドズガン！>

15cm砲に、ロケット砲、120mm迫撃砲が火を噴いた。

ヒュウウン

<チュドーン！ズガズガチュドーン！>

「ん？敵への被害が思ったより少ないぞ」

「敵はゴーレムや壁を作って砲撃をしのいだそうです。」

「そうか、ならもつと過激に砲撃しろ！」

「は！」

「しかし砲身の寿命が・・・」

「気にしないでよい！」

「はは！」

side out

それからポーランド軍へ後に『鉄の暴風』といわれるほどの砲弾が降り注ぐことになる。

side ポーランド兵

<ズンズガンズドズガン>

ドガスダドカズガン！

「うわ！」

「ぐぎゃああ！！」

「だれだよ！プロイセンは弱兵ばかりだといったやつは！」

「敵の大砲には、装填時間というのがないのか！？」

「大砲の連射なんて悪夢だ！」

「騎馬隊も陣形が崩壊しているぞ！」

「も・・・もうだめだ〜！」

「ええい！突撃せんか！」

「犬死をしるといわれるんですか！指揮官殿！」

「どうせ敵歩兵は弱兵だ！」

「しかし！」

「敵の陣地まで後650メートルだ！後は突っ込んで敵を叩き潰す！
それだけだ！」

「何言っているんですか！」

すると敵の陣地から銃声が聞こえてきた。

<ズダーン！タタタタタタ>

「ふん！あんな遠くから銃弾が当たるか！」

「うぎゃあ！」

「うわああ！」

「何！そんなバカな！？届くはずが！グワ！」

「クソこのままじゃあ全滅だ！」

「メイジたちは何をしているんだ！？」

「ほとんどが死んでいるか、精神力切れた」

「くそ！」

「最強の騎馬隊は？」

「雨の如く撃ってくる銃になぎ払われて、ほとんどがやられた」

「何だつて!？」

「ここにいて突撃しても、騎馬隊がやられた銃で俺たちもなぎ払われる」

「逃げよう」

「それに俺たちはもともとゲルマン人だ、なぜポーランド人どもの手助けをしなければならない」

「そうだな、ただ虐げてくるだけだったし」

「逃げよう!お前らもここにいたら死ぬぞ!逃げろー!」

「そう・・・そうだな・・・」

「うわあああ!」

「こら逃げるな!」

「うるさい!」

「死ね!ポーランド人!」

「うぎゃあ!」

「逃げるぞ!」

「おう！」

S i d e o u t

S i d e モルトケ

「敵軍は崩壊し始めたな」

「はい」

「戦軍隊、装甲擲弾兵部隊突撃せよ！」

「は！そう伝えます！」

S i d e o u t

S i d e ポーランド軍司令官

「我が軍は崩壊を始めました！」

「くそ！」

「鉄の軍団が突撃を開始しました！」

「ぬ・・・どのようなものだ鉄の軍団とは？」

「鉄の箱の上に旋回する大砲があるものでその大砲は信じられないほどの威力を誇るそうです。」

「・・・それは破壊できるのか？」

「いえ、大砲に当たってもびくとしなかったそうです。」

「おわったな・・・」

「次々と部隊単位で降伏し始めました。」

「そうか・・・もはや我々の負けだ、撤退しよう」

「首都へ籠城なされるので？」

「いや、城壁はあの大砲で簡単に破壊されるだろうし、市街戦でもあの連射する銃で

我々が一方的にやられるだろう」

「・・・」

「敵軍が降伏勧告をしました。」

「逃げてもすぐに追いつかれるだろう・・・降伏しよう」

「はい」

side out

こうして『ワルシャワ郊外の戦い』は、プロイセン軍の圧倒的勝利で終わった。

この結果、ポーランドの主な貴族は、戦死するか捕虜となった。

3日後リトアニア大公がポーランド王スタニスワフ2世としてミンスクで即位するが

その2日後の『ミンスク郊外の戦い』で王が捕虜となる大敗を喫して無条件降伏した。

そしてミンスクで講和条約が結ばれた。

この条約は『ミンスク条約』と呼ばれるもので内容は、

1、ポーランド・リトアニア連合王国は、北部と西部の土地をプロイセンに譲ること。

2、領内のゲルマン人を解放すること。

3、賠償金として6億エキュを支払うこと（ポーランドの国家予算の2、5年分）

4、領事裁判権を認めること。

5、プロイセン商人を優遇すること。

6、貴国の関税自主権を認めない。

これでポーランド・リトアニア連合王国は、大国から小国となり、プロイセンの事実上の属国となった。

人口は3分の2を失い、領土も3分の1となった。

プロイセンは、これで人口は2000万人となり、領土も現在のスカンジナビア半島、

デンマーク、ラインラントを除くドイツの北半分、ポーランド、ベラルーシ、バルト3国、非公式だが中米と南米の北部、フロリダを有するようになった。

これらのことにより、人口も、国力もハルケギニア最大国家となった。

sideフリードリヒ

「さて、少なくとも4ヶ月は、戦争は中止だな。ゲルマニアからの独立戦争、そしてジユットラント、ハノーファーへの侵攻、そして今回のポーランド侵攻」

「これらの戦争で、金を使いすぎた。戦費は合計で3億5000万エキューだぞ・・・近代戦って金がかかるな・・・今までの戦争だったらかかっても1億エキューなのに・・・」

「トリステインの国家予算の7年分だな」

「ええ、父上」

「ですが、ゲルマニアとポーランドから奪い取った金とアルビオンから内戦で搾り取った金がありますから大丈夫です。」

「うむ、そうだな」

「では、余った賠償金は国内の開発に使うことにしましょう。」

「まずは、鉱山の開発、工場の建設、鉄道の敷設に要塞線を構築するようにしましょう。雇用を生むために」

「そうだな・・・」

「今回の一連の戦争で、人口は爆発的に増えましたからね、労働力には困りませんよ」

「フフフ・・・われらもずいぶんと力を持ったものだな」

「まあ、いいじゃないですか」

「そうだな」

「それと、さらにガリアとロマリアにイナゴの卵をばら撒くことにします。」

「なるほど、食糧不足に陥らせるのか」

「それとビラを撒いて、国民を反乱へ扇動する事にします。」

「食糧不足と、それに伴う平民たちの反乱か・・・」

「ええ、これでわれらが介入してつぶす予定のレコンキスタをガリアに先取りされないようにしますし

うまくいけば、ガリアの国力を落とすことができます」

「ロマリアでの敬虔なる信徒たちの反乱は、ブリミル教の権威に傷

をつけることが可能ですし」

「そうだな」

「それに、最近ロマリアの腹黒教皇が、聖戦を発動しそうなので、聖戦をできる状況でないようにすることが必要です。」

「確かにな・・・面倒だな」

「ええ、従わなければ異端だ！と言って来るでしょうし・・・」

「なぜ？聖戦なんぞするのだ？この時期に？」

「どうやら、虚無の使い手がいるから成功する！と思っているんじゃないですか？」

「あそこは、風石と石油が豊富に取れるが、ほかは砂だらけだぞ」

「それに、風石の暴走で陸地が浮くと抜かしているそうです。」

「まあ、確かにあんなに地中に風石があつたら浮くでしょうが、旧ゲルマニア領はもうそれを採掘し始めていますしね、浮くことはないでしょう。」

「そうだな・・・」

「なおさら聖戦の発動は面倒だな・・・」

「敵の侵攻に対応できるようにトリステインとラインラントとバイエルンの国境線に要塞線を構築しましょう。」

「そうだな」

「後は、ガリアと同盟を結ぶことにしましょう。」

「ん？バイエルンとは結ばないのか？」

「あの国は、もうロマリアの牝牛と化しているで信用できません。」

「確かにそうだな・・・それとすまないがお前には、トリスティン魔法学院に復学してもらう」

「なぜですか？アルビオンが今にも侵攻してきそうなのには？」

「向こうがいろいろとうるさいからだ」

「なるほど・・・しかし私が人質みたいですね・・・」

「何お前の護衛に2000人の武装親衛隊をつけるし、学校の中でも護衛できるように、ジークフリードとプロイセンからの留学生として、おまえの親友たち5人をつけるから大丈夫だ」

「なら大丈夫そうですね」

「道中には、親衛隊第1艦隊をつけるからな」

「ありがとうございます。では行ってまいります。」

「まあがんばれ」

「はい」

こうしてトリスティン魔法学院に復学することになった。

35話

今は、親衛隊第一艦隊旗艦に乗ってラ・ロシエールへ向かっていきます。

「あゝこんなことになるならジープブルージュを壊さなければよかった。」

「港の機能も破壊したんですね」

「今思うと少しやりすぎだな」

「しかも道中に、アルビオン艦隊が我が艦隊に襲うかもしれないな」

「そのときは返り討ちにしますよ」

「まあ、そうだけど」

親衛隊第一艦隊の編成は

戦艦2 巡洋戦艦1 重巡洋艦3 軽巡洋艦6 駆逐艦15 空母2

「でもトリステインは、ろくに準備していないって聞くよ」

「不可侵条約を信じているんですよ」

「絶対レコンキスタは破れると思うけどな」

「私もそう思いますが……」

「ラ・ロシエールまで後どれ位でつくんだい？」

「あと6時間ほどです」

「ありがとう」

バン

「ご報告します！」

「どうした？」

「アルビオンがトリステインに宣戦布告したそうです！」

「そうか、……で？」

「現在アルビオン艦隊は、トリステイン艦隊を攻撃して撃滅しているそうです。」

「それだけか？」

「はい、現在は」

「わかった、さてと無線を使って警戒体制にさせるか」

「『全艦艇に告ぐ第2種警戒態勢を発令する。周囲を嚴重に警戒せよ』」

「は！」

4時間後

「報告！」

「ん？どうした？」

「アルビオン艦隊は現在ラ・ロシエールを破壊して、タルブへ向かったということです。」

「そうか・・・タルブのうまいワインが飲めなくなるな。」

「そうですね」

「さてと、ラロシエールへ向けて一応進撃しろ」

「はい」

「しかし、発着場は破壊されているのでは？」

「プロイセンの軍艦は、一応どこでも着陸することができるんだよ」

「ああ、そうでしたね」

「さてと、『長距離偵察ゴーレム戦況観測君1号』をタルブに向かわせるか」

「ネーミングはどうにかならないんですか？」

「そこを言っな」

「それじゃ、タルブへ行って来い」

ヒューーーン

「いったか」

「さてと、モニターでどうなっているか確認しなければ」

「それと、やっぱりラ・ロシエールはやめて我々の租界のジープルーージュへ向けて進撃しろ。」

「は！わかりました。」

3 時間後

「おーおーやってるね」

「きゃああ~~~~!!!!」

「うらあ~~~~!!!!」

「阿鼻叫喚の地獄絵図ですね」

「さてと・・・まだトリステイン軍は来ていないのか？」

「そのようですね」

「これでタルブは壊滅したな」

「ええ、どうやら領主のアストン伯爵は、戦死したようです。」

「そうか」

「フリードリヒ様ジープルージュについたそうです。」

「僕は、ここにいるから租界防衛のために陸戦隊は、上陸して簡単な防衛線を築けと言ってくれ」

「はいわかりました」

こうして、自分の護衛の2000人の親衛隊と8000人の海軍陸戦隊が上陸した。

1時間後

「トリステイン軍が到着しましたね」

「遅いな……しかも数が少ないし」

「そうですね」

「トリステイン軍は、司令は……アンリエッタ王女ですね。」

「うわ！大丈夫かよ、お花畑王女で」

「いえ、横にグラモン元帥がいますので、多分お飾りです。」

「お！やはりギーシュ来たか」

「ええ、彼はグラモン元帥の子息ですもんね」

「ああ、そうだったな・・・戦死しなければいいな」

「数は、2000ぐらいですね」

「あゝ・・・大丈夫かな？」

「さあ？」

「レコンキスタ側の司令官は、ヘンリー・サー・ホーウッド提督です
ね」

「あの提督は有能だからな」

「数は、10000ほんです。」

「ん？いくらトリステインが小国といったって10000は少ない
んじゃない？」

「多分、上層部に疎まれたんでしょう」

「あゝ・・・なるほど」

「ですが、士気も錬度も高いですね」

「装備もミニエー銃だな」

「トリステインの装備は・・・お粗末だな」

「国の内情を反映しているようだ」

「マッチロック銃か……」

「我が軍ではとっくに退役しているぞ」

「しかも数が少ないです」

「竜騎士隊もアルビオンのほうが多いですし」

「勝てる要素がゼロだな」

「はい」

「狙え！」

「まだ距離があるここまで弾が届くはずがない」

「1列目……撃て……!!」

「ババババーン!!!!」

「うわ！」

「グワ！」

「何!300メートルはあるのに!!」

「2列目撃て……!!」

『ババババーン』

どうやら4段撃ちをしているようだな。

『うわ!』

『グワアア!』

『ええい!突撃!敵は銃だ!接近戦には弱いはず』

『行け!』

『うおお!』

『撃て!』

『ダダダダーン』

『着剣!』

くガチャガチャガチャ>

『撃て!』

『ダダダダーン』

『突撃!』

どうやら乱戦に突入したようだな

『ウラ!』

『この!』

『ザシュ!』

『ドス!』

「このままだとトリステインは負けるな」

「ええ」

「上空の戦いは、アルビオンの竜騎士隊が押しているな」

「ふふふ、奇跡でも起きない限り・・・勝てないn・・・」

『ブーーン』

「ん?この音は航空機のエンジン音だな・・・トリステインは航空機を持っていないはずだが・・・」

「そうですね、持っているのは我々だけのはず・・・」

「ズームしてみよう」

「はい」

「あれは、竜の羽衣じゃないか!そんなバカな!」

「確か学園の郊外の私有地に滑走路を作って置いていましたね」

「人のものを勝手に持ち出すとは……」

「どうやら、あの無礼な使い魔が操縦しているようです。」

「ちっ！あいつめ！」

「後部座席には、ルイズ嬢が乗っています。」

「どうせ国の危機だとも言って接收したんでしょう。」

「それにあの使い魔の背中には、フリードリヒ様のお買いになった剣があります。」

「僕の部屋まで物色したのか！」

「アンロックは禁止ではなかったのか？」

「多分強引に入ったんでしょう」

「金も取られているのだろうか」

「そこまでは盗られていないと思いますが……」

「……まあいい……」

「どんどん竜騎士を落としていますね」

「ああ、そうだな」

「しかし我々には、脅威にもならないな」

「我々には戦闘機隊がいるからな」

実際、エースが相手だったら落とせるだろうし

「竜騎士がほとんど落とされましたね」

「そうだな・・・アルビオンの竜騎士隊ってこんなに弱かったっけ？」

「錬度が落ちたのではないだろうか？」

「内戦で？」

「ええ」

「しかしフネは落とせるでしょうか？」

「さあ？ロケット弾は、積んでいないから落とせないと思うが・・・」

すると巨大な火の玉ができて、船の帆を燃やした。

そして船は、風石が壊れたのか地上に緩やかに降下した。

「な・・・何だあれは！？」

「虚無ではないでしょうか？」

「とするとこれは『爆発』か・・・」

「すごいですね」

「ああ、だがあの威力を出すには、4ヶ月ほど貯めないといけないだろうな」

「微妙ですね」

「そうだな、最初にオンボロで旧式のフネの艦隊を前に出して、その艦隊を攻撃させた後
新鋭艦隊で攻撃すれば、被害が少なくてすむな」

「それにどうやらルイズ嬢は気絶なされたようです。」

「精神力が空っぽになったか」

「しかしアルビオン軍はその威力を見て、次々と降伏しています」

「そうだな、次に自分たちがあの爆発に巻き込まれるかもしれないからな」

「まあ、そのようなことはないですけど」

「あ！しかも竜の羽衣から煙が出ているぞ！」

「さっきのドッグファイトで何発か魔法が当たっていましたので、その影響かと」

「くそ！僕の大事なコレクションを！」

ゼロ戦は不時着して中破した。

「あゝ・・・・・・・・」

「後で請求書を要求してやる」

「まあそれくらいでいいでしょう」

1時間後

「アルビオン軍8000は降伏して捕虜となり2000はどこかへ逃げたか・・・」

「逃げた2000の兵は賊になるでしょうね」

「そうだろうな、賊の掃討にしばらく時間がかかるだろうな、トリステインは」

「まあ、そうですね。戦時になりましたから、フリードリヒ様の護衛を大幅に増やすことができますね」

すると書類がジークから渡された。

「しかしこれは護衛というのか？」

「護衛です。フリードリヒ様は、いまや1国の王位継承権を持っているのですから」

「だけど10000は多すぎないか」

「大丈夫です。戦時という理由でこり押しすれば」

「・・・・・・・・」

「まあいいか」

こうして、少し不安を抱えながら魔法学院に行くこととなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204w/>

とあるチート転生者

2011年10月19日21時01分発行